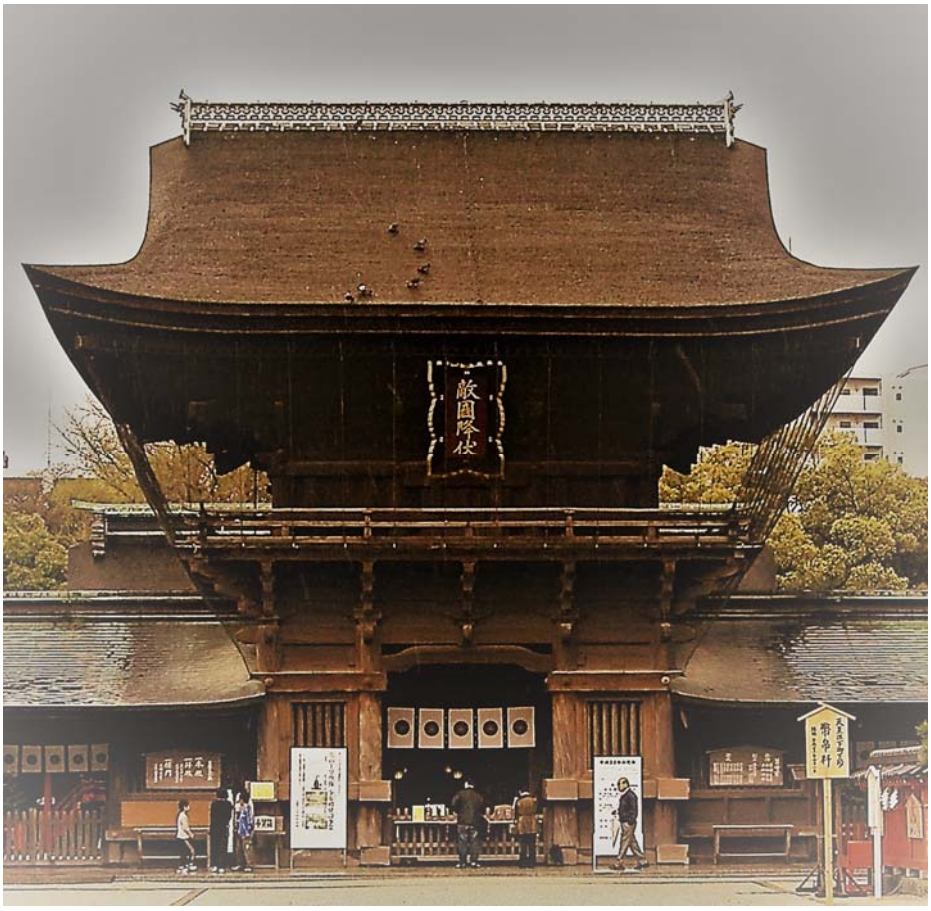
電子書籍

『絵詞』と元寇の考察

蒙 古 襲 来 考



福岡市筥崎宮

電子書籍

『絵詞』と元寇の考察

蒙 古 襲 来 考

「蒙古の大軍船に挑む」　矢田一嘯（いっしょう）・油彩・明治29年・靖国神社　遊就館

よみがえる明治絵画・修復された矢田一嘯「蒙古襲来絵図」福岡県立美術館より

「蒙古襲来絵詞」絵一・竹崎季長出陣　国立国会図書館デジタルコレクションより

2017年12月　　冬至　　池田　勝宣

はじめに

１３世紀の後半、日本は２度にわたる蒙古(元)襲来を受けた。この蒙古襲来は単なる蒙古合戦という合戦史という歴史のひとコマでなく、鎌倉幕府北条氏の政治体制の概念が崩れ始め、北条得宗家と御家人衆の間にほころびが表に現れた時期に重なる。

外国が日本国に襲来した唯一の事件、この襲来の実状を見事に伝えているのが『蒙古襲来絵詞』である。肥後国の御家人竹崎季長が、「文永の役」「弘安の役」に出陣し、その勇戦した顛末(てんまつ)を描いたものである。この絵巻は竹崎季長自身が主役で描いているのであるから、『竹崎季長絵詞』と称するのが本当かもしれない。

この絵巻物語は、研究対象に２面があり、1つには美術作品としての価値、今一つには『史料』としての日本史研究に使われる事である。『絵巻』はまさしく美術史と日本史の観点から考察する事ができる名作となっている。また、「元寇」という用語は、江戸時代水戸藩による『大日本史』の編纂時に使われた言葉といわれ、「倭寇」を逆転させて「元寇」という用語が生まれたという。

これ等の面白さを求めて、筆者は先ず蒙古襲来地を歩くことから始めた。現地ではどの様な受け止め方をしているのか、どの様な言い伝えがあるのか、それ等を見て感じてもらえるような探訪して、『蒙古襲来絵詞』の面白さを深めてみたいと思っている。考察的研究論文での結論を探るのではなく、訪問地での体感を出来る限り現場報告や、『蒙古襲来絵詞』の裏側の話等を含めて進める編集とした。

尚、述べる部分の考察は、その書籍の著者と、写真・絵図もその出処を明記した。『蒙古襲来絵詞』を通して、この旅をしたくなるような想いになっていただければ、筆者はこの上のない喜びであります。

２０１７年７月　　七夕　　池田　勝宣

対馬厳原町を早朝出発したらこの朝焼けに出会った

――目次――

はじめに		１
目次		２
第１部	『蒙古襲来絵詞』『竹崎季長絵詞』を拝観	３～３７
第２部	『絵詞』から見えてくること	３８～６３
第３部	蒙古帝国牒状から襲来まで	６４～１１４
第４部	追記	
	①神仏祈祷	１１５～１２１
	②「蒙古帝国国書」をどの様に捉えるか	１２２～１２８
	③竹崎季長の故郷東海郷を歩く	１２８～１３６
	④伏敵編	１３６～１４０
	⑤対馬郷土誌拾い読み	１４０～１４３
	⑥矢田一嘯の「蒙古襲来絵図」を拝見する	１４４～１４８
終わりにかえて		１４９～１５３

※Ａ４・横４０字×３０行　　計１５３頁

対馬厳原町から西北の海を望む

第1部・『蒙古襲来絵詞』・『竹崎季長絵詞』を拝観

１３世紀中頃、日本国を「モンゴル帝国」が２度襲った。即ち「元」帝国の大軍が２度に亘って襲来し、この異国襲来に鎌倉幕府の御家人、肥後国の竹崎季長が２度の合戦に出陣して勇敢に戦い、蒙古襲来の合戦模様を描いた絵巻が、『蒙古襲来絵詞』と呼ばれているものである。又、竹崎季長自身の戦勲物語であるから『竹崎季長絵詞』とも呼ばれている。（以下表記に『絵詞』・『絵巻』）尚、『絵詞』は７百余年の歴史を経た現在、『絵詞』の模本は１６種類（40 種類）の存在が確認され、模本の殆どは江戸時代に模写されたものである。現在、『蒙古襲来絵詞』の原本は宮内庁所蔵となっている。

明治２３年以前は、天草島の旧家大矢野家（大矢野城主）に伝わった絵巻で、その絵巻が江戸時代後期に、『絵詞』を前後２巻の『絵巻』に仕立て直したのが、現在の『蒙古襲来絵詞』となっている。この『絵詞』は優れた絵師の下で描かれ、朝廷の絵所の絵師によって作製されている事を物語っている。

今回『蒙古襲来考』編集にあたり現存する『絵詞』は、絵具等が剥げ落ちて不鮮明となっているので、一般的に画像が理解し易い国立国会図書館デジタルコレクションの『絵詞』を借用させていただいた。又、『絵詞』絵図の資料等は『日本絵巻大成１４・蒙古襲来絵詞』中央公論社、『日本絵巻物全集第 10 巻・蒙古襲来絵詞』角川書店、『御物・皇室の至宝１』毎日新聞社を借用した。参考文献は３７頁に示す。

文永の役・前巻

※『絵巻』の見方は右側より左へと見て行く

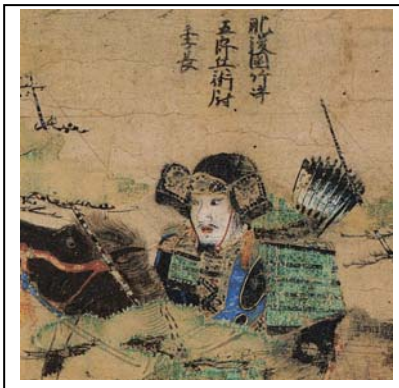
絵一（Ａ）、右端は筥崎宮の社家、注記に豊後国の守護大友兵庫守頼泰之手軍兵とあり、武具甲冑の細緻な描写、細かい線の躍動的な筆で描かれている馬、絵師の才筆を伺える。左端には筥崎宮の鳥居が見える。

絵一、三紙～七紙（５枚）に描かれている。（Ａ・Ｂ・Ｃ印）は説明のために入れた。
現在『蒙古襲来絵詞』には、**前巻**１０絵、**後巻**１１絵、合計２１絵。詞は、**前巻は**詞９、**後巻は**詞６となっている。

絵一（Ｂ）、徒歩の軍兵を従えた武者一行。馬は鹿毛、青毛、柑子栗毛など、珠の胸繋が彩りを添える
※注記に豊後国の守護大友兵庫守頼泰之手軍兵とあるが、宇都宮氏・その一族の武士団を描いているＡ・Ｂの絵については２部「宇都宮武士団と家紋」（59～62 頁）で述べる。

絵一（Ｃ）、中央注記に「肥後国竹崎五郎兵衛尉季長主従」が博多湾の息の松原を行く５騎。騎乗の主従、栗毛の馬に乗る季長、萌黄糸縅の大鎧を着け、星兜を眉深にかぶる若武者、群青の鎧直垂が美しい。

絵一(A)の左下に「筥崎の宮の鳥居」が見え、現在の福岡市の海岸近くにある筥崎八幡宮前の松原の浜辺を博多方面に進んでいる。**絵一(B)**は有力御家人と見えるが注記がない。**絵一(C)**前より３人目「肥後国竹崎五郎兵衛尉季長」と注記がある。左先頭で旗を持ち、乗馬の武士は「季長旗指、三郎二郎資安」と記し、「旗手」の後は季長の姉婿三井三郎資長と詞書より判明する。



竹崎季長の拡大絵図

季長の後ろが藤源太資光という郎党、全員で５騎の出陣は、竹崎五郎季長は乗馬、弓矢、兜、大鎧の出立。姉婿三井三郎は乗馬、弓矢、兜、大鎧の出立。籐源太資光は

乗馬、弓矢、烏帽子、腹巻姿。１名は氏名不明。旗指は三郎二郎、乗馬、旗、烏帽子、腹巻姿。兜をつけた季長、資長の２人は両肩から腕にかけて大袖(肩から上腕部を防禦)で保護しているが、残りの３人は肩を保護する小さな杏葉(防具)を着けている。絵一の(A)(B)の解説は２部「宇都宮氏武士団と家紋」で 59～62 頁で述べる。

絵二(上下右側より見る)上は息の浜、(地図 12 頁参照)下は**住吉鳥居**。　　**右は少弐景資の拡大**

浜に陣取る少弐景資の軍勢は「高き砂」息の砂丘に構える。注記に「太宰少弐三郎左衛門尉景資二十九歳　馬具足似絵　其勢五百余騎」とある。従者が牽く景資の馬は赤色の厚総や鞦を着け、虎皮を用いた鞍と泥障を着け合戦の大将に相応しい豪華な装備。上段右端に少弐氏の家紋「四目結」旗が見える。

息の松原(生の松原)　　やがて季長の部隊は博多前の海岸、博多の息の浜に到着し、息の浜には多勢の鎌倉武士軍兵がひきめき合っている。ここで季長はこの戦場で深く約束を交わしていた一門の武士、江田又太郎秀家とお互いの「兜」を交換する。それは、この時代の戦いでは戦闘の終了後、司令部に軍功を申告時に承認を得てから、軍功の恩賞請求する慣わしとなっていた。その司令部長の申告と承認を受ける際、当事

者の申告の正しさを証言する第三者が必要であり、これを「見つぐ」と云い、お互いに戦功を承認し確認し合い、それぞれの武功が確証保証し合える関係となる。「見つぎ、見つがれる」関係は、戦闘の際にお互いに助力し合う事で、戦場(いくさば)の状況の中で、目印としてお互いに「兜」を交換して被り合うことにしていたのである。

息(生)の浜では、武藤(少弐)景資(かげすけ)が合戦現場を仕切り、鎮西(ちんぜい)奉行などの主要な職は景資の兄の経資(つねすけ)が代行しており、景資は父の資能(すけよし)(当時 77 歳)の肥後国守護の代官を努めていたと思われる。そのため少弐景資や竹崎季長ら肥後国の御家人たちが、敵元軍の攻撃する軍事指揮権を持っていたと考える。

「文永の役」は、文永１１年(1274)１０月３日。「日の大将」(指揮官)は、「敵が進軍してくる赤坂(地図１２頁)の辺は、騎馬の戦いには不向きな場所(砂利や岩)だから、皆の衆はこの息(生)の浜に留まって敵を迎え撃とう」と大号令が出ていたのである。しかし、その中で季長一人は別行動をとり、わずか５騎で決然と前進を試みるのである。そして、季長は「日の大将」大将景資の前で、

「私、季長には事情がありまして、本領をめぐる「ほんそ(注)」に敗訴したため、若党たちを召し連れることができませんでした。そのため主従わずかに５騎の少勢であります。これではとても大将の御前で敵を倒して軍功を挙げることはできません。そこで、この５騎で肥後国の軍勢の一番乗りを果し、その軍功を鎌倉の将軍のお耳に入れて戴きとうございます」と告げた。

これを聞いた景資(かげすけ)は非常に好意的に、「よく分かった、この景資も果たしてこの合戦に生き残れるか分からない、もし存命であれば必ず貴殿の一番乗りの功名を将軍に報告する」と、季長を激励してくれた。その様子が**「絵二」**の右側中央鎧櫃(よろいびつ)にどっかり腰を下ろしているのが少弐景資である。緋縅(ひおどし)(紅や緋で染めた鎧)の大鎧を着こみ、左手には弓を持ち、まだ兜をつけず、烏帽子を被り、右手には軍扇を広げている。顔は白くぬられ、目鼻口など入念に描かれている。

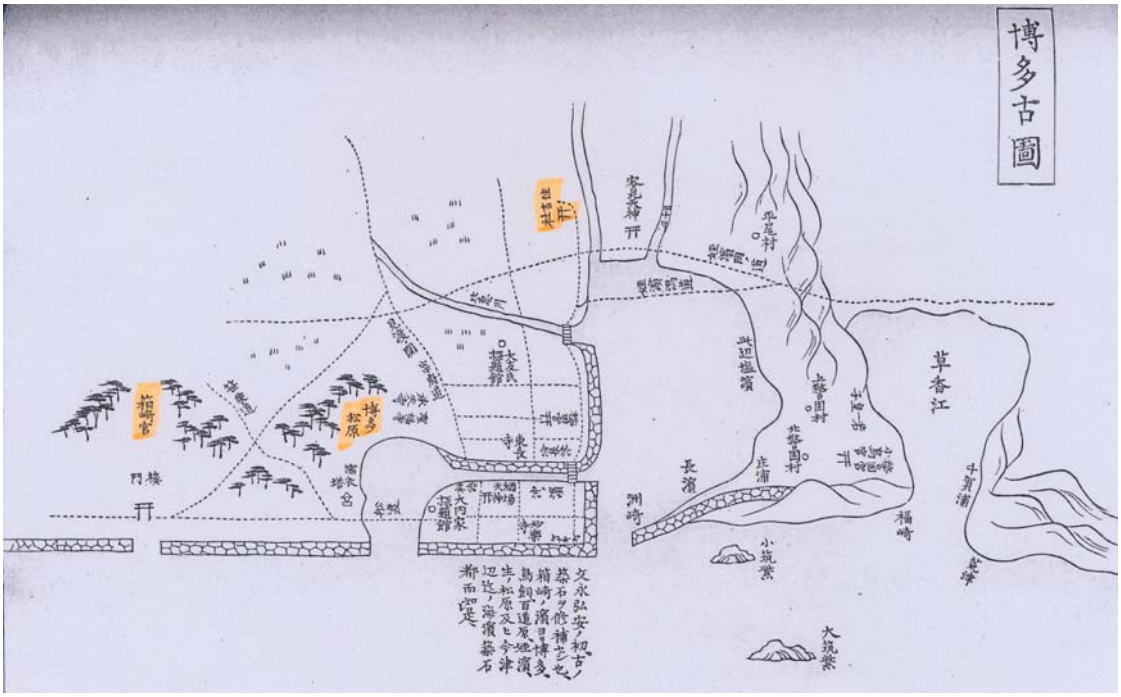
詞書(ことばがき)によれば、この画面の右側に季長一行が乗馬のまま大将の面前を通過する時は、通常は無礼な振舞いとして制止されるのであるが、季長は戦場だからと言って、乗馬のまま景資と問答をし、景資もまた「どうかそのままで」と返答をしているのである。季長と景資の両人の深い両氏の関係を敬愛の念を察することができるのである。

さて、季長の一番駆けに執着心は何か。当時の合戦に於いては、最初に敵陣と刃を交えることが「一番駆け」と云って大変大きな軍功とされていた。日本の合戦の歴史

に於いては、勇者でさえも気後れするのが合戦の習い、合戦時に先頭に立って敵と戦いを交える事は、実に大きな武功と認定されてきた。当時の合戦の軍功として重要視されたものは、「一番乗り」「一番駆け」、敵の首をかき切って持参する「分捕り」、負傷や名誉の戦死も大きな功績となり、一番乗りや一番駆けは軍勢の多少よりも、個人の能力次第で軍功を挙げることが出来たのである。

注「ほんそ」 絵詞の中で「ほんそにたつし候は」という個所が二カ所あって、鎌倉安達泰盛邸の庭中（P16～19 参照）にも出て来る。この「ほんそ」は、従来は「本所」と考えられていた。それは季長の本貫地として理解され、季長は自分の本拠地にまだ帰っていないので、従者をあい従える事は出来なかったと解釈されていた。このような従来の考え方に対して異論を挟んだのが、石井進著の『鎌倉びとの声を聞く』である。石井氏は「ほんそ」とは「本訴」、即ち「訴訟」の事であるとした。「本訴」とは「現在不知行状態となっている本領に関する訴訟の事なのであろう」との説を唱えた。

故に季長は「本領を失った状態にあって、その回復を図る訴訟に成功しないために“無足”の身に陥っていた」という説が受け入れられ、ここに「ほんそ=訴訟」に関して新しい見解が示されたのである。



博多古図 『伏敵篇・巻之三』重野安繹監修・山田安栄編集・明治２４年・「文永弘安ノ初、古ノ築石ヲ修補セシ也、箱崎ノ濱ヨリ博多、鳥飼、百道原、姫濱、生ノ松原及ヒ今津辺迄ノ海濱築石都而如レ是、」

絵四・注記に「武房手の者分捕り」とある　　**絵三**・栗毛の馬に乗り元軍に肉迫する季長、後方２人目が姉婿の三井資長（すけなが）季長。季長の兜は絵一の兜を取り換えていることが分かる。

※上絵の三・四の場面の間に『丹鶴（たんかく）叢書』の①、③、④、⑤が入ると下記のようにつながる。

右→見る①駆ける図絵（二人目姉婿資長）　**②絵三の画面、立ち止まる**　③分捕絵図、薙刀に首を刺している

④季長が菊池武房と出会う絵図　⑤季長に挨拶を受ける菊池武房　⑥絵四の菊池二郎武房の分捕場面

絵三・四の繋がりの推定は、『丹鶴（たんかく）叢書』を見ると、絵三の前に上記①画面があり、絵三の後ろに③の分捕場面がある。絵四の前に③・④・⑤の菊池武房部隊と季長部隊が出会い、この場で会話を交わし、同じ一族である事が分る。この一連の絵図は福田太（たい）華（か）も絵三・四の繋がりに苦心があったとみえ、この様な追加画面を入れて蒙古襲来絵詞に挿入したと思われる。敵首を刺してくる菊池武房の姿は見えない。その一場面、一紙の絵脱落しているのだろう。『絵巻』には③の薙刀に首を刺している絵図はないので、福田太華は③の絵図を入れたと考えられる。（絵師福田大華について説明は１４頁参照）（『丹鶴叢書』江戸時代後期、丹鶴城の水野忠央が国史・記録・故実等編集したもの）

絵四の解説　肥後国の菊池二郎武房の手の者が、赤坂(地図１２頁)に陣を布いていた蒙古軍を追い落とし引揚げてくる場面である。この絵四では引き返して来る菊池武房の手者が５騎描かれているだけである。詞三「葦毛なる馬に紫逆沢潟の鎧に紅の母衣かけたる武者・・・」と、記されている美々しい装いをした菊池二郎武房の勇姿が描かれてなければならないが、その場面にはその姿は見られない。首二つを薙刀の先に貫いて武房に従っていた従者も見られない。多分、絵四の画面の右手に不明であるが、菊池武房と従者が描かれていた右側部が欠落していると思われる。

絵三の場面は、菊池武房が季長と出会って、季長に誰かと問われ、それを答えるために馬を止めた場面を写実的に描かれている。

絵四は菊池武房の蒙古兵の首二つを太刀と薙刀に刺した従者の絵は欠落しているが、これ等を含んだ絵三・絵四は一連の絵と思われる。

絵五・右側白石六郎通泰が其勢百余騎後陣より季長の援軍に駆けつける。中央は白石隊旗持、先頭は季長の旗持が竹崎家の家紋三つ目結に吉の字がはっきりと見える。三郎二郎資安の馬が射抜かれ跳ね上がり、資安は地面に投げ出され、資安は立ち上がり敵陣に駆けだしている絵図。

絵五の解説　竹崎季長が別府の塚原から逃れた蒙古軍を追っていた所、鳥飼潟の塩干潟で麁原(12 頁地図)に陣を布いていた蒙古軍が、季長に迎撃して来た。季長主従が討死を覚悟で戦っていた処へ、肥後国の御家人白石六郎通泰が後陣から駆け付けてくれたので九死に一生を得た場面となっている。

読物的に語れば、「後陣より疾風のごとく駆けつける白石六郎通泰、季長の危急を聞きつけ、肥後国御家人白石六郎通泰は百余騎の手勢で駆け着け、敵の騒音は万雷の音の如く天地にこだまし、黒皮縅・赤糸縅・萌黄縅・萌黄裾濃縅の色とりどりの大鎧に身を固めた騎馬の一団が季長の援軍に駆けつけ、先頭を走る勇敢な白石六郎通泰の馬と旗指の姿である」と、語られる場面となるのである。

絵七(11頁絵七に続く)・左側は退却する蒙古軍　　**絵六・季長姉婿三井三郎資長は元軍を追う**

絵六・蒙古軍に追う三井三郎資長(すけなが)。詞書によれば「一番に旗指、馬を射られて跳ね落とされる。季長以下三騎痛手を負い、馬射られて跳ね上った」と、すれば、絵五の前の画面に、旗指三郎二郎資安が馬を射られた絵図があった筈、当然ながら、季長以下三騎の負傷の場面が描かれていた筈である。後の詞七によれば「旗指の馬、同じ乗馬を射殺され、季長・三井の三郎・若党一人、三騎痛手を蒙り、・・・」とある。

季長以下の三騎の負傷者をはっきりと人名を上げている。しかし、下記の『丹鶴叢書』を見ると、絵六と同様に三井三郎資長の勇姿が描かれている。

※絵六・七を『丹鶴叢書』で見るとこの様になる。絵六には三井三郎資長のみが描かれているのは、季長等の馬は鳥飼潟の干潟に足を取られて倒れてしまったので、三井資長だけが追い続けたのである。

絵七は詞四に「肥前(ひぜん)の国の御家人白石の六郎通泰(みちやす)、後陣(ごじん)より大勢にて駆けしに、蒙古の軍(いくさ)引き退きて麁原に上る」とある場面が出て来る。蒙古軍は、大勢で矢先を整えて射かけてくるので、雨の降るようなありさま、鉾や長柄・物具を揃えて、攻め立てる。冑は軽く、鉄砲や石弓を飛ばしてくる。なかなかの強剛のものであった。頭部に羽根や染毛で飾った冑(ちゅう)(かぶと)や盔(かい)(かぶと)を被っている。絵師の苦心の場面現場とされている。　(日本絵巻大成 14『蒙古襲来絵詞』小松茂美著より)

絵七の続き・右側「肥後国竹崎五郎兵衛季長生年二十九□□□」破裂しているのは「てっはう」とある。鳥飼潟から麁原の合戦へと奮戦する季長。元軍は槍と矢で季長を襲う、季長は馬を射られて苦戦、「てつはう」が爆発する。兜に矢が刺さり、左足も矢を受け、馬も血を流して修羅場の戦いの絵図となる。

絵八・絵七の左側に続く画面であろう。鳥飼潟合戦から蒙古軍麁原に引き陣を構え、歩兵は矢防板の内側で太鼓や鉦を打ち鳴らし、後には騎馬隊が構えている。日本軍はこの騎馬にやられた経験から、騎馬隊を防禦する防塁を浜辺に急築造に至る。絵八は下の『丹鶴叢書』左に続く絵巻の様である。

※絵八に季長が負傷した画面では、その前の状況が分からないので、『丹鶴叢書』から参照すると、季長が負傷する画面は、絵五の白石六郎通泰が駆け付ける場面の先頭の季長の旗指と繋がっている。

麁原の戦い　愈々戦いは急を告げ、蒙古軍は赤坂の西側(地図 12 頁)百道原付近に上陸し、麁原を制圧して博多を目指ざして東進、敵の先頭部隊は赤坂付近の丘陵に陣を布いた模様となる。戦いの場は、季長と同じ肥後国の武士菊池武房の率いる百余騎が敵陸軍を退却に追い込み、意気揚々と菊池軍は季長隊と行き合い、季長は尋ねる。「どなたですか、誠にお見事です」と声をかけると、武房は「肥後国の菊池二郎武房と申す者です。そうおっしゃる貴方は」と問いを返し、季長は「同じ内物の竹崎五郎兵衛季長と申します。これから敵と一合戦交えますから、ご覧下さい」と挨拶を交わし季

長は敵軍に接近した。敵元軍は鳥飼潟に残され、麁原の本隊に撤退合流しょうとしていた。季長はその敵軍を尾行し、鳥飼潟の浜にある塩田「塩屋の松」(干潟の塩田)付近で戦いを挑んだ。

詞書に、「色々の旗を立て、並べて蒙古軍が犇めき合い、絶え間なく大音響を発している」と描写する。季長は戦意盛んに敵軍に駆け入ろうとすると、郎党の藤源太資光が、「間もなく味方の軍勢が駆け着けて来ます。軍功の申し立の際に、証人者を立てて御合戦なさるのがよろしいのでないか」と忠告したが、季長は全く忠告を聞き入れず、詞書には、「弓箭(弓矢)の道、先を以って賞とする。ただ駆けよ」と叫んで馬を走らせて行く。季長は「弓矢で戦う武士たる者、何を於いても先がけする事が一番だ、あれこれ考えず、とにかく敵陣に突入せよ」と、勇壮猛進で駆け入り、この時代の武士の合戦美学であった。

文永の役・博多湾海岸線の合戦位置図

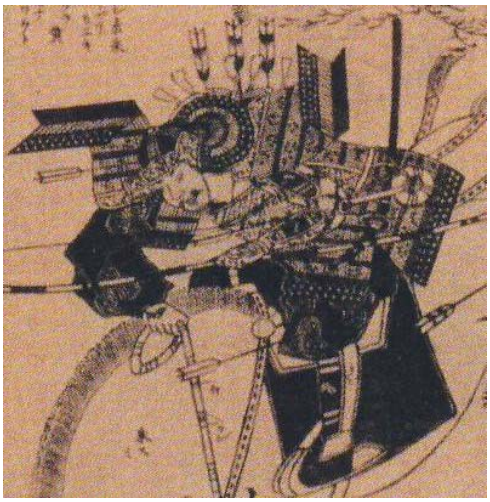
麁原に陣を構えた蒙古軍は　絶え間なく大音響を鳴らし、ドラや太鼓を叩いて時の声を挙げている。この軍勢の後方を見ると、元軍は集団戦法を以て、日本軍に総当たりしていることが分かる。合戦方法は小集団で一騎打ちを理想とした日本の合戦文化とは大きく異なり、季長隊５騎の内、旗指の馬は敵軍の矢に射殺され、季長と姉婿三井資長、若党一人の３人が重傷を負う結果となった。元軍は集団戦に慣れており、短弓に短い矢(毒矢)を用い、雨あられの如く矢を射る戦法を取って来る。鎌倉武士を驚かせたものは「てつはう」と呼ばれる兵器、鉄の椀の中に火薬をつめ、導火線に点火して近代の手榴弾の様に投げて来る。火薬が破裂すると四方に火炎が走り、煙と同時に大きな音を発し、日本軍は大いに驚かされた。**絵図七**に爆発に驚いた季長の馬は、腹部に敵軍の矢が次々に命中、馬は後ろ足を高く跳ね上げ、季長は手綱を引き絞って馬の背にひがみつく戦いの場面となっている。

『八幡愚童訓』(八幡宮の霊験記)　　巻二によれば元軍様子が「太鼓や銅鑼を叩き進撃してくる。矢は短いが矢の根に毒を塗っている。当たると毒気に負ける。大勢で矢

先を整えて射かけてくるので雨の降るような有様。鉾や長柄(柄が長い)や物具を揃えて攻め立てる。冑は軽く、鉄砲や石弓を飛ばしてくるというなかなかの強剛のものである。

各自厚手の軍衣をまとい、腰には剣を帯び、長柄の先に旗を飾った矛や弓を持つ。弓は日本の物に比べて短く、中央に握りの部分が折り曲げてある。中に金属の小札(鉄札)を縅の甲冑を着用する者もいる。頭部に羽根や染毛で飾った冑(兜)や盔(兜)を被っている。又、眉庇や頬当て、首当て等で、すっぽりと覆うように作られている。とある。

★右写真は「伝・モンゴル型鎧冑」H168cm、重さ 12、5kg、鎧の表面は布製、全体に 7 ㎝四方の鉄板が当てられ鎧の機能がある。「伝・モンゴル軍弓」全長 64cm、元軍の使用された弓、裏面に元軍の弓という表記がみられる。(博多「元寇資料館」史料より)



絵七の拡大・蒙古軍「ムクリ」高麗を「コクリ」の形相　　**右絵図注記に「肥後国竹崎五郎兵衛季長　生年二十九□□□」とあり、季長ただ一騎、前陣に打って出る。青毛(黒)の駒に跨り、亀甲地の鎧直垂を着け、その上に萌黄脅の大鎧を着て、見るも勇壮な姿で腰に黒漆太刀を帯び、手には白木の弓を手挟んでいる。名だたる敵将と見た蒙古軍「よき敵ござれと」と一斉に矢を放った。兜に矢が当たり、左足には矢が刺さり、脛当てに季長家の紋「三目結に吉文字が見える」。**(右・『丹鶴叢書』絵図)

絵七に描かれた３人の蒙古兵と「てつはう」について　　蒙古襲来絵詞の中で特に有名な**絵七**、鳥飼潟の塩屋で負傷しながら孤軍奮戦している場面となる。誰でも気がつく、「てつはう」の破裂弾が右側から左側に飛んで来ている。そして、３人の蒙古兵の顔の形相と、恐ろしいまでの蒙古・高句麗兵の姿である。他の蒙古兵の描き方と比

べると、あまりにも誇張された描き方で、３人の蒙古兵は他の絵の中では新鮮で新しく描いている。この３人の蒙古兵は、後世に描き込まれた絵図説が有力なっている。

蒙古襲来絵詞を現在のような形の絵巻に編集したのは、肥後国の細川氏に仕えた絵師、**福田太華**であるとされている。福田太華は１８世紀末に生まれ、１９世紀の前半に活躍した人物で、福田太華は『絵詞』以外にも絵を描いている。『絵詞』の３人の蒙古兵を描き込んだ人物は福田太華であろうとされ、この３人の蒙古兵の描かれたのは江戸時代の後期となる。

「てつはう」の投げられている方向は、破裂の殻は右側から左側へ投げられ、つまり、日本の武士団の方から左側の蒙古軍の方へ投げられた様に描かれている。「てつはう」は蒙古軍の武器であり、蒙古軍の左から右へ、日本武士たちに投げられた武器である。「てつはう」は蒙古襲来絵詞の本来の絵ではなく、３人の蒙古兵が描かれた時に挿入された絵であると判断されるのである。それは、つまり、「てつはう」は蒙古襲来絵詞の本来の絵ではなく、３人の蒙古兵と同じく後筆であり、江戸時代の後期に描き込まれた絵と判断できるのである。

蒙古襲来絵詞は寛政５年(1793)、江戸幕府に於いて権勢を誇っていた松平定信(さだのぶ)(江戸幕府第８代将軍)は、熊本の大名細川斉茲(なりしげ)に依頼して、蒙古襲来絵詞を江戸に持参させ、その写しを制作したらしい。松平定信は学者としても優れた人物であり、彼は単に蒙古襲来絵詞の写しを制作しただけでなく、この絵詞について幕府の学者や絵師の総力を挙げて考証を行っていたらしい。

そして、考証の結果として「てつはう」が描き込まれたとすれば、先に３人の蒙古兵を描き込んだのは、福田太華(たいか)ではないかと言って来たが、３人の蒙古兵と「てつはう」とは同時に描き込まれた絵であり、熊本藩の一武士であった福田太華が「てつはう」の存在を知っていたかどうか疑問となる。当時の学問の水準の在り方からすれば「てつはう」の存在を知りうるのは、国内で最も高度な学問の水準にあった、幕府の学者方の可能性が高い。従って、今一つの考え方として、全くの憶測であるが、松平定信の指示による幕府の学者の考証に基づいて、幕府の絵師が３人の「蒙古兵の形相と、てつはう」を描き込んだだとする推測も成り立つのである。

(**注**・「ムクリ(蒙古)コクリ(高麗)」の言葉は、泣く子に「蒙古・高麗の鬼が来るよ」と使った言葉。★「てつはう」は中国三大発明の一つとされる。黒色火薬は硝石、硫黄、木炭の三味混合剤となる。第３部Ｐ113－114「てつはう」ついて述べる。)

竹崎季長は幕府に恩賞を求めて鎌倉へ向かう　「文永の役」が終り、翌年の半頃になっても季長に対する恩賞はなかった。武士たちにとっての一番の恩賞は所領の獲得であった。季長自身、自己の本領の提訴に敗れており、厳しい状況は続き、死活問題となっていた。やむなき鎌倉行きを身内に漏らすと、長老の御房(僧侶)に思い止まるようにと説得されたが、季長はその言に耳を貸さず、鎌倉へ行くことを諦めなかった。因って竹崎一門たちからの不信をかい、鎌倉への出訴費用も出してもらえなかった。

季長は遂に、翌建治元年(1275)６月３日に肥後を出発した。一門衆は誰一人姿を見せなかった。孤独な旅立ちとなり、中間(従者)の弥二郎と又二郎の二人を連れて出発した。費用の捻出は、馬と鞍を売り払ってこれに当てた。季長は「今回の訴えが将軍のお耳に達しない場合は、出家して故郷に帰ることはないだろう」という悲壮な覚悟で出発する。

肥後国から赤間関(下関市)へ到着し、長門守護代三井季成と会った。季成は長門守護二階堂行忠の家臣で、竹崎季長の烏帽子親(元服時、成人の象徴、烏帽子を被らせ、名前を付ける身請け人、元服者を烏帽子子といい、烏帽子親と烏帽子子の関係は親子関係に準ずる)であった事は、季長の姉婿の三井三郎資長と、長門守護代三井新左衛門季成とは同族と考えられる。季長は季成に会っていることは、季長の「季」の一字は烏帽子親から贈られたものと考えられる。当地では季成はわざわざ遊女まで呼んで歓待し、その上河原毛(鹿毛色)の馬と銭を餞別として出してくれた。竹崎の一門とは雲泥の差であると、記している。

８月１０日、伊豆国の三島大明神(三島大社)に参詣し、布施をして一心に弓箭を一心に願った。１１日、箱根権現(山岳信仰の神仏習合神)に参詣し、布施をして祈祷し、そして、８月１５日に鎌倉に到着し、季長は先ず由比ケ浜に行き塩湯を体にかけて精進した。その足で鶴岡八幡宮に参詣、布施をして弓箭の祈祷をしたが、しかし、なかなか鎌倉幕府の奉行に日参して訴えを出ても、奉行人は訴えを受け付けてくれない。季長の心境は窮地立たされ、「神のご加護を受けるしかない」と季長はまたも鶴岡八幡宮に参詣して唯祈願するのであった。そして遂に、鎌倉に着いて２カ月後の１０月３日、季長に大きな好機が訪れた。それは鎌倉幕府の有力者執権北条時宗の舅であった安達泰盛に会う機会を得たのである。

御恩奉行(御家人の勲功に調査と恩賞支給の判断)の安達泰盛は、「文永の役」の恩賞配分の総責任者となっており、将軍と御家人との「御恩」と「奉公」の関係を仲介して

いた。幕府の重要人物、安達泰盛に会う事ができ、季長は軍功と恩賞の思いの丈を告げたのである。「肥後国の御家人竹崎五郎兵衛季長が申しあげます。去年１０月２０日の蒙古合戦の時、・・・・」息せき切って合戦での戦功を詳しく語り、恩賞が無い事への不満を訴えたのである。

絵九（Ａ）・幕府御恩奉行安達泰盛の甘縄の屋敷、屋敷前では訪問者の出入りの多く馬の整理に追われる

絵九（Ｂ）・中央「秋田城介安達泰盛」

絵九（Ａ）・上段右側より見て行き下段（Ｂ）より（Ｃ）へ続く季長の安達泰盛への庭中（訴訟手続制度）この状景を描いた場面となる。

絵九（Ｃ）一番奥が安達泰盛

古代の秋田城鎮衛司令官職平安中期頃は出羽城介、鎌倉時代に秋田城介、武門の名誉の名称となる。

「秋田城介泰盛」と注記あり、初対面に頭を下げるしぐさの季長「肥後国竹崎五郎兵衛尉季長」明記

絵九(Ａ・Ｂ)の説明　鎌倉時代の有力武士の居住を描いた唯一のものとなる。門前では２頭の馬を、従者が取り静め様としている、今しがた有力訪問者があったことが伺える。門入口には３人の侍が門を固め、家の前には溝が掘られ板囲いの溝流れとなり、鎌倉の地質が砂地であることが知れる。門を入ると長い板の間があり、左端の注記に「秋田城介殿侍、諸人出仕の躰」と明記があり、その後ろの人物がこちらを振り向いているのが「声名判官」(三浦一族派の現横須賀市)、その後ろに坊主頭の入道は腰に刀を差している。

絵九(Ｃ)の説明　奥の部屋の間も板の間となり、上級侍３人控え、部屋の一部だけに畳が敷かれて身分の上の人が座している。一番奥、桐や竹に鳳凰を描いた襖障子に背に坐っている人物が、この家の主人、御恩奉行の安達泰盛で、手に持つ扇を握りしめ、泰盛の話を聞いている季長の様子は、その緊張感が伝わってくる。

御恩奉行安達泰盛と竹崎季長の問答　　絵詞によれば、季長は「去年の蒙古襲来合戦に際し、大将少弐景資殿の指揮下で、蒙古・高麗軍の合戦で、わずか５騎の小勢隊を以て、肥後国の軍勢の先駆け、一番駆けの殊勲を立ながら、その功績が景資殿の兄で鎮西奉行人の代行者たる少弐経資殿(少弐の惣領)の将軍への注進に洩れたことは誠に遺憾千番であり、私、季長としては弓矢を取って戦う武士としての面目を失った次第です。是非とも私の先駆けの功績をお認め下さい」進言を切り出した。

泰盛「少弐経資が幕府に報告したのだろうが、将軍のお耳に達していないと言う訳は、経資の報告の内容を知っているのか」

季長「どうして知っているはずがありましょうか」

泰盛「ではなぜ、注進に洩れたと訴え出られたのか。おかしいではないか」

季長「経資殿からの感状は、鎌倉への注進分を載せられたと承りましたが、そこには一番駆けの功が載せられておりませんでしたので」、そこで泰盛は、

「その感状をこれへ」と一見した上で、「貴殿には、首の分捕りや討死の功績がおありか」と問いただしてきた。

季長「分捕り・討死の功はございません」

泰盛「では合戦の忠を尽くしたとは言えぬ。貴殿が負傷されたことは感状にも明記されていて、負傷も立派に戦功の一つだから、それで良いではないか。一体、何がご不足なのか」と言う。流石に幕府実力者、急所をついた質問である。

季長「私が申し上げたいのは一番がけの先陣の勲功の事です。もし私の申すことが不審でしたら、経資殿ではなく、景資殿に直接御教書(三位以上の地位にある家司の発給文書)でお確かめになって下さい。万一、偽りと分かれば、すぐにでも私の首を取ってください」と、命がけの答弁をした。

泰盛「将軍の御教書で景資に重ねて確認するなど、できるものではない」と、

季長「この件については先例がないものと存じます」

泰盛「異なことを言われる。先例のないことを承知で訴えておられるのか」

季長「領地訴訟や国内での合戦でしたら、先例の有無に合わせてお伺いの上で申し上げるべきでしょうが、異国との合戦は今回が初めての事、先例などあるわけがございません。その先例が無いという理由だけで、一番駆けの勲功が将軍のお耳に届かないという事は、戦場の弓矢の武功を一体どのように立てよとおっしゃるのですか」。

季長は必死に食い下がると、これには泰盛も多少気持ちを動かされた。

泰盛は「なるほど、それも一理はある。しかし幕府の政務の取り扱いには、全て先例が無くてはならない」と言い、

季長はここぞと、「重ねて申し上げるのは恐れ多いことですが、すぐに恩賞を頂きたいという訴訟を申しておる訳ではございません。私の先駆けの戦功が偽りならば、季長の首をお取り下さい。事実と判明出来ましたら、鎌倉殿のお耳に入れていただき、季長の武勇の励みといたしたい」と。再三に亘って申し述べ、季長は一歩も引かない気力で渡り合った。

押し問答の後、終に季長の情熱にほだされたのか、泰盛は「よし、確かに承知した。貴殿の先がけの勲功は将軍のお耳に入れよう。恩賞も間違いあるまい。この上は早く国に帰って忠勤をはげむことだ」と諭した。

しかし、国に帰れと言われても、季長にとって故郷の竹崎は喜んで帰る所ではない。

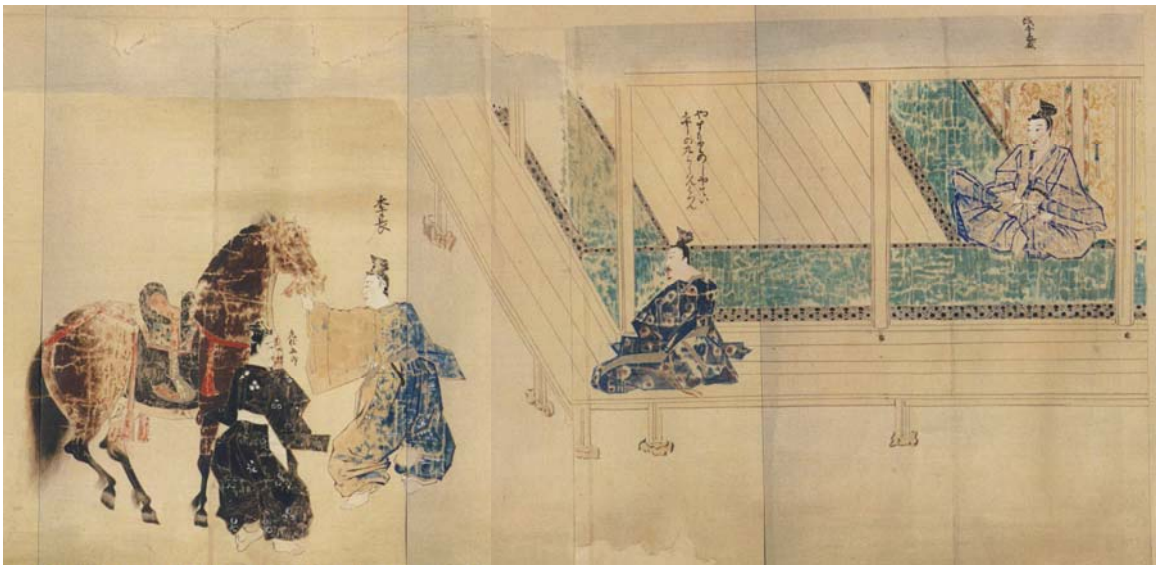
そんな身の上を季長は「“無足の身”である私には、帰れと言われても安住の地はございません」と言い、季長は更に「有力御家人に、俺の下について武将になれば処遇を与えようと進言してくれる者はおりますが、・・・実は帰る“地”が無い状況でございます」素直な心情を申し述べると、泰盛は「それは大変お困りのこと」と深く考慮してくれる気配を見せたのである。

そして、泰盛は「実は山内の時頼殿(北条時頼、第５代執権)から急ぎのお迎えだ。蒙古との合戦の事については、またいずれ詳しく伺おう」と言って泰盛は席を立った。

こうして終に季長の直訴は泰盛に聞き届けられたのである。

翌４日、再び泰盛の屋敷に参上した季長は、泰盛に近侍(きんじ)している肥前国(佐賀県)御家人の中野藤二郎から季長と泰盛の功賞の進捗状況を話してくれた。泰盛は近侍たちを前にして季長との問答次第を物語った話の終に、「幕府の後日、一大事には役立ちそうな人物、“奇異(きい)の強者(こわもの)”だと」泰盛が激賞している話を中野から季長は聞かされた。泰盛は一筋に「弓箭の道」を追い、武勇で活路を開こうとする小武士団の心意気を見抜いたのである。

１１月１日、季長は泰盛の前に召し出され、勲功の賞として肥後国(ひごのくに)(熊本県下益城郡(しもましきぐん))東海四郡の地頭職に任ずる将軍家下文(くだしぶみ)を手渡された。東海郷とは季長の故郷竹崎のすぐ近隣の郷で、“無足の身”が一躍、郷の地頭に正式に任命された。感激している季長に泰盛は更に「貴殿には特に馬具を付けた馬を進(しん)ぜたいが如何」と言って贈られた馬の絵図が**絵十**となる。正に破格の待遇を受け一門の衆を見返す事に成功したのである。



絵十・安達泰盛から小巴の鞍(大和鞍)を置き、連雀(れんじゃく)の鞦(しりがい)(房を並べ連(つら)ねた尻繋(しりがい))を付けた黒栗毛の馬を賜る季長。右奥は城介泰盛、中央は泰盛の舎弟城九郎判官、左厩別当(うまやのべっとう)左枝五郎が駿馬を引く場面

竹崎季長と安達家の関係　　中央の城九郎判官とは泰盛の年少の弟の長景(ながかげ)の事である。何故ここに長景が立ち会っているのか。その関係は長景の長門国守護であった二階堂行忠(長門国の守護代三井季成の主人)の娘婿だったのである。この関係を推測すれば、竹崎季長→鳥帽子親三井季成→その主人行忠→娘婿安達長景→そして、兄安達泰盛という人脈が見えて来る。一介の御家人竹崎季長であるが、これ等の人脈が安達泰盛へ

の庭中申告を可能にしたのではなかろうか。その人脈があったからこそ、**絵十場面**に長景が胡坐(あぐら)かいて座しているのである。そして、この時より９年後、弘安８年(1285)１１月に起きた「霜月騒動」に依って安達一族が北条氏得宗家に討伐された。季長は自分を肥後国東海郷の地頭を承認してくれた安達一族に対し、深く感謝の気持ちを表したのが『竹崎季長絵詞』(『蒙古襲来絵詞』)の絵巻となっているのである。

問題は『絵詞』に追書に記された「永仁元年二月九日」の日付である。萩野三七彦氏が述べる様に(「蒙古襲来絵詞に就いての疑と其解釈」第２部 51、55－56 頁)、８月になって始めて永仁と改元したので、永仁元年二月という月は存在しない。萩野氏上掲論文に「内部微証によって絵詞の成立は正和五年(1316)８月１日以降と決定される」となる。では何故永仁元年二月九日という日付を追記されねばならなかったのか、についての観点から考えると、永仁元年には特別の意味を察することができる。平頼綱による「霜月騒動」に依って季長が感謝の念を捧げる安達一族の人たちはいない。その後、「平禅門(へいぜんもん)の乱」(永仁元年４月２２日平頼綱ら９０余人が９代執権北条貞討滅滅される)に因って、幕府の考え方も変わり、安達泰盛らの近い人たちが幕府政界に復帰することができた。『絵詞』の成立は、これ等の事情を記録に残したい願望があったと思われる。

―『絵詞』前巻・終―

『絵詞』・後巻　文永の合戦から７年目の弘安４年(1281)「弘安の役」

弘安４年５月３日、元・高麗(こうらい)連合軍の東路軍(とうろぐん)４万(元軍３万、高麗軍１万)、戦船９百艘が、朝鮮半島合浦(がっぽ)を出発し、５月２１日、東路軍は対馬の世界村大明浦(せかいむらだいみんぽ)(『高麗史節要』巻 20・峰町の佐賀(さか)村を指す説)の東海岸に上陸、対馬の兵を打ち破り、２６日更に壱岐島を攻撃開始、６月６日、博多湾の志賀島(しかのしま)(第３部Ｐ84、98 地図)に上陸した。※合浦から対馬までの距離は５０余㎞で、５月３日に出発とすれば、５月２１日に上陸した地は対馬でなく、地理的条件から考えれば博多湾の志賀島説が有力となる。後述する。

『八幡愚童訓(はちまんぐどうくん)』によれば、筑後(ちくご)国御家人草野経永(つねなが)が船２艘で夜襲、多くの敵兵を討ち、敵船に放火して引揚げたという。東路軍は、船を鎖で結んで防禦し、押寄せる日本兵船に蒙古の大船から石弓(いしゆみ)(第３部Ｐ100 とＰ114 参照)を投じてきた。そのため小型木製の日本船は多くが打ち破れ、海上での合戦は日本軍の苦戦となっていた。

６月８日には、大友頼泰(よりやす)の軍勢が香椎(かしい)から志賀島に延びる砂丘海路(陸側から渡る海

路がある・第３部Ｐ97～98 志賀島地図)から蒙古軍を攻撃して打撃を与えた。１カ月以上の船上生活で、蒙古軍は疫病が蔓延し、洪茶丘(副大将)軍が敗走し蒙古軍は苦戦に追い込まれだした。８日以後、季長はこの合戦に参加し、今回も肥後国の軍勢と共に、いくつかの武功を挙げていた。やがて東路軍は、石築地を楯にした日本軍の抵抗が強く上陸を諦め、中国本土から日本へ渡海する旧南宋軍主体の江南軍１０万人との合流を待つことにして、一旦、壱岐島へと東路軍は退いたのである。

季長は元・高麗軍の軍船を攻撃、負傷を負いながらも敵将の首を分捕る戦功を挙げていた。この合戦現場で、伊予国(愛媛県)の有力武士、河野通有(戦傷負う)を訪ねて、実戦の体験談や戦陣での心得などを語りあっている。その様子が**絵十一**の場面となる。

河野通有を見舞う　対座する通有の後方の縁側に控える通有の嫡子八郎、通有一人が鳥帽子を被っていないのは何故かと季長が尋ねる。河野は言う「通有の家では、合戦が始まり勝敗の決着がつくまでは鳥帽子をつけない慣わしがあるのだ」と言っていた。通有が着ている直垂は源平合戦の時、河野家の祖、通信が着用したものであるとも言っていた。画面の左手、妻戸が開かれていて、二人の武士の姿が見え、妻戸の所に「妻戸はあるべきでない所で、絵師が書き違えたのだ」と書き込みがある。

絵十一・季長は負傷(投石機による)した河野通有を見舞う場面となる。右季長、河野通有、通有の嫡子八郎、左庭旗指。６月８日頃、河野は元軍攻撃に武勲を立てており、敵の情報を聞きに訪問と考える。

河野通有　鎌倉時代中期の伊予国久米郡石井郷の武将で、「文永の役」「弘安の役」に通有率いる水軍衆は博多の海岸に陣を敷き活躍していた。石築地前の砂浜に自ら船を置いて海上で元軍を迎え撃つべく陣を張り、石塁を陣の背後とした。この不退転の

構えは「河野の後築地」と呼ばれ、九州諸将も通有に一目置いた。恩賞として肥前国神崎荘小崎郷(佐賀)・伊予国山崎荘(伊予市)を得、旧領も回復して「河野氏中興の祖」と呼ばれている。

元寇防塁・石築地に前に御家人が集結する

絵十二(A)・生(息)の松原の石築地前を出陣。絵巻は(A・B)右より左へ見て行く、後より5番目季長

絵十二の場面は、六紙 85cm・七紙 85cm・八紙 85、4cm 全長2m55、4cmの絵となる

絵十二(B)・左が先頭、石築地前を行く季長の旗指、次に熊手を担ぐ兵と薙刀を持つ兵士が続く

絵十二・河野通有訪問後、志賀島周辺は元軍の軍船攻撃のため、博多の生の松原を出陣する季長部隊を描いている。延々と石築地が連なり、季長の前面に石築地の上には、麁原の戦いで百余騎の加勢してくれた肥後国の豪族菊池一族の菊池武房(37歳)の勇姿が座している。

絵十二は季長の部隊は6騎と歩兵2人の季長の部隊となり、築地石前を通過する季長部隊は、海上で敵船を攻撃する本隊となる段取りとなっている。季長のもう一つの別隊は砂洲から陸路志賀島(第3部P98志賀島地図)攻撃する部隊となっており、二手に分かれて出陣していた。“無足の身”から東海郷の地頭へ出世して晴れの部隊行進とな

る。菊池武房勢は博多湾肥後国の生の松原に築いた石築地は、菊池武房の守備範囲で、石築地の上に武房以下将兵が並んでいる。詞書によれば季長は菊池武房に「敵の将軍の軍船は、帆柱を白く塗ってあるとの事、季長、これから敵船に押し向って一矢射て軍功をあげ、将軍の上聞(じょうぶん)に達するために出撃いたします。ご存命であれば、どうか皆々方にご披露下さい」と挨拶の声を高々とあげて行進するのである。

絵十二を拡大・築地石に座している将兵・1～3段右より拝見

絵十二拡大、右→左へ　　藤を太郎十六

菊池次郎旗　　日の丸扇武房次郎卅七　日高三郎年卅

□□次郎　　竹崎旗家紋

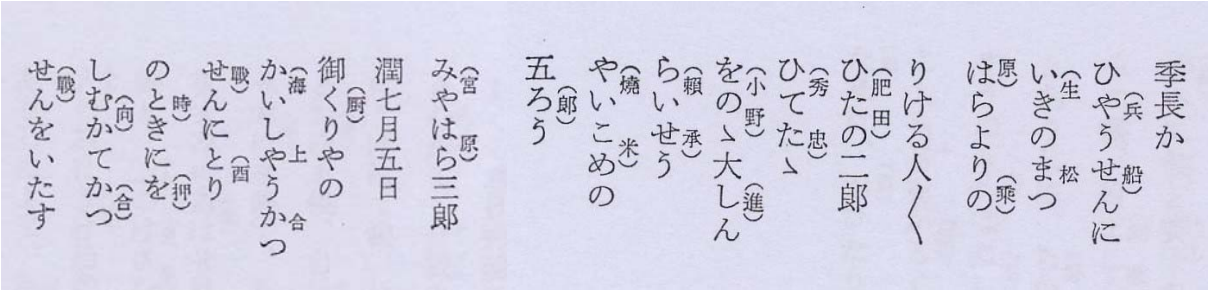
熊手と鎖を担いでいる郎党の絵図は、敵船の舷(げん)(船の側面)に引っかけ手繰り寄せ、敵船に乗り込み首級(しゅきゅう)に至ったものである。熊手の使う画面は絵十六(P27 参照)となる。

絵十二拡大、２番手の熊手と鎖を担いだ郎党

熊手の使い船を寄せ付け乗り込む兵士（絵十六）

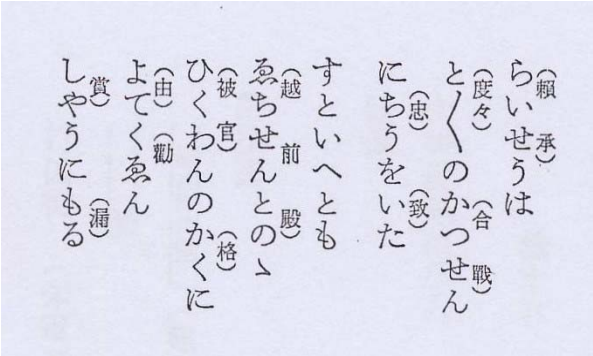
絵十三・生の松原より漕ぎ出し先頭を行く季長と見えるが絵巻には注記がなく乗船は見当たらない

絵十三の上段の綴り（右側より読む・『日本絵巻大成 14』「蒙古襲来絵詞」より）

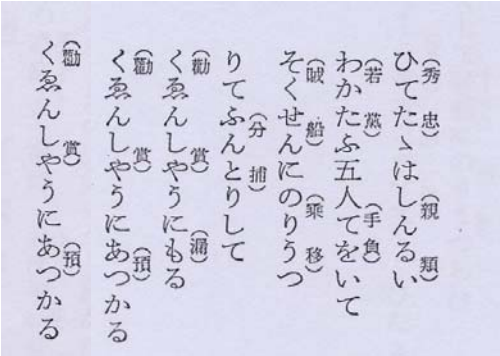


季長か
ひやうせんに（兵船）
いきのまつ（生松）
はらよりの（原）（乗）
りける人〳〵
ひたの二郎（肥田）
ひてたゝ（秀忠）
をのゝ大しん（小野）（進）
らいせう（頼承）
やいこめの（焼米）
五ろう（郎）
みやはら三郎（宮原）
潤七月五日
御くりやの（厨）
かいしやうかつ（海上）（合）
せんにとり（戦）（酉）
のときにを（時）（押）
しむかてかつ（向）（合）
せんをいたす（戦）

右より読む



らいせうは（頼承）
とゝのかつせん（度々）（合戦）
にちうをいた（忠）（致）
すといへとも
ゑちせんとのゝ（越前殿）
ひくわんのかくに（被官）（格）
よてくゑん（由）（勧）
しやうにもる（賞）（漏）



ひてたゝはしんるい（秀忠）（親類）
わかたふ五人てをいて（若党）（手負）
そくせんにのりうつ（賊船）（乗移）
りてふんとりして（分捕）
くゑんしやうにもる（勧賞）（漏）
くゑんしやうにあつかる（勧賞）（預）
くゑんしやうにあつかる（勧賞）（預）

絵十三・船で漕ぎ出す兵士　一艘の兵船が沖合を差して漕ぎ出でて行く。舳先や船端には楯を連ねて矢防ぎの壁を作っている。画面の細かい注記によって、やっと回し着けた季長の兵船とみえる。舳先に座って小手をかざし、遥か海上を遠望するのが、赤糸縅の大鎧の様子から、どうやら季長らしい。生の松原から乗り込んだ面々は、肥田次郎秀忠・小野大進・頼承・焼米五郎・宮原三郎といった、何れも一騎当千の兵であった。頼承(先頭２番目)というのは入道らしく、黒染めをまとい、坊主頭にとり帽子を鉢巻で結んでいる人の様だ。艫の辺りには屈強の水手六人が櫓を繰り出している。

絵十四・季長の姿は見えないが、日本の兵船三艘が海上を進む

大矢野氏の家紋

絵十四・閏７月５日、合戦に出立する兵船三艘が海上を渡る、一番奥上を行く船には「越前国御家人秋月九郎種宗の兵船に関東御使合田五郎遠俊の手の者」と注記があり、兵船は秋月氏の持ち船だが、乗り込む武士は鎌倉から特派された合田五郎が、詞書で「城次郎殿の旗と覚える」と述べているので、安達家に仕える北条氏の従者たちと思われる。右側の中を行く船は筑後国の武士「草野次郎経永の兵船」と注記、手前の船は肥後国「天草の大矢野十郎種保・同三郎種村兵船」と注記ある。後にこの『絵巻』の所有者となった大矢野氏の祖先と繋がって行く。しかし、よく見れば旗は大矢野氏の紋になっていて、安達家の紋は「連銭紋」(P 35 参照)であり、手前の乗船している武士団は「天草の大矢野十郎種保」の兄弟兵船ではなく、安達一族の関東の北条の武士団であることが分かる。大矢野氏の件は P27－28 で述べる。

絵十五・奥の兵船に「太宰少弐経資手物船　手物兵船」、手前の船「薩摩国守護下野守久親・同舎弟久長之手物兵船」と注記。旗指、少弐経資の家紋四目結び、下野守久親の家紋鶴丸に十文字。右下ヒラダ舟。

絵十五・拡大、水夫漕ぎ方はボート方式、進行方向後ろ向き

ヒラダ舟・筑後船小屋駅構内に展示

絵十五の水夫の船の漕ぎ方について　絵十五のみがボートの漕ぎ方(水夫は進行方向うしろ向きとなる)となっている。絵十四をよく見れば、カヌーの漕ぎ方(進行方前向き)となっている。船に過重や長時間漕ぐ場合は、ボートの漕ぎ方になるのではないかと思われる。この漕ぎ方に注意をはらわれたのは、『蒙古襲来』の服部英雄氏である。舟の漕ぎ方、第４部・追記・竹崎季長の故郷Ｐ128－130 甲佐神社の『絵巻』で述べる。

ヒラダ舟の補足　絵十五「太宰少弐経資の手の者の兵船」「薩摩国守護下野守(島津)久親・同舎弟久長の手の者の兵船」とあり九州の有力守護少弐(武藤)・島津氏(家紋が見える)の兵船となる。この時代の船は戦闘用の軍船は未建造の船であり川舟であろう。平田舟と呼ばれる船型式の大型船と思われ、長さ２５ｍ前後幅２ｍ位、四材(加工材)で造られた平田舟(高瀬舟より大)で出陣したのは、７月５日は台風一過海が凪いでいたのであろう。季長は水上交通に関して深い知識を持っていた事がわかる。写真の平田舟(２０人余)は元軍艦に素早く接近して成果を上げられる舟となり、絵十五の手前の舟に２～３人用の小舟は１本木から作くられたクリ舟となるようである。

次の絵十六・季長の分捕り絵図　　あきらかに敵船の右側の「ふなべり」を熊手が引き架かけ、引き寄せている兵士がいて、その舟から乗り移っていることが分かる。左側の舳先には季長が一番乗りして敵の首を上げている場面であるが、この場面の注記は「大矢野兄弟」となっている。「高政（たかまさ）」の小型船が「大型の敵船」に乗り移り白兵戦となり、季長の首級の絵図場面となっている。

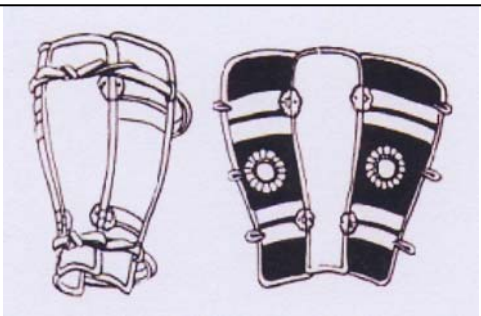
絵十六・敵船の舳先（へさき）で奮戦する季長、目前に元軍の軍船が迫りくる、右「大矢野兄弟三人種保」とある。

絵十六の「大矢野兄弟三人種保」説明　　絵図の右側注記に「大矢野兄弟三人種保」とあるだけで、季長の名が見えない。よく見ると中央に「肥後国」とあり、次の一行が消され、「□□□一番に凶徒を打つ」とある。消された□□は「竹崎五郎兵衛尉季長」と書かれていた様である。敵軍船の舳先で敵を組み伏せ、首を取ろうとしている烏帽子を被る武士こそが竹崎季長である。

顔の前に黒い筒の様な物体が見える。これが宙に舞う脛当（すねあて）であり、即ち、武士が合戦時、足の脛（すね）を守る三枚の筒の脛当で、季長が敵兵を押さえつけている足に脛当が無く、空中から落ちて来る瞬間を、絵師に描かがかしているのである。どうやら高政の船に一人だけ便乗できた季長は、目立たない様にと、兜は大船に置いて来たために頭には何もつけず、敵船に乗り移る時、脛当を兜の代わりを頭に着けていたのだ。

右側の「大矢野兄弟三人種保」とある所は、本来「たかまさ」と書かれているのを削り、大矢野兄弟と書き直したのは何故か。恐らく後世、この「絵巻」は大矢野家に絵巻が帰して以来、この場面は大矢野家の祖先の活躍を現す名場面として合戦絵巻を描き直してしまった。季長や高政の名を消し、元軍船の後部の注記に「大矢野兄弟三人種保」と入れたものであろう。

※船先に糸巻き滑車(巻揚げ機)がある。絵十六の左端に付く碇石(280kg)上下する。



『丹鶴叢書』「蒙古襲来絵詞」の絵図は季長と書かれている　　脛当(同類の脛当)

絵巻の書き直した経緯と大矢野三兄弟について　　『竹崎城・城跡調査と竹崎季長』(熊本県文化財調査報告)から「大矢野三兄弟」についての絵巻の経緯を見る。絵十六は重要な場面となり、藤懸静也(1881－1958 日本美術史学者、生家は旧古河国家老)は次の様に述べている。

《敵艦の後部にあって奮戦せる三勇将の傍に「大矢野兄弟三人種保」と注記あって、次に旗下に斃れる敵兵の傍に四行の文字があるようだが、甚だしく摩損していて僅かに、「肥後国」「□□一番」「打凶徒」の数字を辛うじて読み得る、とある。敵将の首を切っている主将の傍書は殆んど磨滅して読めないが、或る模本には「季長」と記されている。そして前後の関係、及び詞書等より考えて、首級の場面は季長である事は殆んど間違いがない。又、『丹鶴叢書』には「季長」の字があるが、大矢野本(菊池大矢野家に伝わる模本)にはない。これは「肥後国」言々という傍書の摩損の関係から丹鶴叢書の底本となった模本の作者が、原本に見えない季長の名をここに挿入したのであろうと云われる。更に「大矢野兄弟三人」とあり、次の行に「種保」とあるが、この二字は明らかに筆が違う。これ等の諸点を総合して考えると、賊首を斬る武将の上の摩損の個所には、本来「季長」とあったのを削り、同時に「大矢野兄弟三人」と書き直して、その一人の名を明らかにするため、特に「種保」の二字を書き加えたものらしい。天正の頃、絵詞の原本が大矢野家に伝わり、長く同家に蔵せられていた事実によって説明できる。故に極言すれば船尾(船のうしろ)より斬り込む四人の武士は大矢野兄弟では無いかもしれない。更に季長は「たかまさ」の船に乗って戦場に向かっていたに拘わらず、大矢野兄弟と一緒に戦っているのは不審で、大矢野氏の所有の事から考え合わせれば、ありうる事であると云われている。》と説明がある。

詞十二の現代訳　　絵十五から絵十六の詞書となる　武士の神髄を語っている

「して一所に合戦候べし」と仰せに候。「御船を寄せられ候へ」と申(す)に、たかまさ兜を脱ぎ、畏ま(り)て押し寄すと雖も、乗るべき用無かりしを以て、「甚深に仰せ付けらるべき事の候。近く船を添へられ候へ」と申(す)に、たかまさ近く押し寄せて見て、守護は召され気にも候はず。「船を退けよ」と申(す)に、力無くて、仰せの如く守護は召され候はず。「此の船を曾倶(→遅く)候に依(り)て、申(し)請けて乗り候はむ為に申(し)て候」と申(す)に、津守殿同船し候(ひ)て、「所無く候」とて、愈々退けし間、詮方無くて手を擦りて、「然るべく候はば、一身ばかり乗せられ候へ」と申(す)に、「戦場のみならでは、何事にかたかまさに逢ひて懇望候べき、召され候へ」とて、船を押し寄せしに、乗り移るを、若党是を見て、「捨てられし」と嘆き合へりと雖も、季長、「懇望して乗る上は、若党を乗するに及ばず。弓箭の道進むを以て常とす」依(り)て手の物一人も相具せず、唯一人ばかり相向かふ。兜は、若党に知られしが為に、もろざねに持たせて本船に置きし程に、脛当を外して結び合はせて兜にせし時、

たかまさに、「命を惜しみ候(ひ)てし候と覚し召さるまじく候。敵船に乗り移り候迄と存(じ)候(ひ)てし候。船近づき候へば、熊手を掛けて生け捕りにし候と承け給(ひ)候。生け捕られ候(ひ)て異国へ渡り候はむ事、死にて候はむには劣るべく候。熊手に掛けられ候はば、草摺の端づれを切りて給(ひ)候へ」と申(す)に、たかまさ、「不覚仕りて候。野中殿許りは乗せ奉るべく候つる物を」と申(し)て、身近く在りし若党の着たりし小桜を黄に返したる兜を脱がせて、「召され候へ」とて得しを、給(ひ)候御事喜び入(り)候へども、「兜を着られ候はで、討たれ給(ひ)候なば、季長故に候と妻子の嘆かれ候はむ事、身の痛みに候。給(ふ)まじく候」と申(す)を、「重ねて召され候へ」とありしに、「誓詞を立てて申(す)時、御誓証の上は主に着よとて取らす。今少しも身を軽くして賊船に乗り移らむ為に、負ひたりし征矢を解き捨てて、ひたた

詞十二・上・下の文は右側より左側へ読み進む。

『日本絵巻大成１４』「蒙古襲来絵詞」詞書釈文・小松茂美編

中央公論社

詞十二の事情は　竹崎季長は自分の兵船の回航が遅れたために自船がなくて困り、一度は肥後国の守護代安達盛宗の船が通りかかったので、その船に安達盛宗の手の者であるとして便乗したが、嘘がばれ、端船(絵十五の船の後ろに繋がれた小舟)のみを与えられて安達盛宗の船から降ろされてしまった。そこに「たかまさ」の船が通りかかった。「たかまさ」については、季長は「たかまさ」と呼び捨てにしているので、たかまさに対し身分的に上位者であるようである。また、この状況から季長と「たかまさ」は知り合い(一族の関係)の様でもある。

「たかまさ」は肥後国の武士で、得宗(とくそう)北条氏の被官か、肥後国の守護である安達泰盛の被官であるとも推察される。その「たかまさ」の船に、守護の要請であるから、その船を寄せるようにと、季長は同船するために方便を使ったが、「たかまさ」はそれが守護の要請ではなく季長の方便である事に気づいて、季長は「たかまさ」の船に同船することを断られてしまった。万事休すの季長は、「然るべく候はば、一身ばかり乗せられ候へ」と懇願をする。

季長は手の者はともかく、季長一人のみでも同船させてくれるように、手を摺り合わせて懇願した。それに対して「たかまさ」も「戦場のみならでは、何事にかたかまさに逢いひて懇願候べき、召され候へ」と、乗船を認め、季長の願を聞き入れてくれた。「たかまさ」と季長の戦場での武士同士での助け合いが偲ばれるのである。

「船近づき候へば、熊手を掛けて生け捕りにし候と承け給わる候。生け捕られ候うて異国へ渡り候はむ事、死にて候はむには劣るべく候。熊手に掛けられ候はば、草摺るの端づれを切りて給う候へ」と申している。

詞十二の解釈の現代文　『蒙古襲来絵詞と竹崎季長の研究』佐藤鉄太郎著・「第八章・竹崎季長の生き方」より季長の焦(あせ)る心境をみる。**絵は十五、十六となる。**

当時日本の武士達が乗った船が蒙古の船に近づくと、蒙古兵は日本の武士達を熊手に引っ掛けて生け捕りにするという噂を聞いて、季長は次第に自分が乗った船が蒙古の船に近づくにつれて、不安になった心情を正直に言っている。「生け捕られ候(ひ)て異国へ渡り候はむ事、死にて候はむには劣るべく候」と。もし蒙古兵に生け捕られ、外国へ捕虜として連れていかれることになったら、死んでしまうことよりも堪え難いことであると。もし、蒙古兵の熊手に引っ掛けられて、蒙古兵に生け捕りにされそうになった場合、その熊手に引っ掛けられている季長の鎧の草摺(くさず)り(甲冑の垂れ)の端を切

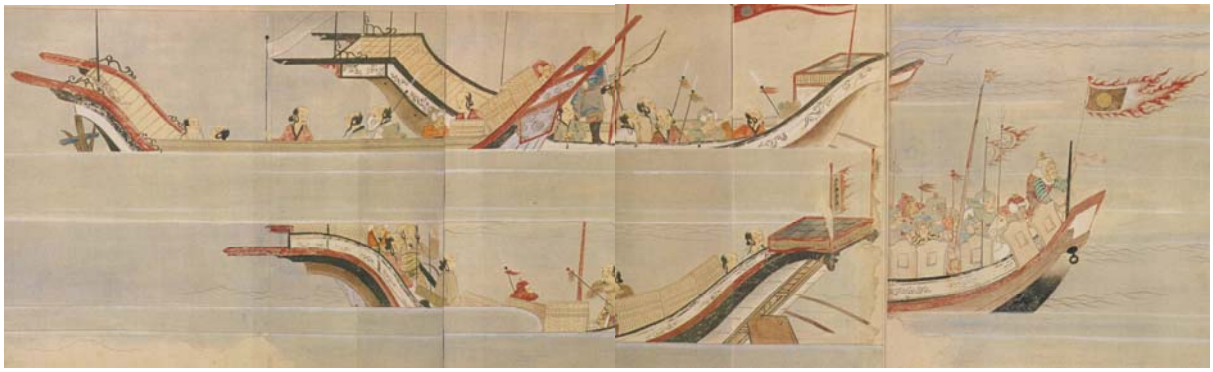
って自分を助けて下さいと、「たかまさ」に頼んだ。「たかまさ」は「ふかくつかまつりて候」と「たかまさ」は答えてくれた。　※季長の頼みを「ふかく」(深く)十分に承知したと答えている。佐藤氏は「**深く**」解し、詞十二の下段には**不覚**と解されている。

応戦する蒙古軍船

絵十七・応戦する蒙古の軍船・鐘や太鼓に合わせ矢を射て来る。蒙古軍の軍船は豪華な船飾りを施し、蒙古軍の威勢が見られる。この画面の部分を拡大すると下記の絵図となる。志賀島の海戦絵図か。

絵十七を接近して詳細に見ると軍船とは思えぬお洒落な装飾となっている

絵十七・左側の舳先を拡大すると飾り模様　　同右側を拡大すると船体の装飾模様が現れる



絵十九・停泊する蒙古船、舳先(へさき)が同じ場面の方向に向いている。　　**絵十八**・志賀島海戦に大勝した蒙古軍が島の周辺に船を停泊する場面。絵十八右側の画面は陸地の日本軍の偵察と防禦の備えか

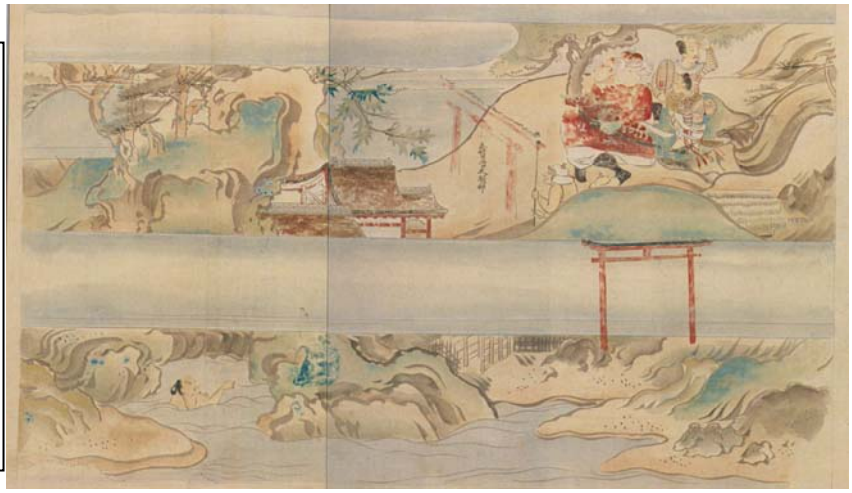
蒙古軍の軍船は　華麗な船飾りを豪華な戦船、恐らく、志賀島海戦の場面であろう。逆巻く荒波の中、舷々相摩（げんげんあいま）す壮絶な海上戦の模様を伝えている。大きな旗を振り回しながら銅鑼（どら）・太鼓を激しくたたく、両軍の矢叫びが入り交る修羅場となっている。

※絵十九拡大、蒙古将兵の髪型は、後に振り分け、左右で角髪（みずら）の輪を作り耳あたりに結んでいる。角髪（みずら）・日本の上古における男性貴族の髪型は古墳時代に見られる。

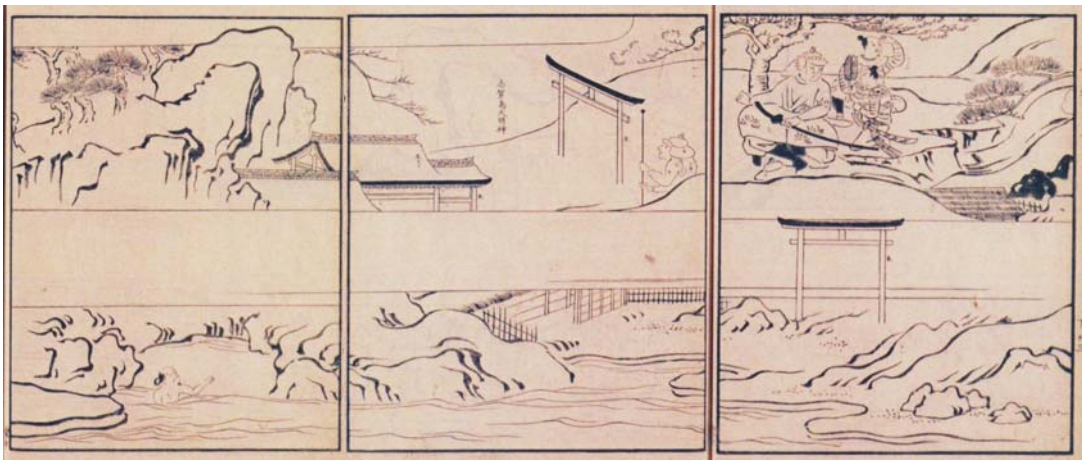
絵二十

謎の志賀島の蒙古兵

弘安の役の初め志賀島に上陸した蒙古軍の将兵と志賀島を描いた絵図となる。左下の海中に謎の男がいる。



絵二十・絵巻の上段にかすれた鳥居に「志賀島大明神」と注記、志賀島へ上陸の元軍を描いたもの



※上記の絵図は『丹鶴叢書』「蒙古襲来絵詞」に描かれている「志賀島の蒙古兵」の画面となる。左下の海中にいる日本人とも思える人物がいる、季長の諜報活動者とも云われている。

左絵二十の右側部分の拡大、　**右**『丹鶴叢書』・刀を持つ元軍将の右には軍配を持ち海遠望している従者がいて、**左**の絵の下に元軍の兵士が島の陸側を監視している。どの様に解釈する画面なのか？

絵二十絵は手直しされた場面となる　『蒙古襲来絵詞と竹崎季長の研究』佐藤鉄太郎著から要約で述べる。

「この場面は蒙古軍の従者らしく描かれている２人の蒙古兵は、一見すると２人とも同じような将軍の従者のように見えるが、詳しく見て見ると、奥の団扇（うちわ）を持った人物は非常に堂々として風格がある。身分の高い、或る程度年齢がいった人物に描かれ、手前の蒙古兵は若く、団扇を持った人物の兜を手に捧げ持つ格好で描かれており、明らかに奥の団扇を持った人物の従者として描かれている。」

「１回目の手直しで３人が描き込まれた。３人の内、奥の団扇を持った人物は、元々は身分の高い主人と描かれていて、２回目の手直しで、左側の従者として描かれていた人物の上に将軍が大きく描き込まれたもので、１回目の手直しでは主人として描かれていた奥の団扇（うちわ）を持った人物も、共に従者にされてしまったのであろう。つまり、主人として描いていた奥の団扇を持った人物を目立たせないようにして従者のようにしてしまうためであろう。」と推測している。

志賀島における蒙古兵の場面は　『竹崎城・熊本県文化財調査報告 17 集』参考に。

絵二十の志賀島大明神の上段に蒙古兵の大将と、その従者と思われる二人の兵と、頭だけが見える一人の兵がいる。下段の水中に裸の日本兵と思われる兵士が描かれている。一説に、水中の武士は日本兵で、季長に関係ある人物が泳いで志賀島に忍び寄り、島の敵情偵察を図った場面であろうとする説。二説は、軍配を使うのは蒙古軍の兵と考えられ、従者の一人は額に手を当てているのは、博多湾方面から進撃して来る

日本の軍艦を眺めている絵図となる。「なれぬ日本の画家が描写したためである」とも云われている。『蒙古襲来絵詞』を模写したことで有名な絵師「福田太華」が欠落の絵を推察して描き『絵詞』が散失することを憂い、模本３部を作製したと云われている。

「生首を二つの首が槍にさしている」　右の絵図は「丹鶴叢書本」（紀州丹鶴城主の水野忠央が編集した）に挿入される。

これは福田太華がこの部分を自ら挿入画としものである。高島千春（土佐藩の画家、古画の研究者）によれば福田太華は、「菊池神社本」と「御物本」や他の模本と異なる場面が一つある。それは、志賀島における蒙古軍の諸将兵の状況である。御物本や他の模本には蒙古軍の将兵とおぼしき人物が不釣合に描かれているが、「菊池神社本」では、それが描かれていない。これは福田太華の作意によるものである事は明確である。と、高島千春は述べている。

菊池武房の手者の分捕り

安達盛宗（泰盛の子息）の陣屋で軍功報告の場面

絵二十一の説明・安達盛宗の浜辺に丸太を切り出し造作の草ぶき屋根が陣屋の場面となる。その中央に萌黄（黄色がかった緑）の直垂姿、左手に籠手（手の防具）をつけ、脇に立派な兜と大鎧の若武者は注記に「肥後国時の守護人城次郎盛宗」と明記されている。正守護である安達泰盛の代理として肥後国に下向、国内の武士を束ねる泰盛の次男盛宗である。左より二人目季長と盛宗の間に、元軍の首級が二つ置かれ「季長が分捕りの首」とある。その前で、矢立（携帯用筆記用具）と筆と紙につづるは、季長の勲功を記録している「執筆」、評言を記録する係となる。

右側端にいる人物、同じ直垂に見える紋様には、銭が二つ並んでいて「連銭」の安達家紋となっている。又盛宗の大鎧の草摺（草の葉や花を擦り付けて染めたもの。甲冑の胴の裾に垂れ下半身を防禦する）の裾らに同様の文様がある。

閏７月５日の合戦に出立する、絵十四の旗をなびかせ進む船は安達家の連銭の旗であるが、差し替えられて「大矢野氏」の家紋となっている。

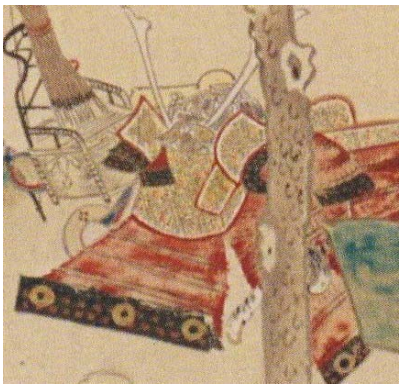
季長は２度の出陣をしたが、季長が敵の首級をあげたのは後巻の絵十六のみであるから、合戦終了後の軍功記録場面を絵二十一強調したかったと思われる。

絵二十一・弘安の役で分捕の手柄を肥後国の守護安達盛宗の引付している場面、軍功を報告する左から２人目季長、中央は安達盛宗「肥後国　時之守護人　城次郎」盛宗の左横に「季長分捕りの首、肥□□□　季長世六」中央手前は執筆係。左端の季長の従者の足の描き方に注意、後世に描かれた説が有力。

―『絵詞』後巻・終了―

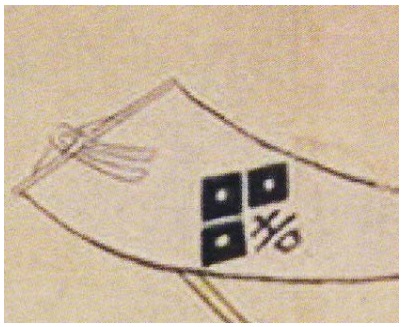
補足・蒙古襲来絵詞出て来る家紋

安達家「連銭」の家紋



安達盛宗大鎧に「連銭」家紋

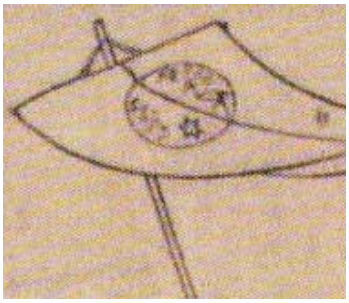
安達家従者にも「連銭」家紋



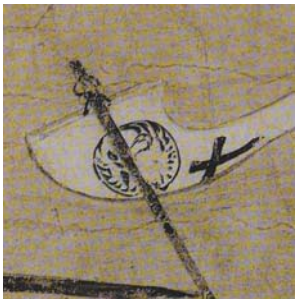
竹崎季長の紋

少弐（武藤）景資の紋

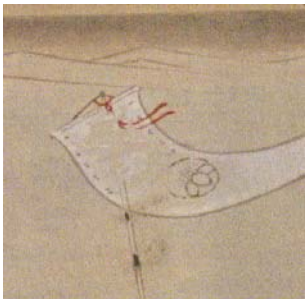
菊池武房の紋



白石通泰の紋



薩摩国守護下野守久親の紋



大矢野氏の紋

『蒙古襲来絵詞』について

現在の『蒙古襲来絵詞』の絵は、前巻の絵が１０、後巻の絵は１１、合計絵２１となる。詞は、前巻は詞９、後巻は詞１６となる。絵師たちの優れた技術よって描がかれ、『絵詞』は朝廷の絵所の絵師によって作製されたと考えられている。

又、蒙古襲来絵詞の詞書と絵がかなり欠落していると誤解されている捉え方があるが、絵巻は詞書と絵とから構成されているのであるから、詞書で内容を説明し、その内容を絵で表現する訳である。

詞一つに絵一つとする組合せが絵巻の構成の原則であるが、『絵詞』に於いては、例えば、詞書と絵との関係を、詞四について見ると、詞四については**絵六～絵七**とその他、少なくとも２つか或いは、それ以上の絵が存在していなければならない。

絵六～七の不足絵を『丹鶴叢書』の絵で補ってみたが、それでも詞１つにつき絵１つとする絵巻の構成は飽く迄も原則であり、『絵詞』はそういう構成にはなってはいないのである。従って、詞１つにつき絵１つとする構成を前提として、蒙古襲来絵詞の詞書と絵とを対象とすれば、詞書と絵との配列に齟齬をきたし、詞書も不足し、絵も不足してしまうのである。

従って、そこから導き出される結論は『絵詞』の詞書と絵はかなりの部分が欠落してしまっているととう事になってしまうのである。詞書の一節だけを抜き出して象徴的に描いている絵もあるのである。詞書と絵との関係は決して硬直した関係ではない。現在、『絵詞』の詞書と絵の遺存について論及する研究者はかなり欠落していると考えているが、蒙古襲来絵詞の詞書と絵はかなりが遺されており、現存している蒙古襲来絵詞は成立当初の形を概(おおむ)ね伝えているのである。

結論を言えば、『絵詞』は本来同じ形、同じ内容のものが二種類作製されていたものであり、現存している蒙古襲来絵詞は、そのような当初の蒙古襲来絵詞の形を遺しな

がら、その二種類を一つに纏めたものなのである。二種類の蒙古襲来絵詞を一つに纏めるに際しては二種類の蒙古襲来絵詞から適当に部分、部分を使用して一つに纏めたものである。

生（息）の松原　　福岡市西区

参考にした書籍、『蒙古襲来絵詞と竹崎季長の研究』佐藤鉄太郎著。『鎌倉びとの声を聞く』石井進著。『モンゴル襲来の衝撃』佐伯弘次著。『竹崎城・熊本県文化財調査報告書１７集』昭和５０年。『蒙古襲来』服部英雄著。『蒙古襲来の研究』相田二郎著。『モンゴル帝国の興亡・上』『クビライの挑戦』杉山正明著。『安達泰盛と鎌倉幕府』福島金治著。『蒙古襲来・上・下』網野善彦著。『軍事史学』152 号。『絵巻・蒙古襲来絵詞』宮内庁三の丸尚蔵館。『日本絵巻全集 14』中央公論社。『皇室の至宝・御物・絵画Ｉ』毎日新聞。『角川絵巻物総覧』。

第2部・『蒙古襲来絵詞』から見えて来ること

『蒙古襲来絵詞と竹崎季長の研究』佐藤鉄太郎著、『竹崎城・城跡調査と竹崎季長』熊本県文化財調査報告・第１７集・監修同教育委員会を参考にして考察を進めて行く。

『蒙古襲来絵詞(えことば)』の作製の経緯　『蒙古襲来絵詞』は、竹崎季長が１３世紀後半に日本を襲った２度のモンゴル襲来に対し、自らの武功を記録した『蒙古襲来絵巻』となっている。従って、蒙古襲来時の戦闘場面を全てに亘って描いたものではない。因って、『蒙古襲来絵詞』は竹崎季長の個人的な合戦絵巻物語であるので、『竹崎季長絵詞』と言われる由縁である。事内容に関しては、当時の合戦様子を忠実に描いた史料価値の高いものなる。そして、この絵巻の作製の動機について、いろいろな経緯(いきさつ)が伝えられており、その絵巻が今日、大体明らかにされている。

『蒙古襲来絵詞』=『竹崎季長絵詞』=『絵詞(えことば)』との名称となっている。この『絵詞』原本は、現在皇室の御物(ぎょぶつ)(皇室の私有品)蔵となっており、実物は我々の目に触れる事ができないのである。また、『絵巻』の内容についても多くの部分が欠落していると言われていて、その絵と詞の欠落部分は未解決となっている。多くの模本(もほん)(原本同等に模写)が作成されているが、これらの模本は絵詞の部分が散失したと思われる部分を、推測して作製されているものもある。

原本である御物本は、文政年間(1804－30)に肥後国の画家、福田太華(たいか)(江戸時代後期の日本画家)により現在の形に纏められたことになっている。この『絵詞』は、元々は大矢野家(天草市)に所蔵されていたもので、大矢野家家伝によれば、竹崎氏の滅亡後、宇土(宇土市)の名和顕孝(なわあきたか)(宇土名和氏６代当主)に伝わり、その後、天草大矢野城主の大矢野(おおやの)種基(たねもと)(戦国～安土桃山時代武将)が、顕孝(あきたか)の娘と結婚した際、『絵詞』が名和家とは関係ないので、婿への引出物として名和顕孝より大矢野種基に譲られたという。その後、肥後国は加藤氏・小西氏の両家に分割統治され、大矢野家は加藤氏に仕えたが、加藤氏の没落後、細川家の臣となり、文政８年(1825)２月、大矢野門兵衛は『絵詞』の散逸を恐れて、細川家に保管を依頼していたが、明治２年の廃藩時に、大矢野家に返還された経緯となっている。

そして、明治２２年１２月、大矢野十郎より明治天皇へ献納されて現在に至っている。この『絵詞』が御物本(ぎょぶつほん)の原本となっており、御物本の『蒙古襲来絵詞』は上・下

の２巻に分かれて、文政年間、福田太華によって整理されたものが、現在の『絵詞』となっているのである。（『竹崎城・城跡調査と竹崎季長』熊本県文化財保護協会・１７集より）

『蒙古襲来絵詞』を描いた絵師達の想い　『絵詞』の代表的な場面の絵七は、竹崎季長の奮戦している名場面絵図は、『平治物語絵巻』の六波羅行幸巻に描かれている絵図とよく似ている。『平治物語絵巻』は比叡山延暦寺の秘蔵であったため、見ることが出来る人は天皇・法皇等に限られおり、それ等の人々に近侍することが出来た、ごく限られた朝廷の絵所の絵師、いわゆる宮廷絵師であったと思われる。

絵七の絵図拡大、季長の馬が跳ねる

『平治物語絵巻』「六波羅行幸」の馬の構図と類似

従って、『蒙古襲来絵詞』を描いた絵師は、『平治物語絵巻』を見ることが出来た絵師と推測されるのである。朝廷の絵所の絵師、又は宮廷絵師であることが想定され、蒙古襲来絵詞は大和絵の描き方に従い忠実に描がいており、そうした作風から見て、肥後国の熊本や大宰府で作製されたとは到底考えられないのである。

絵一（『絵詞』最初の季長隊の出陣）に描かれている場面は、洗練された優れた丁寧な描き方であり、かなりの技術を有した絵師、宮廷絵師に依って描かれたものと思われる。蒙古襲来絵詞と同じ頃の西安元年（1299）に描かれた歓喜光寺（京都山科区時宗の寺院）が所蔵する国宝、『一遍上人絵伝』（愛媛県）に描かれた絵は、京都の絵師円伊が描いた海・川の描き方によく似ている。因って蒙古襲来絵詞も京都の宮廷絵師によって描かれていることを裏付けるものである。と、佐藤鉄太郎氏は述べている。

『蒙古襲来絵詞』の作製の動機を考える　現在『蒙古襲来絵詞』は前巻と後巻の２巻に収められているが、本来の『蒙古襲来絵詞』は現在とは異なっていた『絵巻』であると想像する。現在の『蒙古襲来絵詞』の形にしたのは１９世紀の初め頃、福田太華の

所為であると前に述べた。それでは竹崎季長が製作した当時の『絵詞』はどの様な構成であったものであろうか。

現在、『絵詞』の前巻は、詞（ことば）１～詞９となり、絵は１～絵１０となる。後巻は、詞１０～詞１６となり、絵は１１～絵２１となっている。(前後巻の詞は合計１６、絵の合計２１となる)これらの詞書と絵の内容を分類すると、

①・詞１から詞４、絵１から絵８は竹崎季長の「文永の役」で活躍を描いたもの。

②・詞５から詞９、絵９から絵１０は文永の役で「先駆けの功」を挙げたにも拘わらず武功に洩れ、御恩奉行安達泰盛の庭中（ていちゅう）にて、東海郷の地頭職を賜る経緯となる。

③・詞１０から詞１４、絵１１から絵２１は「弘安の役」で、竹崎季長の博多湾の合戦を描いたもので、以上内容は３部構成となっている。

竹崎季長が『蒙古襲来絵詞』を作製した趣旨は「文永の役」、「弘安の役」で勇敢に戦い、結果を出した武士である事、その戦功として東海郷を甲佐神社(熊本県上益城郡（かみましきぐん）甲佐町)の神意として、将軍から拝領した正統な領主になった事、これらの事を人々に周知させる事であったのであろう。竹崎季長は誇り高き勇敢な武士であり、海東郷の正統な領主であることを人々に知らしめるために、又、認めさせるために、この蒙古襲来絵詞を作製したと考える。竹崎季長は先ずこれ等の内容の蒙古襲来絵詞を一つ作製して、その次に成立したこの蒙古襲来絵詞を手本にして、新しい２つ目の蒙古襲来絵詞を作製した。そして、新しく作製した『蒙古襲来絵詞』を甲佐神社に奉納したようである。

従来に考えでは、竹崎季長が蒙古襲来絵詞を作製した目的は「甲佐大明神の神恩（しんおん）に奉謝するためである」とされてきた。しかし、竹崎季長は海東郷を拝領したのは甲佐大明神の神意である事を、不自然に強調している意図があったと見るべきである。

竹崎季長が蒙古襲来絵詞を作製した目的は、単純に甲佐神社の神意に奉謝するためであると受け取る訳にはいかない。竹崎季長が海東郷を拝領したのは甲佐大明神が、竹崎季長を海東郷に入部させようとする神意であったとするのは、季長が甲佐大明神の神意を借りて、季長が東海郷を拝領した事を、その地域を領する事を正統化(正しい系統)したものと解するべきである。

甲佐大明神が季長に東海郷を賜る様にお告げがあったとする内容は「関東海東と同じ文字なり、依って海東を給わるべき」と、海東郷の海東が季長の御恩奉行で庭中(直

接訴訟機関)するために参ろうとする関東と、同じ意味合いの文字であるからであるとする等の、随分と自らに都合の良い解釈を根拠としている。この様な都合の良いお告げを甲佐大明神のお告げとしては本来ある筈がない。つまり、季長が海東郷を賜った事ににについて、それを甲佐大明神の神意であると、正統化する必要があったのではないか。そして、この事を既成事実として記した絵巻物を作製して奉納した。ただ単に甲佐大明神の神意に奉謝するためではないと思うのである。

竹崎季長が蒙古襲来絵詞を作製して奉納したことは、甲佐大明神の神意が強調され、季長の海東郷支配は甲佐大明神の神意であったとする、季長の海東郷の支配の精神的な柱を必要としたためであろう。季長の行為は、甲佐大明神の神恩への感謝と云うよりも、季長の海東郷を領有する事を甲佐大明神の威光を借りて、海東郷の支配を施行しなければならない様な状況が、季長の周囲に問題が存在していた事を物語っていると考えたい。つまり、季長は文永の役の恩賞で海東郷を拝領したが、再び季長の周辺に海東郷支配権をめぐる争論が生じた事を、物語っているのではなかろうか。後の「竹崎家」後裔が海東郷竹崎の地で、非常に判りぬくくなっている事情と、何か関係があるのかも知れない。と、佐藤鉄太郎氏は述べる。第４部・追記編・③で甲佐神社での竹崎城での現地報告で述べる。

霜月騒動を考える　　『安達泰盛と鎌倉幕府』福島金治著を参考に進める。

弘安８年(1285)１１月１７日に鎌倉で起きた鎌倉幕府の政変である。８代執権北条時宗の死後、有力御家人の安達泰盛と、得宗家(北条氏惣領の家系)の執事、平頼綱(北条氏御内人)との対立が激化し、頼綱方の先制攻撃を受けた安達泰盛と、その一族らが滅ぼされた事件となる。源頼朝没後以来、繰り返された北条氏と有力御家人の抗争は続いており、幕府創設以来の有力御家人たちの崩壊に繋がっていたのである。

弘安７年(1284)４月４日、北条時宗が早世し、これを機に時宗の執権外戚(母方)にして有力御家人であった安達泰盛と、北条得宗家直臣(鎌倉幕府北条氏惣領の家系)である御内人(得宗の家臣)の筆頭にして、内管領(執権北条氏の宗家筆頭執事)である、平頼綱と対立関係が悪化して行く。泰盛の政治活動の執権を中心に評定衆(幕府の行政・司法・立法を司る最高政務機関)・引付衆(評定衆を補佐して訴訟の裁判迅速の設置)が整備され、御家人の合意を集約する執権政治の流れは出来ていた。一方、北条氏嫡流の得宗が寄合を通じて、政務機関を指揮する身内人が台頭してきた。安達泰盛は、寄合衆の中心

人物であり、得宗の権力者を牽制しながら、御家人たちも同じ列席に加えて現状の矛盾を解決して行く幕府最高の政務機関を目指していた。

この難しい政局の中、蒙古襲来の危機に直面した事によって、得宗御内人の勢力が増して来た。泰盛らは矢継ぎ早に制度改革案を打ち出し、弘安の徳政(時宗没後１年半に亘り幕府改革の実施)と呼ばれる幕府改革を主導した。泰盛は訴訟審判の引付頭となり、訴訟再審要求に応えての越訴(おっそ)奉行(順序を飛び越し上位に訴える)や御恩(ごおん)奉行(御家人の勲功調査・恩賞の是非を判断する)の要職に就いていた。御恩奉行は将軍に代わって知行安堵(あんど)を行い、その様子は『蒙古襲来絵詞』の主人公竹崎季長に所領を安堵して温情を示した事は大変な恩恵を与えたことになる。

しかし、翌弘安８年１１月１７日、平頼綱(たいらのよりつな)によって泰盛一族や有力御家人の多くが討たれ、泰盛一族の他５００人が自害し、武蔵(むさし)・上野国(こうずけのくに)の被害も多く、武蔵では武藤左衛門尉、遠江では安達宗顕、常陸(ひたち)では安達重景、信濃(しなの)では伴野彦二郎らが自害した。これが世に言う霜月(１１月)に起きた事件、「霜月(しもつき)騒動」と呼ばれるものである。即ち「霜月騒動」とは外戚の御家人筆頭である安達泰盛と、直臣である御内人筆頭の内官領である平頼綱の権力闘争であったのである。

泰盛の幕府への権力者の成立ちは、頼朝の従者安達盛長の後裔の名門の血を引き、儒教や仏教の教養も深く、身分が低い御家人たちの意見も聞く姿勢を持ちながら、政治運営は厳格な態度で望んでいた人物像で、血筋を持った優れた政治家であった。

泰盛の血筋は、曽祖父盛長は流人であった源頼朝の当初からの従者として活躍、頼朝挙兵時には相模国内の武士や下総国の千葉常胤(つねたね)等を味方に付ける活躍をし、幕府成立後は上野・三河守護となっている。祖父・景盛は北条政子の信頼が厚く、実朝の死後に出家し、実朝と政子を供養する金剛三昧院(こんごうさんまいいん)(和歌山県高野山)を建立する経緯となる。

岩門合戦(いわとがっせん)へと飛び火　霜月騒動に連動して騒動が起きたのは、九州博多郊外の岩門城(福岡県筑紫郡那珂川町)に飛火、合戦が起こった。筑前守護武藤(少弐)経資(つねすけ)の軍勢と、弟(庶子(しょし))の景資(かげすけ)と肥後国守護代盛宗(泰盛の子息)の軍勢が衝突し、景資と盛宗は敗死した。岩門城は景資の居城で博多が一望できる城で、岩門城から背振山を越えれば肥前国神崎荘、蒙古襲来恩賞地の大部分を占める博多支配の拠点となっていた。景資と与力した宗盛は、蒙古襲来後に肥後国守護代として下向し、景資は蒙古襲来の大将を務め、合戦後は御家人らの戦功認定の実務にたずさわり、盛宗と親密な関係を結んでい

た。景資・盛宗側には筑前国に水城氏、筥崎社執行成直、豊前国の高並氏、その外側に金田氏、永利氏、筧氏らがいた。経資方には、武藤氏(少弐)一族、筑前では野介氏、青木氏、一宮の住吉神社主佐伯氏、豊前国では宇都宮氏、肥前では白石氏、土々呂木氏、斑島氏、松浦氏ら集合勢力が多くいた。

弘安４年(1281)肥前国守護に下向していた事による安達宗盛に恩賞に与った御家人たちは、どのような思いでいたのか。その御家人たちの行動は、岩門合戦に姿を見せず、更に泰盛から格段の恩賞拝領を受けた竹崎季長の姿も見えない。そして、南九州の御家人達も姿を見せず、幕府の政局に微妙な立ち位置いた御家人達の立場が反映されていたのである。

肥前国御家人は反安達側に回った理由を推測すれば、北条為時が弘安８年１１月に平頼綱に上奏した書状に、同年１０月に肥前国「松浦党」の地頭等２０人が鎌倉へ直訴した時、幕府は鎮西の御家人たちの鎌倉参上を禁止する御教書を出した。幕府はこれ等を理由に沙汰を保留し、霜月騒動の１カ月前から「鎮西特殊合議訴訟機関」は御家人たちの要求に応えられないでいた。その不満が少弐景資・安達宗盛の勢力を弱体化させていたのである。この「松浦党」に関して第３部Ｐ104～105 で述べる。

合戦の翌年、幕府は「弘安の役」の恩賞地を配分にあたり、岩門合戦の闕所(欠所)地は御家人たちに格好の拝領地の対象になっていた。鎮西の動向に強い影響力を持っていた武藤氏(少弐)は、弟景資の分裂と敗北によって弱体化し、その後、得宗家の権力は強勢となって行くのである。

『保暦間記』

霜月騒動の評価を語るものに中世の歴史書『保暦間記』(14世紀半ば)から霜月騒動記録がある。

『保暦間記』の矢印の所辺、「八年四月十八日・・・種々ノ讒言ヲ成程ニ泰盛ガ嫡男秋田城介宗景ト申ケルカ憍ノ極ニヤ曽祖父景盛入道ハ忝モ右大将頼朝卿ノ末ナレバハカラントテ俄ニ源氏ニ成ケル其

時(とき)頼綱入道折(おり)く得テ宗景ガ謀判ヲ起シテ将軍ニ成ラント企テ源氏ニ成ヨシ訴フ誠ニ左様ノ心モ有ツルニヤ・・・」（国立国会図書館デジタルコレクションより）

『保暦間記』を現代文で　《泰盛の権勢は陸奥守となって並ぶものが無くなった。その理由は時宗の舅だったことによる。時宗が死去した弘安７年に北条貞時が執権となると、泰盛は外祖父の立場で驕(おご)りが出てきた。貞時の内管領(うちかんれい)(御内人(みうとびと))平頼綱も一方の権政者で、驕(おご)ることでは泰盛と同じであった。翌８年４月、貞時が相模守になると泰盛と頼綱の不仲ははっきりしたものとなり、互いにいろいろな讒言(ざんげん)(告げ口)し始めた。

その頃、泰盛の嫡子宗景は驕りが極まり、曽祖父の景盛は源頼朝の子であるといって、突然に源氏を名乗るようになった。宗景は謀反を起こして将軍になろうと企てたという。実際、その様な志もあったのではなかろうか。結局、泰盛父子は１１月１７日に誅殺された。兄弟一族の外に刑部卿相範・三浦対馬守・隠岐入道・半野出羽守ら志あるしかるべき侍たちも、泰盛の味方とみなされて殺害された。これが霜月騒動である。》と記録がある。

竹崎季長と霜月(しもつき)騒動・岩門(いわと)合戦　『蒙古襲来絵詞と竹崎季長の研究』佐藤鉄太郎著参考し話を進めて行く。霜月騒動で討たれた安達泰盛、霜月騒動で連動して起きた岩門合戦で討たれた少弐景資とは、気持ちが相通じた間柄で知られている。鎌倉幕府による安達泰盛と少弐景資の両氏の討伐について、竹崎季長の心境を考えてみる。先ず初めに安達泰盛の関係を具体的に考察し、『絵詞』の「**詞(ことば)八**」（「絵九」）、鎌倉泰盛屋敷場面を、現代文で読む。

《同四日、甘縄(あまなわ)の館に参(さん)ずるに、肥前国(ひせんくに)の御家人中野藤次郎小切者(こきりもの)(庶子)にて召(め)し仕(つか)はれしが、季長に対面して、「昨日御庭中(注)有けるか」と問うに、「方々御奉行に申候いえども、執り申されず候を以て、直に申上げて候」と申に、「御内の然るべき人々数多候し中にて、御庭中の次第仰せ出され候うて、「先押し候し事、三郎左衛門にたづ□□んに、虚誕(きょたん)を申上げれば、軍功をすてられて首を召されるべし」と申す。「奇異(きい)の強者な」と玉村(たまむら)(名前か)に仰せ候うて、「後日の御大事に駆けつと覚いる」と御物語の候し御面ほくの仰せに候程に、「未だ見参に入らず候へども、筑紫の人は懐かしく思い参らせ候て申候。定めて御勧賞(かんしょう)は候と覚え候」と告げ知らせしを以て、それより常に申うけ給張り候き。・・・(略)》　**庭中(ていちゅう)**・訴訟手続き制度の一つで、手続き等により不利益を受

けた原告が救済を求めて直接訴訟機関に提訴する。「庭」とは朝廷に於いて訴訟を行った場所を指し、口頭で直訴することを「庭中」と呼んでいた。判決に対する越訴とは区別される。

詞八に記されているように、鎌倉の甘縄(あまなわ)(鎌倉大仏と長谷駅の間)の安達泰盛邸には、九州肥前国の武士の中野藤次郎(庶子)が仕えていた。藤次郎は武士の才覚に目をつけられて泰盛と主従関係を結んでいた。安達泰盛は優れた才能ある武士や、勇猛な武士たちに目をかけ、それらの武士と主従関係を結び、被官者を囲い込んでいる様子が見られる。先ず、竹崎季長と安達泰盛との関係を見て行こう。

竹崎季長が健治元年(1275)１０月３日、初めて鎌倉甘縄の安達泰盛の館に庭中に参上し、その翌日に肥前国御家人中野藤次郎に、「虚誕(きょたん)を申上げば、軍功を捨てられて首を召さるべし」と申され「奇異(きい)の強者(こわもの)な」と、館主泰盛が稀に見る勇者であると誉め讃えていると、その言を季長に伝えた。季長は泰盛に「きいのこはものな」と評価された事に心より舞い上がったに違いない。安達泰盛は季長について「後日の御大事にも駆けつと覚ゆる」と、後日必ず役に立つであろうと将来を見越して好意を示したのである。泰盛のこの言及は、季長の琴線に触れる人心掌握術に優れていた人物であることが分かる。

竹崎季長の実情を解釈すれば、「文永の役」に於いて先駆けをして傷を負っただけであり、分捕り(首を取る)や討死の功は無かった。先駆けだけでは、恩賞を与える対象にはなってはいない。それにも拘わらず、安達泰盛は竹崎季長に東海郷の地頭職を与えた。季長は泰盛の好意により、１１月１日、見参所に召されて、東海郷拝領の下文を賜った。尚、合戦戦功の百二十人の勧賞(かんしょう)者受領の人たちは、大宰府を経て下文を賜わる運びとなっており、季長一人だけが安達泰盛から直接下文を賜っていたのである。

季長は更に、泰盛から馬と鞍を賜わった。『蒙古襲来絵詞』絵十、前編終了に大和馬賜りの絵図場面である。泰盛は季長が鎌倉へ庭中に参上の時、その費用捻出のために馬と鞍を売り払っていた事を聞き知り、季長の気持ちを察し、馬と鞍を贈ったのは明白であり、心憎い安達泰盛の演出である。詞十五に季長は、「泰盛の御事□□、かの人、是を判じ申す。をよそ勧賞に預かる人、百二十余人なりと雖(いえど)も、直に御下文を賜わり、御馬を賜る事、ただ季長一人ばかりなり。弓箭の面目を施す事、何事かこれにしかむ。・・・」と、季長は武士の名誉に感激している。

この様に安達泰盛は九州の御家人の上に立つ盟主になることを、将来の展望に賭け

ていた事が読み取れる。安達泰盛は季長に対し、配慮以上の取り扱いを見て行くと、安達泰盛の下に多くの武士(庶子等)が家人として集まって来ている事が分かる。泰盛は季長を将来何か節に、家人として迎える気持ちは十分あったと考えられ、季長も泰盛という人物に大恩ある人物と受けた事は間違いない。

次に竹崎季長を取り巻く周囲には、少弐景資(かげすけ)が『絵詞』絵二に「太宰少弐三郎左衛門尉景資二十九　むまぐ足に似絵(にせえ)(似顔絵)其勢五百余騎」記されており、絵五に「白石六郎通泰　其勢百余騎とあり、詞三に肥後国の菊池武房の「その勢百余騎ばかりとみえ」とあり、なかでも少弐景資は五百余騎の大武士団を構成していた。

ここで竹崎季長と少弐景資の関係について見て行く。少弐氏(工藤・武蔵国)が鎌倉時代の初め、九州に派遣された下り衆で、下り衆の中では最有力者であったが、少弐景資は少弐氏の惣領ではなく、庶子(しょし)(正室以外の生まれ)であった。少弐経資(つねすけ)(惣領)の武士団とはあくまでも別の軍勢となっている。少弐景資は庶子でありながら、おそらく九州で最大規模の武士団を統率しており、母系の血筋と才能によったものであろう。

Ａ・太宰少弐三郎左衛門尉五百余騎　Ｂ・白石六郎通泰百余騎　Ｃ・菊池武房百余騎・『丹鶴叢書』より

竹崎季長と少弐景資との関係をみると、蒙古合戦の「文永の役」に於いて、季長は少弐景資の命令に従って、博多沖の浜で蒙古軍と対峙して時、季長は景資に「蒙古軍が攻めて来るまで待っていたら、軍功を挙げることは出来ない、先駆する」と、声をかけ、少弐景資の沖の浜陣前を、季長は通り過ぎようとすると、少弐景資の家人に「馬から下りて通れ」と言われた。季長は「先駆けをするために先を急ぐ」と言って下馬を断り、通り過ぎようとしたら、少弐景資は「めされ候へ」と騎乗のまま通り過ぎるのを気持ちよく許してくれた。季長は詞一で「大将軍太宰(だざい)少弐三郎左衛門景資(かげすけ)」、詞二では「日の大将少弐三郎ゑ□」と敬意を込めて表現している。こうした季長に対する少弐景資の心情は小領主たちに安心と期待との絆を強くしたに違いない。

この「文永の役」の時、季長は鳥飼潟の塩屋(３部Ｐ84・麁原(そはら)の隣)での先駆けの功を挙げた事ができた。この合戦について白石六郎通泰が承認となって少弐景資の引付(ひきつけ)(訴訟機関)に一番につけてくれた。しかし、季長はこの合戦での先駆けの活躍は、少弐経資(惣領)は認とめず、季長の戦功は鎌倉には報告されなかった。当時の事情は、分捕り討死の功でなかったために戦功と認められなかったのである。少弐経資同様に御恩奉行安達泰盛も本来認めなかったのであるが、少弐景資(庶子)は季長の先駆けの戦功と認めて引付に付けたのである。この様に、少弐景資の人間性が庶子でありながら、五百余騎の大軍勢を集める事が出来る器を持った人物であったことが分かる。

岩門合戦についての少弐経資(惣領)と少弐景資(庶子)の真相は　『歴代鎮西志』(25巻・犬塚、盛純著)が記すように少弐景資が、兄の経資を除いて、少弐氏の惣領の地位を奪おうとしたものであるならば、岩門合戦に於いては少弐景資と兄の経資との対立が全面に表われなければならない。しかし、岩門合戦に於ける少弐景資と兄の経資との対立は直接的には表われていないし、兄経資が弟景資を攻撃する様な現象も表れていない。従って、『歴代鎮西志』が記すように岩門合戦は少弐景資が野心の意があって兵を構えたために起きたとする事件ではないであろう。

本来は鎌倉幕府内、北条得宗の専制体制を築くために仕組まれた岩門合戦なのであるから、その事情は九州に於いても同じであろう。九州に於いては、蒙古襲来の防禦に最大の事情がある訳で、鎌倉幕府の意志を貫徹する強固な政治体制を固める必要があった。そこで鎌倉幕府は早急に、九州に鎌倉幕府の意向を強力に実行しうる体制をつくる必要が岩門合戦にはあった筈である。蒙古襲来後の安達泰盛と立場を同じにした少弐景資の両氏を、鎌倉幕府が素早く対応したのが岩門合戦なのである。鎌倉で安達泰盛が討滅され、九州に於いては少弐景資と安達盛宗(泰盛の子息)が討滅された事件は同じ性格の事件と見ることができる。

岩門合戦で少弐景資の討伐には肥前国の武士達が動員された。少弐景資を討伐するに当たって、鎮西奉行人、北条氏は場当たり的に武士を動員しているのではなく、幕府は周到に準備して、「警固之當番衆」であった肥前国の御家人や、鎮西探題の引付衆を動員して、少弐景資の討伐に当たらせたのである。

少弐景資の討伐に当たって、鎮西奉行人北条時定は警固之當番衆であった肥後国の御家人、後の鎮西探題の引付衆となる北条氏と密接な関係にあって、豊前国の御家人

等を動員しただけでなく、長門探題北条実政も討伐に当たらせている。このことは北条氏が西日本地域の北条氏一門の総力を結集して、少弐景資の討伐に当たっている事が分かる。且つ、北条氏は北条一門と、北条氏と密接な関係にある武士、北条氏が守護として直接指揮した肥前国の御家人だけで、少弐景資の討伐を行っているのである。

鎮西奉行人北条時定は少弐景資を討伐するに当たって、一般的な九州の御家人を動員するような事はしていない。北条氏一門のみと、北条氏に近い限られた親衛隊の勢力だけで少弐景資を討伐している事が、岩門合戦の本質となっている。

鎌倉の霜月騒動に於いて安達泰盛とその与党を討伐したのは、北条氏得宗貞時の内官領平頼綱である。得宗被官の内官領平頼綱が安達泰盛を討伐したからこそ、得宗専制体制を成立させることが出来たのである。北条氏が泰盛を得宗被官でなく、一般の御家人を動員して討伐させていたならば得宗専制体制は成立しなかったのである。

九州に於いて、一般の御家人を動員して少弐景資を討伐に当たり、北条氏は鎮西奉行人北条時定が、一門の長門探題北条実政や北条氏に近い鎮西探題の引付衆となった御家人、肥前国の御家人等の密接な関係にあった武士達のみを、動員して少弐景資の討伐を行ったのである。

岩門合戦の原因が『歴代鎮西志』に記す様に、少弐経資と少弐景資との惣領の対立が原因の事件であれば、少弐経資は討伐側になり少弐景資を討伐すれば、経資が岩門合戦の最大の勲功人であるはずであるが、少弐経資は勲功者として記されていないし、これを明瞭する資料も残されていない。

北条氏が九州の北条氏専制体制を固めるには、少弐景資とその与党を討伐することが政治的演出であり、岩門合戦後、この事件により景資らの所領没収地から、蒙古合戦の勲功者に宛てる所領を狙っていた。岩門合戦は北条氏が九州に専制政治体制の構築と、蒙古合戦の勲功賞を捻出するために企てた一石二鳥を狙った事件だったようである。で、なければ世は混乱と戦乱の世となってしまうのであろう。

上記の事情に加味すれば、竹崎季長は北条氏専制体制の行動には、「めんどくさい」との感覚があったのであろうか、季長は北条氏側にも景資と泰盛側にも、立ちたくない立ち位置でいたかも知れない。

竹崎季長の生き方を考える　鎌倉幕府は「文永の役」で武士団の軍兵の不足を痛感していた。「文永の役」後、再度の蒙古襲来に対して備える準備として、異国警護番役

(軍役)を整備すること、士率の数、即ち、軍兵の増員を企画して練り直しに追われた。そうした状況から、庶子であっても惣領から独立して異国警固番役を勤仕(つとめつかえる)する方針を、鎌倉幕府が打ち出したのである。これは鎌倉幕府が兵員不足から起きた蒙古合戦の打開策であって、これを武士団側(庶子)から見れば好機と捉え、庶子は惣領から独立することが出来る異国警固番役と捉えたのである。小集団御家人の庶子たちは好機と捉え、蒙古襲来を切掛けとして、庶子が惣領から独立して異国警固番役を勤め、惣領から独立しようとする庶子の動向は素早やかったのである。

竹崎季長も肥後国御家人の庶子として、蒙古合戦を絶好の好機として捉え、惣領からの独立を考えたことは疑いない。であるからこそ、「文永の役」に於いて季長は単身で武士団を編成して出陣した理由はそこにある。

ここで竹崎季長の心境に立ち入ってみる。季長は何故に「文永の役」で、認められなかった軍功にこだわり、鎌倉まで参上し安達泰盛に庭中に訴えたのであろうか。単純に蒙古襲来絵詞に記されている季長の主張を額面通り受取れない。季長の本心は、恩賞の獲得とは別に、もう一つ目的は、恩賞奉行のお墨付き「御下文」(上位機関者から下位機関者に出される命令書)を得る事でなかったか。格別の御下文があれば「庶子」であっても惣領と同格となり、惣領から独立して惣領と同じ身分に成ることか出来るのである。季長は蒙古襲来に於いて軍功を挙げることによって、恩賞を賜り、その上の「御下文」を賜れば、季長は念願の惣領から独立が可能となり、一家を構えることが出来る。以上のように推測すれば、季長が「文永の役」での軍功を認めてもらうために鎌倉へ参上への季長の執着心の理由が納得されるのである。

安達泰盛の正義とは　安達泰盛は季長の庶子の立場を見抜き、泰盛は自ら自身を考慮した上で、季長への軍功として海東郷の地頭職と御下文を与えた。泰盛は御家人たちの庶子が、惣領家から独立を意図している現状をふまえ、そのような庶子の意向を積極的に支援することで、泰盛は武士達の心を掴み将来に、「いざと云う時、自らの展望と野心を想定していたと考えられる」。この様な考え方が同じである人物は、「文永の役」で「鳥飼潟の塩屋」合戦に、季長の「先駆け」を少弐景資は分捕り・討死でない軍功を、本来認められなかったにも拘わらず、引付書下(評定衆の下に御家人領地訴訟裁判の迅速公正のために設置)を与えたことは、景資は泰盛と同様に庶子に示した好意と捉えることが出来るであろう。

季長が蒙古襲来絵詞の詞書でわざわざ少弐景資と出会い陣を、「生(おい)(息)の松原」で景資を美しく描き**「絵二」**、又、鎌倉の安達泰盛邸宅の様子**「絵九」**を詳細に丁寧に描いている事で理解できる。泰盛の子である肥後国守護の盛宗を威風堂々と武者絵**「絵二十一」**に描がいていることは、季長の心情の現れと思われる。

ここで肝心なことは、庶子の北九州の御家人たちは、討伐される側の安達宗盛や少弐景資方側に駆けつけたのではなく、討伐する北条氏側方の出方を応援するような出方で見守っていた。そして、宗盛や景資に冷酷までも気配りが無く、北九州の武士たちは北条氏方側に加勢し、討伐軍の邪魔しないように身構えていたのである。

人情的には、「これまでの泰盛に恩恵を受けている季長らは、安達盛宗側に組みして行動すべきでなかったか」と、捉える心情があると思われるが、しかし、当時の御家人の生き方、心情として同情する気持ちと、鎌倉幕府御家人として、武士として、どう生きるべきか。苦悶の御家人たちも、季長の心境の葛藤は如何ばかりであったか、それを記したものは何も残されていない。

在地領主達は北条政府の下、領主制を如何に維持して生きて行くべきか、その行動と葛藤の末、幕府御家人たちは、軍功を挙げて自らの領主制を維持する以上、鎌倉幕府と北条得宗家側に従うべきと、御家人達は結論に至った行動であろう。

宗盛・景資討伐軍に加わった武士団は、鎮西奉行人・肥前国守護北条時定に率いられた肥後国の武士達、鎮西探題の引付衆、北条氏と密接な関係のある武士達であった。季長の心情は恩義を与えてくれた泰盛や景資が討伐され事は、同情・哀れみは当然あった筈である。しかし、討伐に際し、どの様な行動を取るかは別問題である。季長は領主として、自らの領主制の維持の拡大を大一義(だいいちぎ)(最も大切な根本的意義)として行動をとって来た。もし、泰盛や景資の両氏の勢力が、鎌倉幕府・鎮西奉行人を超えるものであるなら別であったであろう。宗盛や景資の両氏が、人望や武士団として大きな勢力を有しても、鎌倉幕府・鎮西奉行人を圧倒する存在でなければ、竹崎季長の領主制を維持する望みは崩れてしまうだろう。

鎌倉時代の御家人らの武士道は、領主制を維持と領地を拡大する生き方は正義なのである。将軍を頂点にし、御家人を基盤としている鎌倉幕府は、領主制の維持の拡大を目指して創り出された国家体制である。個人的な好意や恩義を超えた思想であり、領主制の理論と季長の心情とを取り違えてはならないのである。

この『絵詞』が作製された時期、永仁元年(1293)四月廿二日は、安達泰盛を討伐した

平頼綱が、今度は北条貞時によって平頼綱は鎌倉経師ケ谷の館で討たれた。**「平禅門の乱」**である。北条九代記はこの事件について、《同(永仁元年四月) 廿二日寅刻。平左衛門尉頼綱法師景圓一族被誅訖。但宗綱脱灰。配流佐渡国訖。(続群書類従第二十九輯)と記している。》　この事件の翌々年の永仁三年六月九日、鎌倉幕府は北条九代記に、《三年乙未　六月廿九日評伝。弘安合戦事。賞罰共以不可有其沙汰。八月廿五日被召署起請文。(続群書類従第二十六輯上)》　と記されている様に、霜月騒動の賞罰に付いての、その沙汰(裁定)を行わないと決定した。霜月騒動の件に付いては、今後賞罰に一切触れないと幕府は決定した。霜月騒動で討滅された側の安達泰盛らに関係のあった御家人たちの罰に触れないとしたのである。つまり、安達泰盛関係の罰を問われることは無くなったのである。季長が『絵詞』を作製したのはこの時期であろう。季長は泰盛や景資を正当に評価しても処罰される恐れが無くなった時期と重なるのである。

竹崎季長が記した「永仁元年２月９日」の月日が存在しない

『蒙古襲来絵詞』の詞十五・十六の年号について、『日本中世古文書の研究』萩野三七彦(1904－1992)著、「蒙古襲来絵詞についての擬と其解釈」(「歴史地理」)昭和7年・『日本古文書学と中世文化史』)に発表された。要点は次のようになる。

《　「永仁元年２月９日」という月日は存在しないのである。それは、正応６年を８月５日に永仁元年と改元するからである。故に、「永仁元年２月９日」は「正応６年２月９日」であらねばならない。》という驚くべき日付を発表したのである。

《「永仁元年２月９日」という日付は実在しないという事は、その年の２月は正応６年２月９日であらねばならない。もし２月９日に「奥書」が書かれたなら永仁元年２月９日と記すはずがない。これは永仁への改元が忘れ去られた遥か後年の南北朝時代の「奥書」は書かれたものである。》という論法が成り立ったのである。

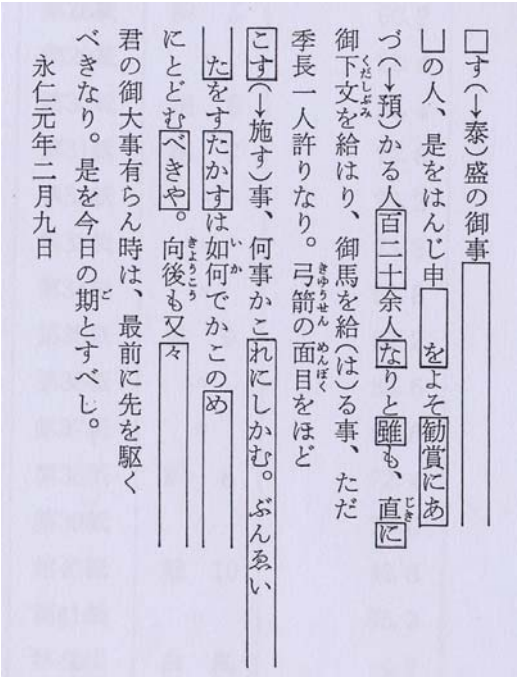
荻野先生の論考に　石井　進氏は『鎌倉びとの声を聞く』著の中で、「竹崎季長絵詞の成立」は『日本歴史』273 号に記載、《正応６年は季長にとって重要な事のあった年である。それは塔福寺文書(宇城市小川町)に於ける「置文」の作成がその意味を示している。こうした時点で絵詞作成が思い立たれたのであろうと、する。その理由は「霜月騒動」により滅亡した安達泰盛、宗盛、武藤(少弐)景資への感謝の念の表明と追憶の為であるとの結論で、即ち、正応６年が絵詞作成の発意の年であったことは事実であろ

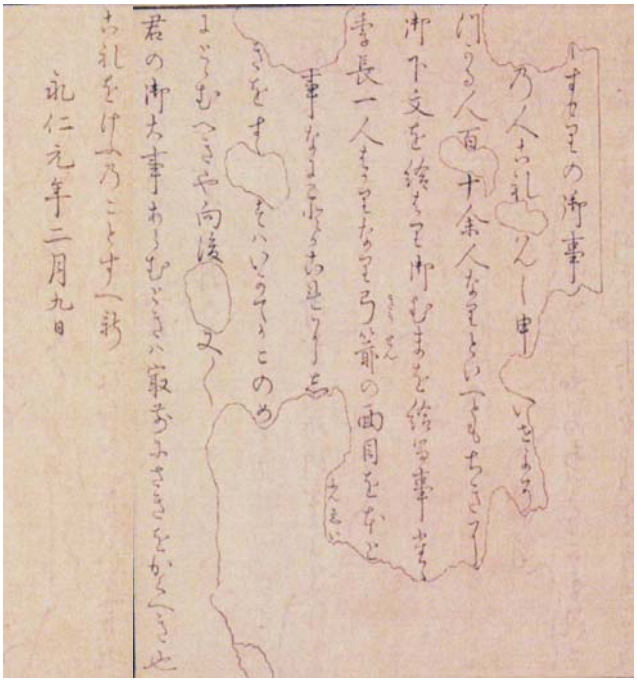
う。そしてある期間を経て完成した時に、蒙古襲来絵詞の発意の年である「永仁元年２月９日」の日付が遡って追記されたのであろう。》と、考察している。

更に、《安達泰盛に対する殊恩の感謝と、甲佐大明神の神徳への報謝の念と、絵詞作成の動機と深く関わるものであり、神徳を讃えることが目的であった。「神のめでたき御事を申さんためにこれをしるしまいらす」このことばは『絵詞』を指すものであろう。そして「永仁元年２月９日」の追書は、安達泰盛・宗盛・武藤(少弐)景資らに対する感謝の念の表明と追懐(追想)が絵詞作成の目的であったのである。》これが石井　進氏の考察である。

季長は文永の合戦当時２９歳、弘安の合戦時は３６歳、『絵詞』の発意の今は４６歳、ようやく老境を振り返り、改めて蒙古襲来合戦を思い出し、甲佐大明神の神徳、安達泰盛の殊恩に心を表す年となっていた。『絵詞』の作成の発意の日が「永仁元年２月９日」であり、完成後に日付を書き入れた年月が改元後であったのであろう。『絵詞』の中で最も重視された人物、幕府御恩奉行の安達泰盛、文永の合戦で目をかけてくれた少弐(武藤)景資、泰盛の子息守護代の盛宗達は、今はいない。しかし、この３人は「霜月騒動」で非業の死に至り、季長は遣る瀬ない想が、その想いが『絵詞』を完成させたのであろう。

奥書の詞十五と十六の「永仁元年二月九日」の文を見る


□す(→泰)盛の御事□□
□の人、是をはんじ申□をよそ勧賞にあづ(→預)かる人百二十余人なりと雖も、直に御下文を給はり、御馬を給(は)る事、ただ季長一人許りなり。弓箭の面目をほどこす(→施す)事、何事かこれにしかむ。ぶんぶい□たをすたかすは如何でかこのめにとどむべきや。向後も又々君の御大事有らん時は、最前に先を駆くべきなり。是を今日の期とすべし。
永仁元年二月九日



詞　十五　　ひらがなに濁点はない　　『丹鶴叢書』「蒙古襲来絵詞・下」国会図書館ライブラリー

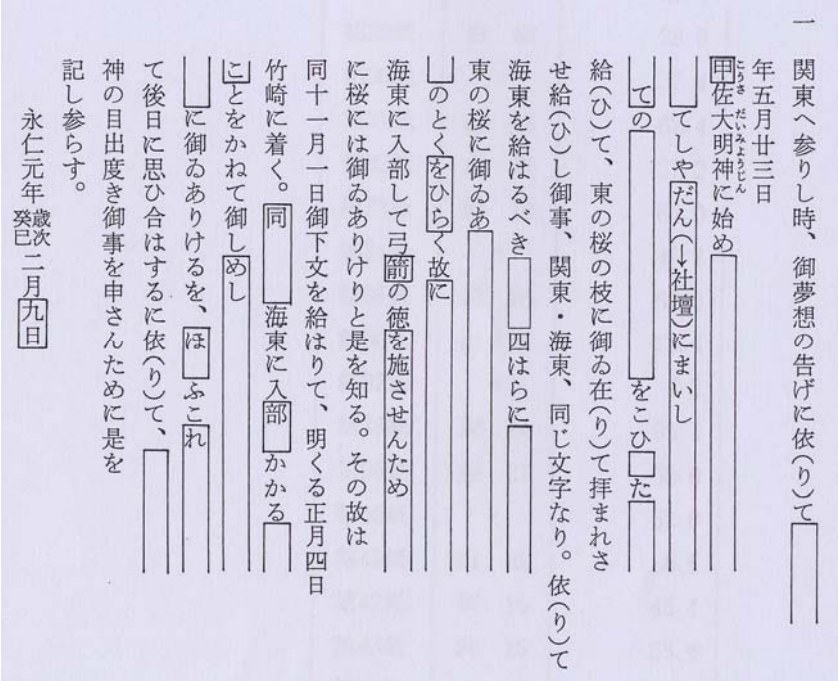
詞訳・「泰盛の御事」□□　□の人、是をはんじ申。□□をよそ勧賞に預かる人百二十余人

ななりと雖も、直に御下文を給はり、御馬を給(は)る事、ただ季長一人許りなり。弓箭の面目をほどこす事、なに事かこれにしかむ。文永□□たをすたかすは、如何でかこのめ□□にとどむべきや。向後も又々□□□　君の御大事あらん時は、最前に先を駆くべきなり。是を今日の期とすべし。　　永仁元年二月九日

詞十五を現代語で要約すると　「蒙古襲来合戦の活躍により、その功績として恩賞を得たものは 120 人であった。しかし、そのうちで恩賞奉行である安達泰盛より直接に御下文と馬を給わった者は季長一人であった。それ故に、弓箭の面目をほどこしたのであるが、これ以上の面目はなかった。それ故に安達泰盛に対して感謝し、大事の時には真っ先に駆け付けて泰盛のためにつくす所存である。これを忘れてはならない永仁元年二月九日」　と記しているのである。

佐藤鉄太郎氏の詞十五についての考察は　その末尾に永仁元年二月九日と年月が記されていることから、『絵詞』のいずれかの巻の巻末に付けられた奥書であろう。詞十五が奥書であるとしても、『絵詞』の数巻ある絵詞の全体の奥書であるのか、或は『絵詞』の数巻ある絵詞のどれかの奥書であるが、いくつかの奥書の在り方が考えられる。

詞十六


一　関東へ参りし時、御夢想の告げに依(り)て□
年五月廿三日
甲佐大明神に始め□
□てしや(だん(→社壇)にまいし
□ての□をこひ□た□
給(ひ)て、東の桜の枝に御ゐ在(り)て拝まれさ
せ給(ひ)し御事、関東・海東、同じ文字なり。依(り)て
海東を給はるべき□四はらに□
東の桜に御ゐあ□
□のとくをひらく故に
海東に入部して弓箭の徳を施させんため
に桜には御ゐありけりと是を知る。その故は
同十一月一日御下文を給はりて、明くる正月四日
竹崎に着く。同□海東に入部□かる□
□とをかねて御しめし
□に御ゐありけるを、ほ□ふこれ
て後日に思ひ合はするに依(り)て、□
神の目出度き御事を申さんために是を
記し参らす。
永仁元年歳次癸巳二月九日

「奥書」十六、※詞は(熊本県教育委員会・報告書１７集)「第三章・蒙古襲来絵詞について」中村一紀著より

詞十五は直接「文永の役」、「弘安の役」に関係する事に付いては全く触れていない。詞十五は季長が安達泰盛に「庭中」の事だけを内容としているのである。この事から詞十五は『絵詞』の内、季長が安達泰盛に「庭中」した事を記している巻末の奥書であるとすることが出来るであろう。

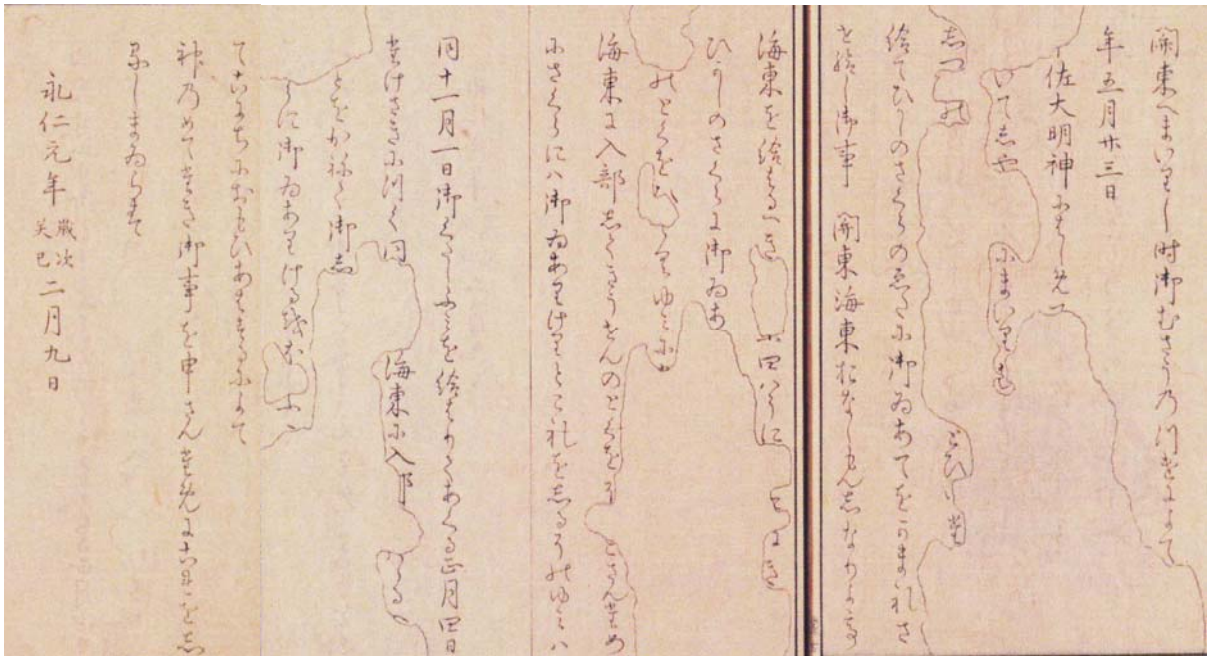
詞十六　《一、関東へ参りし時、御夢想のお告げに依って、建治元年五月廿三日。甲佐大明神に始めて□□□て社壇にまいしての□□□□をこひ□た給ひて、東の桜の枝に御ゐ在りて拝まされせ給いし御事、関東・海東と同じ郷(文字)なり。依りて海東を給はるべき、□□四はらに□□□東の桜の枝に御居ありて、□□□□のとくをひらく故に□□□□、東海に入部して弓箭の徳を施させんために桜には御居ありけりと是を知る。その故は同十一月一日、御下文を給わりて、明くる正月四日、竹崎に着く。同月六日海東に入部かかる、□□ことをかねて御示し□□□に御居ありけるを、ほふこれ□□て、後日に思い合わせるに依りて、□□□神の目出度きを御事を申さんために、是を記し参らす。　　永仁元年歳次癸巳(さいじみずのとみ)二月九日　　》

詞十六・現代語要約で　　《関東へ出訴に来た時、御夢のような申告よって、建治元年(1275)５月２３日、季長が肥後国の故郷竹崎に近い甲佐神社に参詣した際、大明神が東の桜の枝に現われて、後に季長が恩賞として肥後国海東郷の地頭職を賜ることを示された。この事に因って甲佐神社大明神の加護が与えられ、関東海東という名を告げられた。その夢の如くに海東郷を得た。

そして１１月１日に御下文を得て、翌年の正月４日に竹崎に帰還し、その後、海東郷に入部したのである。(早稲田大学所蔵本「竹崎季長絵詞」に正月６日に季長は入部とある)という内容が記され、前者が泰盛に、後者は甲佐神社への祈願であった事が伺える。又、この「奥書」といわれる部分が季長の自筆とされ、故に季長は安達泰盛・甲佐神社に感謝の意を込めて自ら筆をとって書いたものと推測されるのである。この次第を「後日に思い合わせる事によって、神のめでたき御事を申さんために、これをしるしまいらす。

永仁元年歳次癸巳二月九日」　　》　と記している。

佐藤鉄太郎氏の詞十六の考察は、末尾に永仁元年歳次癸巳二月九日と年月日を記しており、巻末の奥書の形をとっている。詞十五と同じ年月日となっている。この形式から詞十六は蒙古襲来絵詞の全体の巻末の奥書か、或は蒙古襲来絵詞のいずれかの巻の巻末の奥書であることは間違いなかろう。との結論に至っている。



「奥書」　詞　十六　『丹鶴叢書』「蒙古襲来絵詞・下」　国立国会図書館ライブラリーより

※詞十五は振り仮名が付けられている詞書。※詞十六は振り仮名が付けられていない詞書。因って、詞十五・十六の成立は別々ある説が考えられている。詞１５・１６は『竹崎城・城跡調査と竹崎季長』（熊本県文化財保護協会）と、『日本絵巻大成 14・蒙古襲来絵詞』（中央公論社）を参考にした。

荻野三七彦著の『蒙古襲来絵詞』に就いての擬いと其の解釈について

この論文は 1932 年『歴史地理』59 巻２号に発表されたもの。現在ではこの論文は『日本古文書学と中世文化史』で読む事が出来る。その要点を見る。（現代文に少し直す）

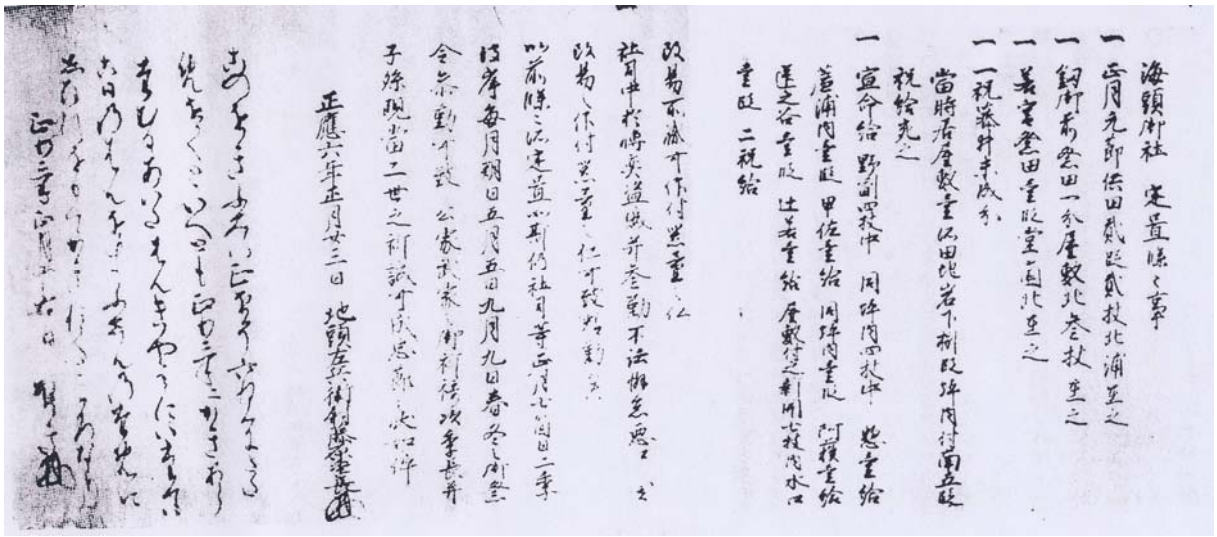
《・・・本絵詞の一処には、「永仁元年二月九日」とあり、又現在最終の処には「永仁元年[歳次　癸巳・きし・干支の一つ]二月□□」と記されている。永仁元年は正応六年であって、正応の年号は実に此の歳八五日に至って初めて永仁と改元されたのであった。故に二月に於いて猶正応六年と記すべきであって、永仁元年とは称し得ない筈であろう。都遠き地方に於いて、改元を知らずに猶従前の年号を使用する例は屢々散見するも、斯くの如く反対に遡るに奇異な事であって、其れは後世より考えてのみ記し得るべき現象と解す可きであろう。後世より記し得る現象としては全くこの年号の条のみを後補と為すべきか、又絵詞全体を永仁元年以降の製作と考えるべきか、二つの場合を考え得るのである。（略）本絵詞に依って竹崎五郎季長は史上に其の勇名をとどめて居るが、彼の姿は本絵詞以外に於いては余り多くを知られて居ない様に考えられる。肥後国下益城郡豊福村竹崎が彼の名字の地であって、建治二年文永役の勲功

によって竹崎の東南なる東海の地頭職を拝領した。東海は東西南北の四郷より成り、下益城郡東砥用村甲佐岳に上宮、中宮を有し、上益城郡宮内村上揚に下宮を持つ肥後国の二宮であり、又阿蘇社の末社である甲佐大明神社の社領であった。下益城郡西海東村に現存する塔福寺こそは甲佐宮の供僧(本尊に仕える僧)の住んだ宮寺であったのである。此の寺に就いては既に森本一端が、その著に『肥後国誌』(昭和９年・肥後の地誌)に記載しているところである。其れに拠ると同寺には季長の文書が二通あり[現、重文]、其の一は「海頭御社定置条之事」なる置文で他は「奉為塔福寺并御社修造料同領家御年貢重奉寄進事」なる寄進状である。此れ等の文書は確実に同寺に現存して居るにもかかわらず、全く吾々は其の片影にすら接する事を得ないものである。季長は正和三年(1314)に入道して法喜と号し齢六十九歳にして猶生存して居た事を知る。》

其の置文(遺言)を見る

このをきふみ(置　文)は正をう六ねん(正応６年)にさためをく(定め置く)といへとも(雖も)正わ(和)３年にかきあらたむる(書き改める)あいたはんきや(判形)うにいたてはこの(後)日のはん(判)をすふ、しん(真)のためにしひつ(自筆)をもてかきおくところなり

正わ三年正月十六日　　ほうき(法喜)　(花押)



竹崎季長の置文　　熊本県塔福寺蔵

塔福寺にある季長の置文・(宇城市小川町東海東)は永仁元年(1293)竹崎季長の菩提寺として建立。竹崎季長寄進状并置文２通・「蒙古襲来絵詞」１巻、　※正和三年正月十七塔福寺并海頭社修造料寄進状　正和３年(1314)　※正応六年正月廿三日海頭社置文

(正和三年正月十六日自筆証文)正応６年(1293)

季長は上記の如く子孫に書き置きを残している。正和（しょうわ）３年より２２年以前の正応６年に記し置いた置文を、正和３年に至り書き改めた次第を記していて、其れは季長が入道して「法喜」と号した事に由来して書き改められたものであろう。季長の生涯に於いて、正応６年が如何なる意義を有するものなのか詳らかにすることはできないが、一般古文書学上より置文を記し置くは個人的な生涯に於いて、何事かに其の動機が内在していたことは想像に難くない。さらに本文書には甲佐宮の社領なる海東郷の地頭として、社の事のみを記して居るから、信仰的に見ても生涯の一転機になっていたのであろう。少なくとも正応６年、即ち永仁元年は季長の生涯に於いて、置文を記し置いた年次であった事は「塔福寺文書」に考察するべき一事実なのである。

『蒙古襲来絵詞』「弘安の役」の絵の配列について　『蒙古襲来絵詞と竹崎季長の研究』佐藤鉄太郎著を参考にして『絵巻』の流れを考察したい。

蒙古襲来絵詞の詞書と絵との順序が錯綜（さくそう）していることはよく知られている。蒙古襲来絵詞の後巻は、絵十一の竹崎季長が負傷した河野通有を河野の館に見舞う場面から始まる。次は、絵十二は竹崎季長が生の松原の石築地の上に座する諸士前を出陣して行く場面の順となって行く。

『八幡愚童訓』に、蒙古合戦で河野通有が負傷したのは「弘安の役」の早い時期としている。そのために『絵詞』の絵描者も、季長が河野通有を見舞う場面を、後巻の冒頭にもって来たのであろう。しかし、蒙古襲来絵詞の前巻は、季長が筥崎から出陣する場面から始まっている。蒙古襲来絵詞は季長が蒙古合戦で、自らの活躍と戦功を挙げたこと、その戦功を幕府や将軍や、幕府の有力者安達泰盛らに認めてもらったことを記し描いたものである。そうならば、絵詞の後巻の冒頭の絵は、季長の出陣の場面が来るべきである。**絵十二**は大変長い場面で、このような画面構成の在り方からして、後巻の冒頭に来る画面であることは間違いない。『絵詞』後巻の冒頭に来る絵とすべきである。後巻の冒頭の絵十一は、季長が河野通有を見舞う場面は、「弘安の役」が終わった志賀島合戦の後か、その時期の合戦の合間に置かれる絵であろう。

絵二十一は季長が生の松原で、肥後国守護代である安達盛宗の引付に付いている場面でうる。絵二十一はその戦功について安達盛宗に引付の場面は、合戦で手を負傷して、その手を保護するために弓懸（ゆがけ）(弓を引くための皮手袋で指を保護する)を付けた季長が

描かれている。**絵十一**はこの位置以外の場面の絵であったものが、現在の様な絵巻が調巻にされた時に、絵描者がどの場面に入れるべきか、悩んだ末、『八幡愚童訓』に河野通有が負傷したのは「弘安の役」の早い時期となっているので、それを優先したのではないだろうかと、思われる。

ところで、季長は何故に河野通有を見舞ったのであろうか。季長と河野通有しは如何なる関係にあったのであろうか。季長は肥後国の御家人、河野通有は伊予国の御家人で、肥後国の御家人竹崎季長と伊予国の御家人の河野通有と本来は交流がなかったであろう。にもかかわらず、季長は河野通有を見舞う義理は何故か。絵や詞からでは推察は困難であるが、「弘安の役」の初戦で、**詞十四**に見られる様に、志賀島の付近の海上戦で、この時、季長・通有は共々蒙古戦いで両者は共に負傷し、そこで両者の繋がりは出来たのではないか。

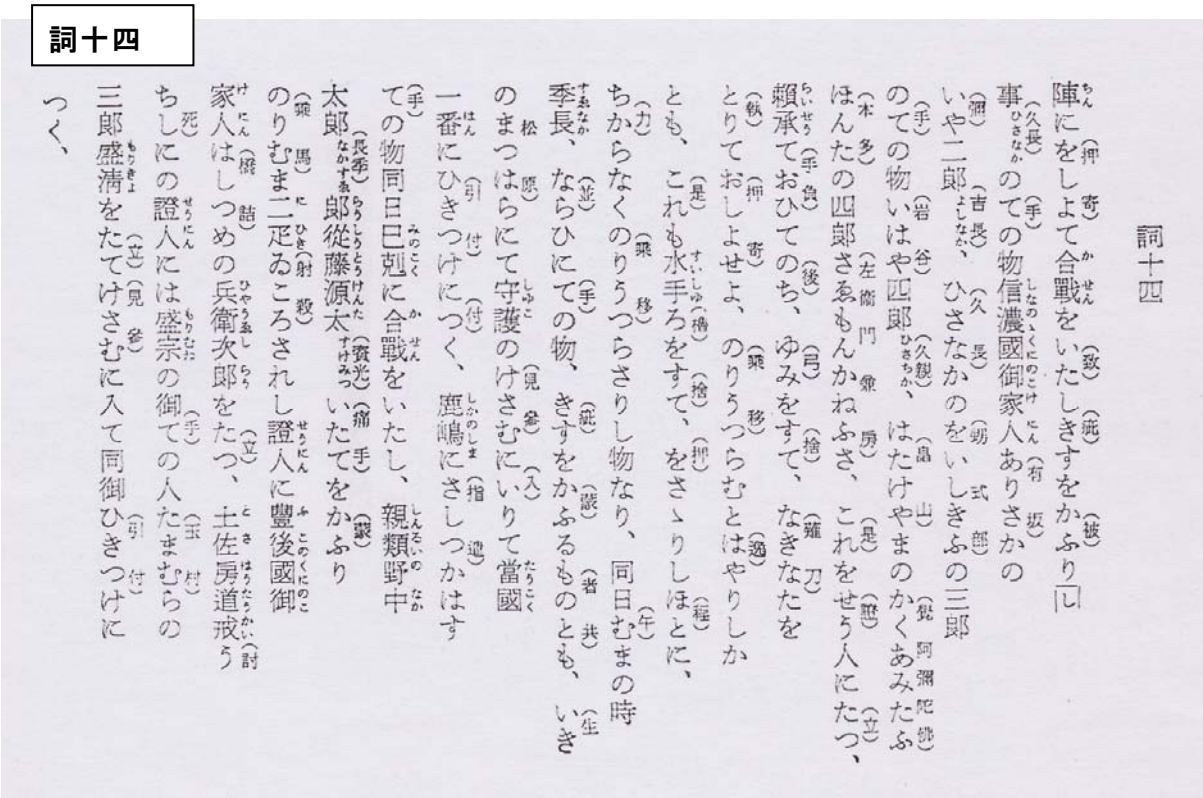
絵十一（Ⅰ）河野通有を見舞う季長　絵二十一（Ⅱ）盛宗と季長　　絵十一（Ⅲ）季長の見舞される通有

拡大した（Ⅰ）（Ⅱ）の絵には弓懸を着けて負傷した皮手袋をしていることがはっきりと分かる。

補足・弘安４年(1281) ５月２１日蒙古軍は対馬に襲来し、２６日には壱岐島へ、６月６日、博多湾・志賀島に襲来、６日から７日には草野次郎経永・河野通有らが海上戦を繰り返し、不幸にも河野通有は負傷した。（第４部Ｐ113－114 回回砲について述べる）

絵十一に、季長の来訪を聞くと、通有は「あがれよ」と鷹揚（おうよう）な態度で迎えている。季長は烏帽子に赤糸縅（おどし）の大鎧を着用、兵庫鎖太刀を佩（は）き、籠手（こて）・脛当・毛沓（けぐつ）・弦巻（つるまき）の出で立ちである。この場面から推察すれば、季長側に通有から世話を受けた事情が窺われ、戦場（いくさば）で、兵船の融通等の便宜（べんぎ）を受け、修羅場で河野通有に命の手助けを受けた事を推察することが出来ないであろうか。

詞十四


詞十四
陣にをしよて合戰をいたしきすをかふりし
事のての物信濃國御家人ありさかの
いや二郎ひさなかのをいしきふの三郎
のての物いはや四郎はたけやまのかくあみたふ
ほんたの四郎さゑもんかねふさ、これをせう人にたつ、
頼承ておひてのち、ゆみをすて、なきなたを
とりておしよせよ、のりうつらむとはやりしか
とも、これも水手ろをすて、をさゝりしほとに、
ちからなくのりうつらさりし物なり、同日むまの時
季長、ならひにての物、きすをかふるものとも、いき
のまつはらにて守護のけさむにいりて當國
一番にひきつけにつく、鹿嶋にさしつかはす
ての物同日巳剋に合戰をいたし、親類野中
太郎從藤源太いたてをかふり
のりむま二疋ゐころされし證人に豊後國御
家人はしつめの兵衛次郎をたつ、土佐房道戒う
ちしにの證人には盛宗の御ての人たまむらの
三郎盛清をたてけさむに入て同御ひきつけに
つく、

『日本絵巻物全集・９』「蒙古襲来絵詞」より

宇都宮武士団と蒙古襲来絵詞に描かれた家紋について　『蒙古襲来絵詞と竹崎季長の研究』佐藤鉄太郎著参考にして要約で述べる。

『蒙古襲来絵詞』の前巻冒頭の**絵一**に、赤坂を占領して博多に迫る蒙古軍に対して、博多を守備に向かって進む竹崎季長の武士団を先頭に、併せて３つの武士団が描かれている。絵一に筥崎宮の前を進む５騎の武士団が描かれている。

竹崎季長の武士団は実数で描かれているのに対して、ここに描かれている武士団は実数ではなく、画面印象的に描かれている。武士団の描かれ方から見れば、かなりの規模の武士数で構成された有力武士団であることが想像される。この武士団は筥崎宮の手前を進撃している５騎の武士団が描かれており、この武士団の朱筆注記に「豊後国守護大友兵庫守頼奏手之軍」と記されている。

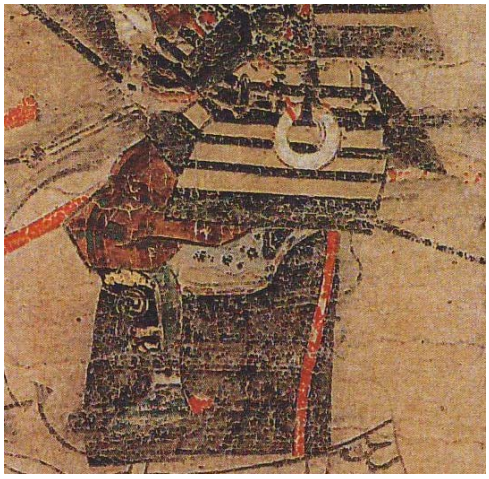
一番右側の武士の頭上に、朱色で「豊後国守護大友兵庫守頼奏手之軍」と注記されており、後世の研究者はこれを疑わず、豊後国守護の大友頼泰の手の軍兵とされていた。右の絵を拡大すると、左足の脛当には「左三つ巴」（P 62 参照）が描かれ、左三つ巴の家紋とする武士か、左三つ巴を家紋とする武士の被官たちである。しかし、豊後国守護大友頼泰の手の軍兵と注記されている。大友氏の家紋は「抱き杏葉（ぎょうよう）」（P 62 参照）

であるから、この武士団は「抱き杏葉」の家紋を付けていなければならない。拡大写真で見る通り、家紋は「抱き杏葉」ではなく、「左三つ巴」であり、この武士団の注記が記してあるように豊後国守護の大友頼泰の手の軍勢ではないことが判る。

左三つ巴の家紋は誰の家紋であるか。実は左三つ巴の家紋は宇都宮氏の家紋である。従ってこの武士達は宇都宮氏の武士団か、或は宇都宮氏の一族のものと思われる。

更にこの武士団の前を進む武士団に、騎馬の武士５騎と徒歩の郎党２人からなる武士団をよく見ると、薙刀（なぎなた）を担いでいる郎党の袴の足を見ると、右三つ巴の文様が描かれている。単なる衣装の紋章か、家紋を描いたものならば、右三つ巴の家紋も宇都宮の家紋である。この兵士たちは宇都宮氏の武士団か、宇都宮氏の被官の武士たちと充分想像はできる。

『蒙古襲来絵詞』は描かれている人々は、竹崎季長と何等かの関係があった武士たちやその一族であり、強く結びつける関係があったために描かれているのである。



絵一・注記に「豊後国守護大友兵庫守頼奏手之軍」とあり、右・兵士の足を拡大「左三つ巴」が見える

絵一を国会図書『絵詞』で見ると、筥崎宮前を通過の豊後国守護大友頼泰の前を行く武士団の兵士の袴を拡大すると右三つ巴の文様が現れる。「左三つ巴」「右三つ巴」家紋は宇都宮氏の家紋なのである。

それでは竹崎季長と宇都宮氏はどの様な関係にあったのであろうか。『蒙古襲来絵詞』の詞十四に「親類野中太郎長季郎 従藤源太資光・・・」、詞十二に「野中殿ばかりは 乗 奉・・・」と敬称を付けて呼ばれている御家人が出て来る。

三巴の家紋わかる『丹鶴叢書』

この御家人野中氏は、豊前国野仲郷を本拠地としていた宇都宮氏の一族である。つまり竹崎季長は野中太郎長季とは親類であり、その本宗(分家を出す本家)の宇都宮氏とは親類と分かる。

宇都宮氏は下野国宇都宮を本拠地とした有力御家人(北条嫡流家の御内人)である。宇都宮尊覚(通房)が豊前国に下向し、後、鎌倉幕府が弘安９年に鎮西談議所(幕府が九州統括の機関・少弐、大友、宇都宮、渋谷の４氏による合議訴訟機関)を設置すると、宇都宮尊覚は少弐経資、大友頼季、渋谷重郷と共に頭人となる。その後、鎮西探題が成立すると尊覚の子頼房や宇都宮一族は引付衆(訴訟裁判の迅速衆)となっている。

更に竹崎季長の地元の肥後国に於いては守護であった安達泰盛が弘安８年、「霜月騒動」で滅され、肥後国に於いて討滅された安達泰盛に代わって北条氏得宗家が守護となると、宇都宮尊覚はその守護代を勤めている。

弘安８年の霜月騒動に連動して、鎮西に於いて北条時定(北条時政の甥)が北条実政(鎮西探題・肥前守護兼任)と共に少弐景資、安達盛宗を討伐した「岩門合戦」が起き、宇都宮尊覚は為宗人々(家門の重要視人々)として加わり、尊覚の子盛房、宇都宮氏の一族である野中左衛門三郎宗通法師も討伐に加わっている。因って宇都宮氏は北条氏と政治的に密接な関係にあって、蒙古襲来以後、鎮西に於いては重要な役割を担っていたことが分かる。竹崎季長は宇都宮氏一族の野中太郎長季とは蒙古襲来絵詞の中で親類であり、従って本宗の宇都宮氏とは親類の間柄であったのである。宇都宮尊覚は季長の蒙古襲来絵詞を製作した永仁元年頃より、肥後国の守護となった北条氏得宗の下で守護代を勤め、肥後国の御家人達と繋がりが深かったようである。

季長と宇都宮氏とは以上な関係であったために、『絵詞』の冒頭に宇都宮氏一族の武士団を描いたのであろう。これに対して、季長と豊後国の守護であった大友頼泰とは特別の関係は見られず、蒙古襲来絵詞の冒頭に「大友頼泰の手の者」と描く必要が見当たらないのである。

季長の蒙古襲来絵詞の絵一に描かせている武士団について、誰を何のために描かせたか、明確に意図していた訳である。故にどの様な武士団を描くかを明確にしていたので、絵一の進行する武士団の家紋を描かしていたのである。季長は蒙古襲来絵詞の重要な場面の冒頭に、自らの武士団出陣の場面を描き、続いて自らの類縁ある宇都宮氏の一族の武士団を描かせたのである。

蒙古襲来絵詞の絵三、絵七、絵十二、絵二十一に描かれた竹崎季長の手の者たちに、家紋の一部である「三つ目結」を、弓懸(弓を引く鹿皮の手袋状で指を保護)、臑当や直垂、袴に描がいているのである。

絵二、絵十五には少弐景資や少弐氏の被官達に少弐氏の家紋、四つ目結が鎧櫃や弓懸等に描かれ、その他、絵十二の生の松原の石築地の上に描かれている菊池三郎有高の両手の弓懸や直垂、袴には菊池氏の家紋である鷹の羽が描かれている。

この様に蒙古襲来絵詞に描かれている家紋や家紋の一部が描かれていれば、その武士団は何処の武士団か明らかにする事が出来る『絵巻』なっていたのである。

抱き杏葉

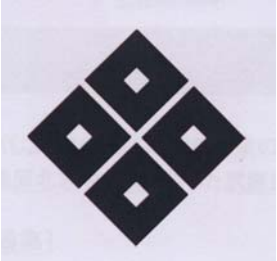
大友氏

鎌倉時代から戦国にかけて豊後国(大分県)を本拠とした一族

左三ツ巴

宇都宮氏

源頼朝をして「関東一の弓取り」と言わしめた宇都宮一族、下野・常陸等



寄懸り目結

少弐氏(武藤氏)

北九州地方、筑前・豊前肥前・壱岐・対馬で活躍

九州の宇都宮氏について

豊前国御家人たちは、鎮西各国に於ける在来の御家人の本来この国に出自をもつ領主の系譜を有する御家人と、鎌倉時代になって新たに所領を豊前国内に得て移住した御家人と分けられる。移住御家人は所謂関東の下り衆で、土着して豊前国に於いて、下野国御家人筆頭の宇都宮氏が挙げられる。宇都宮氏の出自については、「尊卑分脈」によれば、藤原氏道兼流の出となっている。系図によれば、藤原道兼の孫兼房の子に

兼仲・宗円の二子があり、宗円は下野国宇都宮座主になる。その頃より下野国と関係が生じたと考えられ、宗円の子に宗房・朝綱・知家等がおり、朝綱・知家はそれぞれ宇都宮八田(八田宗綱は平安時代後期、宇都宮氏２代当主)を称して東国に移住した。豊前国宇都宮氏の祖となった信房は宗房の子である。

源頼朝の挙兵後、治承５年(1181)２月、八田家、小山朝政等に加担して、下野国の反頼朝派の足立忠綱、志田義広を打ち破り後、鎌倉御家人となったと思われる。以来、信房の至る宇都宮氏は鎌倉幕府の有力御家人として活躍することになる。

宇都宮氏が九州に所領を得て以来、通房・頼房の代に至って、所領が急激に増加しているのは、宇都宮氏が鎮西探題の評定衆、引付衆に任じられるなど、勢力進展の一つのピークを示していると考えられる。この時期は通房が蒙古襲来時に相当し、鎌倉幕府の国衛機構に支配権が強められた時期と重なる。宇都宮氏の豊前所領域は、勢力拡張の方法が国衛(こくが)支配(律令制代に国司〈守(かみ)・介(すけ)・掾(じょう)・目(さかん)〉が地方政治を遂行)と相まって行われているのである。

通房は蒙古合戦勲功賞として上毛郡原井村、阿久封村、及び弘安９年の岩門合戦の恩賞として、筑前国小山田村金田六郎左衛門尉時通跡を知行し(比志島文書)、正応３年(1290)１０月、上毛郡安雲村の替所として、宇佐郡佐田庄地頭職が与えられた。(佐田文書)　この佐田庄地頭職を得た事は、宇都宮氏の支配力の最も強くに及んだ。宇都宮郡内に宇都宮氏の勢力が入る切掛けとなる。同年通房の二男が薩摩太郎左衛門尉盛房は、壱岐国瀬戸浦領所職を岩門合戦勲功賞として配分された(比志島文書)。

(『九州史学』第 24 号・「豊前国における東国御家人宇都宮氏について」恵良宏著・昭和３８年参考)

甲佐神社　　熊本県上益城郡甲佐町　　肥後南方の守護神

第3部・蒙古軍の侵攻は蒙古帝国牒状から始まる

はじめに　日本国は蒙古軍の襲来を２度受けたが、この国難を偶然にも自然現象を味方につけて侵攻をくい止めた。一方、合戦は鎌倉武士団の活躍によってこの危機を乗り切ったのである。近代に入り「神風が吹いて元軍を壊滅した」という「神風論」が、神国日本国民の高揚思想に発展し、明治黎明期の皇国史観と相まって喧伝された経緯となる。蒙古襲来は明治黎明期の日本に「富国強兵」の機運を高め、国民に大きな国家目標を持せた事により、先の太平洋戦争までその影響が続いたのである。その国難の蒙古襲来を、合戦絵巻からその原点を探りたいと思う。

第1回使節団(文永3年・1266)　クビライが極東の海向こうの日本に興味を持ったのは、高麗慶尚道出身の「趙彝」という元王朝官吏の人物が、朝鮮海峡の向こうの日本国の情報を伝え、いろいろな入れ知恵をしたことが、クビライに関心を高めたらしい。又、マルコ・ホーロの『東方見聞録』等の黄金の国日本に、金が溢れている情報が伝えている様に、当時の日本国から宋国への輸出品は、金・真珠・材木・米・硫黄が輸出され、宋国からは銅銭・香・綿・紙・陶磁器・書籍等が輸入されていた。特に金の交換比率は日本国内では、金 1 対し銀５であるが、中国交換比率では、金１対し銀は１３と有利になっていたのである。

クビライの大陸側から見れば、金の産出国日本は魅力的な国に見えた事であろう。『蒙古襲来』服部英雄著に、元国は、宋国に輸出している日本の火薬原料(九州温泉地帯から出る硫黄)の獲得と、日本の服属を狙っていたと述べている。この時期はまだ宋国と日本の関係が強く、日蒙交易が進展しない事情が続いていた。元国は高麗国を巻き込んで日本国侵攻の野望が強くあったのである。

1206 年にチンギス・ハンによって統一されたモンゴルは、瞬く間に東西に服属させ、世界的な大帝国を建国した。その鉾先は東アジアに及び、朝鮮半島を支配していた高麗国を、1231 年～1258 年の間に、6 回のモンゴル帝国の侵攻が続いた。第６次の侵攻(1254)では、高麗人の捕虜、「捕虜となる者 20 万 6800 人、殺戮された者無数、経るところの州都はみな灰燼となる」(『高麗史』巻 24・高宗 41 年条)と、半島を蹂躙したのである。高麗政府は首都を半島の開京(現開城市)から江華島に移し長く抵抗したが、1259 年、終に降伏してモンゴルに服属することになる。

元帝国は海軍を持っていなかったので、海上路を古より日本国と交易路があった高麗国の海運力を使うべしと趙彝に「高麗の造船技術で軍船を作れば、日本征服は簡単だ」と侵略論を聞かされ、クビライは日本国侵攻を深く考えるようになったと思える。

1266 年(文永 3 年)、クビライは日本国宛て国書「大蒙古国皇帝奉書」を作成させ、正使、兵部侍郎の黒的・副使、礼部侍郎殷弘ら使節団を日本へ派遣した。同年１１月、蒙古使節は高麗に到着し、高麗国王元宗に日本への仲介を命じ、枢密院副使、宋君斐と侍御史、金賛らが案内役に任ぜられた。しかし、高麗は日本侵攻の軍事費負担の要求に恐れていたのである。

『東国通鑑』(朝鮮３国時代から高麗までの通史)に、《巨済縣ニ至リ、遥カニ対馬島ヲ望ミ、大洋萬里風濤天ヲ蹴ルヲ見、意エラク、危険此ノゴトシ、安ンゾ(どうして)上国ノ使臣ヲ奉ジテ険ヲ冒シ軽シク進ムベケンヤ。対馬島ニ至ルト雖モ、彼ノ俗頑獷(野蛮)、礼儀無ク、設ケテ付軌(法を守らない)ノコトアラシモ、コレヲイカントナサム。是ヲ以テトモニ還ル・・・》と伝えている。

高麗使の言は「日本へ行くには、朝鮮海峡は波が荒く、住民は野蛮で礼儀知らず、なにが起こるか分からない国と」と諭している。翌年、高麗使は蒙古使節団を朝鮮半島南端の巨済島まで案内して、対馬島を遠望し、海の荒れ方を見せて、航海が実に危険である事を示した。その上、対馬の日本人は礼儀知らずで、荒くれ者が多い。とても日本への進出には利とならず、通商は無理であると教え諭した。黒的らはこれを受けて高麗の官吏と共に本国へ帰朝した。高麗同行使節は、海を知らないモンゴル人なら、航海を恐れて野心を萎えさせると考えたのであろう。

クビライは蒙・高両使節に「先に使いをやって日本を招き入れる案内を、お前に任せたのに、言辞を以て遊んで引き返すとは、日本と通交すればお前の虚実が全て判る」と、クビライの命令に反して使節団を日本へ送らなかった高麗使に憤慨したのである。怒ったクビライは、高麗国に自ら責任を以て日本へ使節を派遣するように強く命じた。日本国から要領を得た返書を受けてくるように高麗国元宗に約束させた。命令に逆らえない元宗は、命令に従い潘阜らを派遣した。

第2回使節団(文永5年)「蒙古国牒状」を潘阜が齎した

この時期、鎮西奉行は鎌倉幕府(九州御家人を信用していなかった)が九州を治めるため

に置いた役職で、少弐資頼(武藤氏)以来、少弐氏を継承している。少弐氏は本来、武蔵国の武士であったが、資頼が九州に下向以来、大宰府に住み、筑前を始めとする九州各国の守護を兼任して鎌倉幕府の九州支配の要を担っていた。少弐氏は対馬守護と対馬島地頭を兼任していたので、高麗国との交易に強い関心を抱いており、少弐氏は公ではないが対馬島を交易の受け皿にしょうと考えていたであろう。

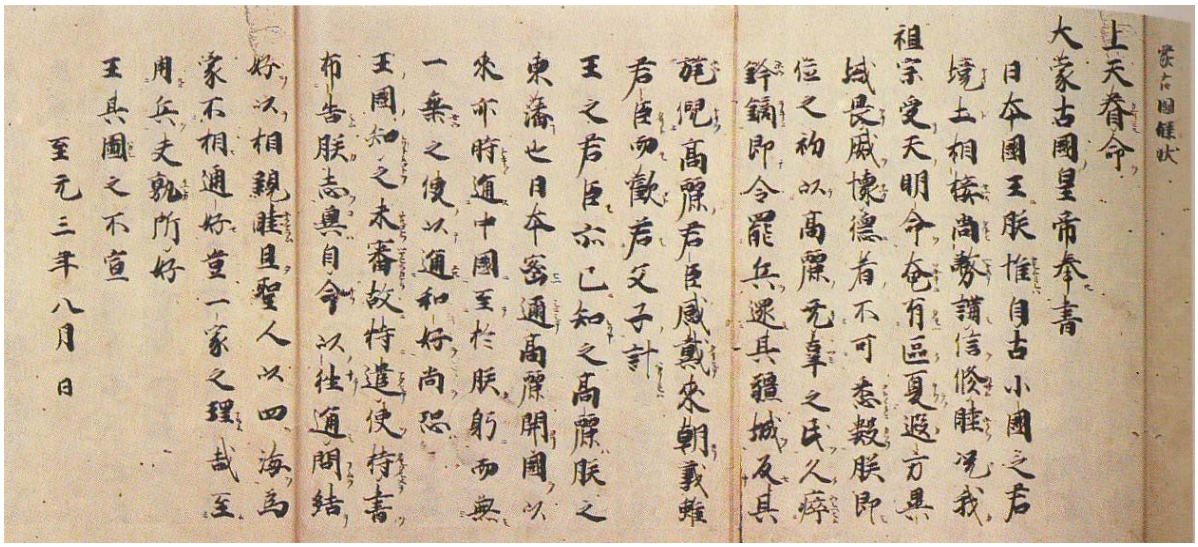
1267 年 6 月、世祖クビライは再び黒的らを日本に遣わし、高麗に案内を命じ、高麗は起居舎人(皇帝の言葉を記録)潘阜に命じて、クビライの国書と高麗国書を持たせ同年 9 月２３日、日本へ派遣した。

『外記日記』(朝廷組織の最高機関外記の公日記)　　文永４年(1267)１１月２５日条に、「高麗の牒状が到着した。蒙古が高麗を打ち取り、また日本を攻める」と記されている。１１月２５日というのは、９月末に対馬に元軍が到着して、それを対馬守護代が大宰府経由で六波羅探題や鎌倉幕府に報告したのであろう。その使いが京都に到着したのは１１月２５日頃となっていた。高麗使一行は文永５年正月、九州大宰府(現福岡市)に到着し、大宰府で一行と対面したのは、鎮西奉行少弐資能である。資能は高麗使節を大宰府に留め、国書を飛脚で鎌倉に送った。鎌倉幕府はこれを京都の朝廷に伝えた。この時代は朝廷が国外との外交交渉の権限を持っていた。

正月７日、幕府の使者は、関東申次西園寺実氏に、「蒙古国牒状」と「高麗国牒状」を伝達した。しかし、左大臣近衛基平はこの年の閏正月１０日に、「異国の賊徒が我が朝(日本)に来るという風聞がある。実否(真実か否か)は未だよくわからない」とその日記に記している。すでに幕府の使者が上京する以前にこうした風聞が京都の巷には情報が達していたのである。

クビライの国書は残っていないが、その写しが奈良の東大寺に伝わっている。元の正史『元史』巻２０８・「日本伝」と高麗の正史『高麗史』巻２６にもその写しが収められている。写しは東大寺の僧侶宗性(別当)が記した「調伏異朝怨敵抄」という書物に記されている。文永５年２月、宗性が京都の亀山殿の道場で後鳥羽院八講(院の為に急がせる)という儀式を行った時、この「蒙古国牒状」、「高麗国牒状」の写しを取っていたのである。このように旧仏教系の寺院関係者が国書の写しを取っている事は、これ等の寺院で、異国降伏の祈祷が熱心に行われていたことが知れる。朝廷や寺社関係の官吏たちは、モンゴルや高麗国の情報に強い関心を持っていたからであろう。

(『モンゴル襲来の衝撃』、「日元交渉の開始」佐伯弘次著を参考にした)


蒙古國牒狀
上天眷命
大蒙古國皇帝奉書
日本國王朕惟自古小國之君
境土相接尚務講信修睦況我
祖宗受天明命奄有區夏遐方異
域畏威懷德者不可悉數朕即
位之初以高麗元辜之民久瘁
鋒鏑即令罷兵還其疆城及其
旄倪高麗君臣感戴來朝義雖
君臣而歡若父子計
王之君臣亦已知之高麗朕之
東藩也日本密邇高麗開國以
來亦時通中國至於朕躬而無
一乘之使以通和好尚恐
王國知之未審故特遣使持書
布告朕志冀自今以往通問結
好以相親睦且聖人以四海為
家不相通好豈一家之理哉至
用兵夫孰所好
王其圖之不宣
至元三年八月　日

「蒙古国牒状」潘阜が齎した世祖クビライの国書・東大寺の僧が「調伏異朝怨敵抄」に記載した。

【『元史』（日本伝は巻 208・「外夷伝」に納められている）「至元３年８月兵部（兵事司る）侍郎（次官）黒的に命じ、虎符（信任状）給して国信使に充て、礼部（礼儀等司る）侍郎殷弘に国信副使に充て国書を日本に遣わす」とある。（※『元史』中国正史日本伝（２）・元史日本伝・石原道博訳を使用した。）】

《上天眷命せる大蒙古国皇帝、書を日本国王に奉る。朕（クビライ）惟うに、古より小国の君、境土相接すれば、尚講信・修睦に努む。況や我が祖宗、天の明命を受け、区夏を奄有す。遐方の異域威を畏れ徳に懐く者、悉く数うべからず。朕即位の初め、高麗無辜の民、久しく鋒鏑に瘁るるを以て、即ち兵を罷め、其の疆城を還し、其の旄倪を反さしむ。高麗の君臣、感戴して来朝す。義は君臣といえども、而して歓ぶこと父子のごとし。計るに王の君臣も亦已に之を知らん。高麗は朕の東藩なり。日本は高麗に密邇し、開国以来、亦時に中国に通ず。朕の躬に至りては、一乗の使の以て和好を通ずるなし。尚、王の国これを知ること未だ審かならざるを恐る。故に特に使を遣し、書を持して、朕の志を布告せしむ。冀くは自今以往、間ほ通じ好を結び、以て相親睦せん。且つ聖人は四海を以て家と為す。相通好せざるは、あに一家の理ならんや。兵を用うるに至りては、夫れ孰れか好む所ならん。王其れ之を図れ。不宣

至元三年八月　日　　》

牒状を現代語訳で　《天がいつくしみ思う大モンゴル国皇帝が、文書を日本国王に差し上げる。私は思うに、昔から小国の王は、境界が接していれば関係を作り、和睦

を図ることに努める。いわんや私の先祖は、天の尊い命令を受け、天下を制圧した。遠方の外国も(モンゴル)威を畏れ、徳を慕う者は、すべて数えることができないほど沢山いる。私が即位した当初、高麗の罪なき民が戦火で疲弊していたので、戦争を止め、その領土を返し、その家族を返した。高麗の国王や家臣は、有り難く押し戴いてモンゴルに来朝した。建前は君臣の関係であるけれども、親しいことは親子のようである。恐らく日本国王やその家臣もこの事を既に知っているだろう。高麗は私の東方の従属国である。日本は高麗に間近く接しており、開国以来、時々中国に通交している。

私の代になってから、日本から手軽な使いでさえ好(よしみ)を通じた事がない。私は王の国がこうした事情をあまりよく知ってはいないことを恐れている。そのため特に使者を日本に派遣し、国書を持たせて、私の意志をあまねく知らせる。

願はくば、今後、互いに挨拶をして、好を結び、お互いに親睦したい。聖人は四海(天下)を自分の家とする。お互い好(よしみ)を通じなければ、全く一家の道理にあわない。兵を用いる(戦争)事はどうして誰が好むところであろうか。日本国王よ、これを考えなさい。不宣(ふせん)(書簡の末の慣用句・書きたい事を十分に尽くしていない意を表す語)。

至元三年(1265年)八月　日　》

終の部分　「お互いに相通好せずして、どうして一家の理(ことわり)になろうか。兵を用うるに至る、焉(いずく)んぞ(どうして)好むところならん。不宣」、この文面をどう捉えるか、一家のように親しく通好しょう、と言いながら、「言う事をきかなければ武力もあるぞ」という意味にも取れる。この国書はモンゴル皇帝と日本国王の上下関係を前提にして書かれている。クビライは自らを漢の皇帝になぞられており、内容的にはそれ程高圧的文書ではない。「高麗国はモンゴル国に服属して国王や国民がありがたがっているのだから、日本も中国と通じているのだから親睦したい」。という書簡の主眼としている。

幕府と朝廷間で蒙古国書の審議をする　文永５年２月８日、上皇は院評定を開き、この問題を審議した。東大寺の僧侶宗性(そうしょう)が蒙古国書を写した時、「天下無双の勝事(しょうじ)」と記した。勝事とは、天下無双の一大事と人々は考えていた。蒙古国書は日本が経験をしたことがない国書の扱いに、朝廷・貴族社会たちは苦慮したのである。

連日のように後嵯峨院の院評定(いんひょうじょう)(上皇、法皇が主宰した議定)が行われて、議題は国書の返書をどうするか。近衛基平(このえもとひら)(左大臣・関白)は「返牒を出すべきではない」と主張し

た。朝廷は、京都や北九州等の社寺に異国降伏・退散の祈祷を盛んに行った。伊勢神宮等への勅使派遣し、２２社に奉幣使(天皇の命による幣帛を奉献)派遣、翌月には七陵(天皇の陵墓)に山陵使を派遣、７月・８月には延暦寺で異国降伏の祈祷が行われた。

一方、幕府は重要な決定が幕府内部でなされ、３月５日、第７代執権北条正村(６４歳)が連署(２名以上署名)し、連署の北条時宗が第８代執権に就任した。新執権の北条時宗は時に１８歳(第５代執権北条時頼の嫡子)であった。この時期に於いて蒙古国書到来に当たり、時宗は蒙古問題に全力をそそぎ過ぎたのか、「弘安の役」の３年後に、時宗は執権在職のまま死去の運命をたどるのである。

朝廷は院評定の返牒を送らぬことを決定したと幕府に伝えた。この結論に至ったのは、幕府の意向に影響を受けたからだとされる。この朝廷の決定を受け、鎌倉幕府は大宰府の少弐資能に命令し、高麗国使団に返牒を与えないで帰国させた。

潘阜は文永５年７月１８日高麗に帰国し、国王元宗は潘阜らを蒙古に遣わし、対日交渉の不調を報告させた。潘阜は元宗へ「日本の境(大宰府)に到着しましたが、王都(京都)に入ることができませんでした。日本の大宰府に留め置かれ、５カ月間待遇は悪いものでした」と述べている。幕府に於いては、蒙古帝国は凶心(わざわいが起こる)をもって窺い、この牒状として捉えたのである。幕府は蒙古襲来に武士兵団に用心するように御家人等に通達した。鎌倉には南宋から大休正念(臨済宗の僧・1269 年幕府が招聘・建長寺住職)という禅僧が渡来しており、時宗はこれ等の僧侶から大陸に於ける蒙古帝国の情報を収集していたのである。

第3回、4回使節団(文永6年)　クビライは日本国侵略計画を更に進め、潘阜の報告を受けたクビライは、同年９月、黒的・殷弘を高麗へ派遣した。１２月、高麗は申思佺・陳子厚・潘阜らを日本へ派遣した。使節は翌６年２月に対馬豊岐(豊崎)浦へ上陸し、官人・兵士ら６７人は対馬島の住人塔二郎・弥二郎の２人を捕え、３月に高麗に連れ帰った。

【『元史』「日本伝」は「黒的・殷弘に命じて国書を持たせて対馬島に行かせた。日本人がそれを拒み、承知しなかった」】と記している。

この情報は、大宰府の少弐氏からすぐに京都六波羅探題に伝えられ、３月７日に大宰府の使いが京都に連絡、「蒙古国使い８人・高麗国使４人・従者７０余りが対馬に到着したと報告し、六波羅から鎌倉幕府へ、幕府から朝廷に伝えられた。

蒙古使節に連れ去られた対馬島民２人は、高麗から蒙古に送られ、高麗使節と共に皇帝クビライに謁見した。クビライは日本人２人に豪華な品物を与え、上都(夏の都)の宮殿内を見学させた。壮麗な宮殿を観覧した２人は、「極楽という所を聞いていたが、ここがその極楽にちがいない」と感心したという。これを聞いたクビライは大いに喜び、２人を首都燕京(北京)や万寿山(頤和園と仏香閣)の玉殿等を観覧させたという。(【『高麗史』巻２６・元宗世家２・１０年７月２１日の条】)クビライはこの時点で日本国への軍事侵略は決めていた。

文永６年９月、クビライは対馬島民２人の返還に、中書省(魏代～明代初期の中央官庁)の牒(文書)と高麗国書を携えて到来した。クビライは、皇帝の国書を提出しても、日本側からの返書が得にくいと判断して考慮に入れた国書となるが、中書省牒は明確に服属を要求する内容と想定している。

９月中頃に少弐氏の報告は鎌倉へ到達し、１０月に院評定が行われ、返牒すべきか否かが評議された。この２通の牒は現存しないため内容は分からないが、至元３年８月の国書と同様と思われる。院評定の結果、朝廷では返牒を出すことに決定し、蒙古・高麗宛ての牒状を作成したのであるが、幕府の「返牒を遣わすべからず」という強硬方針を受けて返牒を拒絶し、朝廷の外交権は幕府によって操作されていた。

第5回使節団　文永８年(1271)、蒙古帝国から服従を命じる国書を携えて、５度目の使節団が１００人余で来朝した。博多湾の今津に上陸した趙良弼(女真人)は、日本側が大宰府以東への訪問を拒否したため、趙良弼はやむなく国書の写しを手渡し、１１月末に回答期限を過ぎた場合は、軍事行動も辞さないと威嚇した。これに対し朝廷は前回の文書博士の菅原長成が作成した返書「太政官牒案」(朝廷が評定を行い長成が作成)を、手直し返書を渡す事を決めたが、その後も評定は続いた。この年１１月、クビライは国号を「大元」(1271～1368 年)と定めた。

返書「太政官牒案」　《事情を案ずるに、蒙古の号は今迄聞いたことがない。(中略)そもそも貴国はかって我が国と人物の往来は無かった。本朝(日本)は貴国に対して、何ら好悪の情は無い。ところが由緒を顧みずに、我が国に凶器を用いようとしている。(中略)聖人や仏教の教えでは救済を常とし、殺生を悪業とする。(貴国は)どうして帝徳仁義の境地と(国書で)称していながら、かえって民衆を殺傷する源を開こうというのか。およそ天照皇太神(天照大神)の天統を耀かしてより、今日の日本天皇帝(亀山天皇)の

日嗣(日の神の詔命で大業を次々にしるしめす意)を受けるに至るまで、・・・(中略)故に天皇の国土を昔から神国と号するのである。(略) 》この返書は却下された。

第6回使節団　翌年４月(12月とも)、趙良弼らは6度目の使節として再び来朝した。しかし、趙良弼らは大宰府より日本の京都(国都)に入ることができなかったので、遂に元国に帰還した。6 月に帰還した趙良弼は、日本の国家体制の成立ちや官吏等の呼名、国土地理の名称、風俗産物等をクビライに次のように報告している。

「臣(自身の事)は日本に居る事一年余りでした。その人々の風俗を観察するに、日本人は狼勇にして殺生を好み、父子の親しみや上下の礼がありません。その地は山や水が多く、農耕の利がありません。その人をえても役に立たず、その地を得ても富を増やすことはありません。いわんや水軍が海を渡っても、海風は絶えず吹き、損害は計り知れません。これはいわば有用の民力を以ては計り知れない巨大な損失に浪費するようなものです。臣が思うに、日本を討つべきではありません。」と進言している。

【『元史』「趙良弼伝」では「帝これに従う」趙良弼の言及に従ったと記しているが、クビライは趙良弼の言に耳を傾けた形跡はないようである。】

(『蒙古襲来』服部英雄著・『モンゴル襲来の衝撃』佐伯弘次著参考)

クビライ・カアン

クビライ・カアン(カン)=「大元イエケ・モンゴルウルス」=大元大モンゴル国を略して「大元ウルス(国家)」。この時代に書かれたパスパ文字のモンゴル語での表記や、ペルシア語文献等の言語資料表記は、クビライ・カアンと表記される。

フビライ・ハーン=現代モンゴル語 「ｘｙбилай ｘａａｎ」(khubilai khaan)と書き、近現代のモンゴル文字文献表記や発音はフビライ・ハーンと表記とある。漢字表記は「忽列烈」。

クビライ・カアン／フビライ・ハーン／世祖・(1271 年・大元ウルス皇帝)

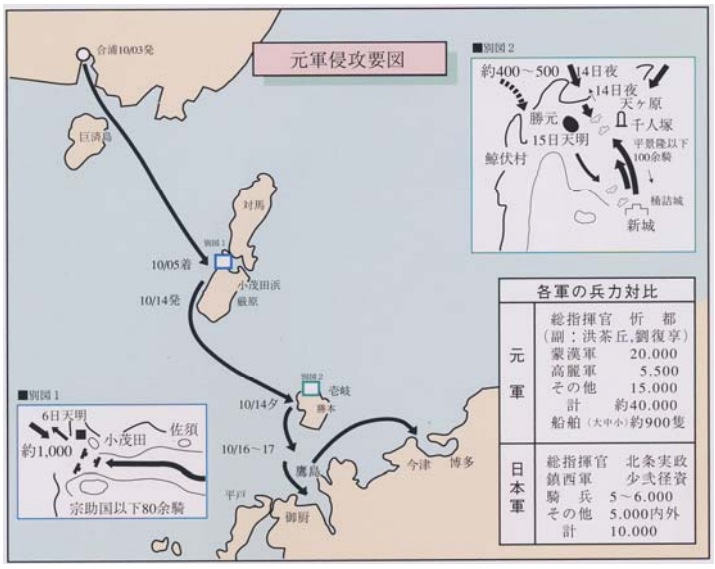
★モンゴルの帝室は、チンギス・カンの４人の嫡子。ジョチ、チャガタイ、オゴデイ、トルイの子孫系。チンギスの庶子コルゲンの子孫系。３人の同腹の弟カサル、カチウン、オッチギンの子孫系。異腹の弟ベルグテイの子孫系等の権力闘争が続いていたのである。

日本侵略計画の開始　　クビライは文永１０年(1273)１２月、日本侵攻の準備を開始し、翌年正月、元は洪茶丘を高麗に遣わし、戦艦３００艘の建造を監督させた。同年６月、高麗は「５月末までに船の建造を終え、軍船大小あわせて９００艘を建造、金州に向かわせている」と元に報告した。高麗が建造した船は、千料船(大船)・抜都魯軽疾舟(小型の高速船・蒙語勇者)・汲水小舟(武器等輸送小型船)各３００艘ずつ、計９００艘の建造であった(戦艦の絵図Ｐ111)。この時期に元は南宋との５年に及ぶ戦いの末、勝利を治めており、また朝鮮半島で起きた三別抄の乱(高麗王朝軍事組織、左夜別抄・右夜別抄・神義軍の三軍)も終息し、軍事行動を日本に専念することが可能となった。

【『元史』至元１０年(文永１１年)６月、趙良弼は、また日本に使し、大宰府に至って還った。】(※『元史』日本伝巻 208「外夷伝」・石原道博訳より)

幕府は東国御家人を鎮西に下向させ異国警固体制を固める　　文永８年、鎌倉幕府は鎮西に所領を持つ東国御家人を、鎮西に下向するよう命じ、守護の指揮の基に蒙古襲来に備えさせた。蒙古が襲来すれば戦場となる鎮西に、東国御家人を異国警固に鎮西へと下向を命じた。文永９年、幕府は異国警固番役を設置、鎮西奉行の少弐資能、大友頼泰の２名を襲来の予想される筑前・肥前・博多湾岸の警固する番役を総指揮官に命じた。文永１０年、幕命を受けた少弐資能は豊前、筑前、肥前、壱岐、対馬の領主人名等を列挙した証文を大宰府に上げ、これ等の地域動員令を発した。

「文永の役」 蒙古軍対馬に上陸　　文永 11 年10月5日



文永の役「元軍の侵攻海路図」元寇史料館資料より

対馬小茂田浜に上陸する

文永１１年(1274)１０月、元国は日本への軍事行動が整い、屯田軍・女真軍(金領内の兵)・水軍からなる元軍２万人、高麗軍６千人、計２万６千人(史料により異なる)、同１０月３日、元軍は高麗の合浦を出発した。　※書籍による蒙古襲来の兵員数がまちまちで３万３千～１万５千で、３万位が大半となり、肝心の【『元史』は１万５千】と明記しているから、これが実数となるようである。

【『元史』至元１１年３月、鳳州経略使忻都・高麗軍民総官洪茶丘に命じ、千料舟・抜都魯・軽疾舟・汲水小舟おのおの３百、９百艘をもって、士卒１万５千を載せ、７月を期して日本を征討させた。冬１０月、官軍は整わず、また矢が尽き、ただ四境を虜掠して帰った。】「文永の役」を指す。※『元史』石原道博訳より。

対馬島上陸の状況　『壱岐の風土と歴史』の壱岐郷土史によれば、元軍の兵力は蒙古人・女真人・中国人約２万、高麗軍８千、梢工(かじとり)・水手(かこ)など６千７百人。大船300 艘、快速船 300 艘、小舟 300 艘合計 900 艘。元帥（総大将）は忻都、副は洪茶丘と劉復亨、高麗軍は金方慶らが指揮していた。遠征軍は対馬・壱岐に侵略するが、両島は全滅のため記録は残っていない。文永 11 年１０月５日の午後４時頃、対馬の佐須浦(小茂田海岸)に元軍は姿を現した。

対馬市小茂田浜海岸

同小茂田浜神社

鎌倉時代末の書、『八幡愚童訓』にわずかに書き伝えられている。「対馬ノ西面差浦ニ、異国ノ船４百 50 艘、３万人乗連テ寄来ル」、急報を受けた守護少貳氏の代官である宗助国は、８０余騎を引き連れ夜を通して小茂田へやって来た。翌朝、通訳の真継を使者に仔細を尋ねたところ、船から矢を射られた。「７、８艘ヨリ下立勢一千人計也」の蒙古兵士が上陸した。８０騎の宗一族は衆寡敵せず、防戦するが矢尽きて自決する。宗の郎党、兵衛次郎・対馬小太郎が壱岐経由で博多に到り惨状を報告した。９日間、

対馬を荒らし回った後、１０月 14 日に壱岐島の北西海岸へ迫る。守護代、平景隆以下１００余騎が果敢に戦い、最後に退いて籠城し「城ノ内へ引退テ防戦、１５日ニ終城中ニテ自害シヌ」全員死とある。平景隆の下人、宗二郎博多へ状況を伝えている。

『対馬郷土史』･『宗氏家譜』に、「小茂田浜の役に剣を揮い力戦、賊を斬ること甚だ多く、刀剣忽ち折る。石を以って撃殺すこと９人、而して後死す。対州の土民、助国の義勇に感じ、祠を小茂田浜に建て、祀りて師大明神と号す。」とある。

「敵の矢は二町（２２０m）ほどの射程の距離に対し、日本側の矢は一町（109m）しか飛ばなかったと伝わる。」と。味方の苦戦は明白で、日蓮の「一谷入道御書」に対馬・壱岐の様子が記され､「去る文永 11 月 10 日に､蒙古国から九州へ攻め寄せてきたとき、宗助国が逃げたので蒙古軍は百姓等を、男をば殺したり生け捕りしたりし、女をば取り集めて手をとうして（掌に穴をあけて綱を通す）船に結びつけた。壱岐に攻め寄せたときも同じであった。」と記す。

宗助国公の「お首塚」厳原町下原

元寇七百年平和之碑・小茂田神社境内

日蓮は対馬の惨状次の様に伝聞をつたえている

《去、文永十一年(太歳甲戌)十月二、蒙古国ヨリ筑紫ニ寄セテ有シニ、対馬ノ者、カタメテ有シ総馬尉等逃ケレハ、百姓等ハ男ヲハ或ハ殺シ、或は生取ニシ、女ヲハ或ハ取集テ、手ヲトヲシテ船ニ結付或ハ生取ニス、一人モ助カル者ナシ、壱岐ニヨセテモ又カクノ如シ・・・》（『日蓮書状』・高祖遺文録） この文書は「文永の役」の２年後に書かれたもので、元軍は、宗助国軍勢を打ち破り、島内民衆を殺戮し、あるいは捕虜とした。捕虜の女姓の「手ヲトヲシテ」、即ち手の平にハリガネを通して船壁に並び立てたと記している。

※小茂田浜神社に説明看板が3カ所あるので紹介　「厳原町・厳原町観光協会より」

文永の役(その1)　《文永１１年１０月(1274年)、元は高麗の軍をまじえた三萬余の軍隊と九百の軍船で日本にせめよせてきた。元軍・高麗軍が１万であった。まず、対馬と壱岐をおそい、肥前国(佐賀県・長崎県の一部)の島々をあらして十月十九日に博多湾にせめこみ、二十日には上陸を始めた。幕府の軍はおもに九州の武士たちであった。かれらは、大いに戦い元の兵たちは、長いやり、毒矢、「てつはう」といって火とけむりのふきだす、今の焼夷弾のような武器で日本軍を驚かした。また、元の軍はドラ太鼓を鳴らして集団で、どっと進んだり、引いたりするが、日本軍はよろいかぶとに身をかためた一騎うちの方法しか知らないので、しだいにせめたてられ、一日で大宰府までしりぞいてしまった。ところがこの二十日の夜に嵐が起こり、元の船はほとんどしずみ、一万三千人の兵が死んだ。残りの兵は、高麗へ引きあげた。これが文永の役である。元軍２万・高麗軍１万・元船９百　総計３万。　日本軍総指揮官　北条時宗　鎮西軍少弐経資　五千～六千人　その他五千　総計１万人。》と、ある。

宗助国の玉砕

「対馬守護代宗助国の奮戦」

矢田一嘯(いっしゅう)作・油彩・明治29年・靖国神社　遊就館

よみがえる明治絵画・矢田一嘯「蒙古襲来絵図」より

元寇奮戦図(その2)　《文永十一年甲戌、蒙漢の将、本国を侵す故、筑紫の海辺に防塁の備え有り、助国(資国)兵を率いて対州(対馬)に来り、厳重に防備を加える。自ら親兵八十騎を領し、州府に居り賊船の来るのを待つ。同年十月、蒙漢元帥忽敦(コツトン)、洪茶丘(こうちゃきゅう)、兵士二万五千を率い、戦艦共九百余艘、高麗の辺浦を解纜(かいらん)(ふなで)、同月十五日佐須郡小茂田浜に到る。助国即ち兵を率い、州府を発して小茂田に到る。翌早朝、通事の眞経男(まつぐ)を使となし、戦艦をもって対州に到る志趣を問いたるに、賊兵答えず、直ちに矢を発し、陸に下りる者一千人。助国乃ち麾下の諸軍を指揮し、海陸において戦う。州兵方々

より尋ね到る。助国矢を発し、賊を射て数十人を殪(たお)す。宗右馬次郎亦前隊の将を射て之を殪(たお)す。是において賊兵競い進み陸に下る。助国先駆けて衆を励まし、蒙漢の兵を撃つ。州兵力尽きるまで奮戦し、斬獲甚(はなは)だ衆(おお)しと雖(いえども)も、辰の刻に到り、終に大きく破られ、助国また命を墜(おと)す。『厳原町誌』より　》と、ある。

元寇の古戦場(佐須浦)(その3)　《文永十一年(西暦 1274 年)、弘安四年(西暦 1281 年)と二度にわたる蒙古襲来で対馬・壱岐は、酸鼻(さんび)を極める惨状を呈したといわれている。文永十一年十月五日、蒙古元帥忽敦は兵三万、九百の軍船で対馬の西海岸一帯を侵略した。各地で激しい戦いがあり、宗家の一族がそれぞれの任地で討死している。守護代宗助国は、自ら親兵八十余騎を従えて府中から佐須に討って出、この地、小茂田の海岸に近い「ひじきだん」(地名)に陣を備えたという。佐須浦は当時川沿いに沿ってかなり浦深い入江であった。従って、戦場は今の金田小学校付近と想定されるが、諸説もある。十月六日寅の刻(午前四時頃)夜が白む頃戦いは始まり、佐須郡同右エ門三郎盛継を始め、州兵も馳せつけて助国勢と共に奮戦したが戦況甚だ振るわず、辰の下刻(午前九時頃)乱軍の中に武将たちは、戦没した。

宗助国の墓と伝えられるものが、下原(しもばる)の観音山に「お首塚」、樫根の法清寺(対馬市厳原町)に「お胴塚」とあり、一軍の首将の墓がバラバラであるのも、その最後の壮烈さを物語っている。護国の花と散った助国はこの時、六十八才の老将であった。この小茂田浜神社は、宗助国公以下国難に殉じた人々を祭っている。

左・解説板２・宗助国(そうすけくに)公の絵図　　**右・宗資国以下戦死将兵の霊を祀る小茂田浜神社(大祭より)**

毎年新暦十一月十二日に慰霊の大祭が行われ、昔をしのぶ「武者行列」のお下だり、敵をみなたおすという意味から「おな」(蜷(にな)貝)と勝ち栗を供える神事、七百年昔、蒙古軍を迎え撃った如くはるかなる海の彼方に弓矢をかまえる「鳴弦(めいげん)の式」(弓弦鳴らす)な

どの行事がある。出陣にちなんだこの「だんつけ餅」は有名である。厳原観光協会　》とある。　※だんづけもち・豆餅とも呼ばれ、小豆がそのままついている。

対馬島の古跡を訪ねる･和多都美神社

和多都美神社の説明　《御祭神　彦火々出見尊(ひこほほでみのみこと)・豊玉姫命(とよたまひめのみこと)　御由緒・平安時代の律令細則である『延喜式(えんぎしき)』の「神名帳(じんみょうちょう)」の中に「対馬国上県郡和多都美(わたづみ)神社(名神大)」とあるのは当社である。

縁起を辿れば、神代の昔、海神である豊玉彦尊(とよたまひこのみこと)が当地に宮殿を造り、宮を「海宮(わちづみのみや)」と名付け、この地を「夫姫(おとひめ)」と名付けた。その宮殿の大きさは、一町五反余り、境内広さ八町四方もあったという。そして神々しい神奈備(かみなび)「夫姫山(おとひめざん)」のさざ波よせるこの霊地に彦火々出見尊と豊玉姫命の御夫婦の神を奉斎したと伝えている。豊玉彦尊には一男二女の神があり、ある時、彦火々出見尊は失った釣り針を探して上国より下向し、この宮に滞在すること三年、そして豊玉姫を娶り妻とした。この海幸彦・山幸彦の伝説は当地から生まれたものである。

満潮の時は、社殿の近くまで海水が満ち、その様は龍宮を連想させ、海神にまつわる玉の井伝説の御遺跡や満珠瀬(みつたませ)、干珠瀬(ひろたま)、磯良恵比須(いそらえびす)の盤座(いわくら)など旧跡も多く、また本殿の後方に二つの岩がある。これを夫婦岩と称し、この手前の壇が、豊玉姫命の墳墓(御陵)である。また、西手の山下に、石があり、それが豊玉彦尊の墳墓である。このように当社は古い歴史と由緒を持ち、対馬島民の参拝は無論のこと全国各地からの参拝が多い。》と、説明がある。

古代より海路からの進入路となっており、海が満潮時には、神社境内まで海水が満ちるという。海神が海から入る神社を見たのは筆者の初体験であった。

浅茅湾(あそうわん)・対馬上島と下島の間、鳥帽子岳展望台より

海上より進入路となっている和多都美(わたづみ)神社

和多都美神社

和多都美神社は浅茅湾を中央に上に神社、金田城、南に小茂田浜となる　地図Ｇｏｏｇｌｅより

水人と海神宮　『魏志』「倭人伝」に対馬の様子を次のように伝えている。《始めて一海を渡る。千余里、対馬国に至る。その大官を卑狗といい、副を卑奴母離という。居る所絶島、方四百里ばかり。土地は山険しく、深い林多く、道路は禽鹿(獣)の径の如し。千余戸有り。良田無く、海の物を食って自活し、船に乗って南北に市糴す。・・》と、ある。

時は２世紀後半～３世紀初頭、対馬には大官卑狗、卑奴母離という権力者がいて、ヒコとは男子、本来は日ノ神の巫で、日子(彦)と思われ、耶馬大国の女王卑弥呼と同様の巫女(祭司)であろう。卑狗(日子)は対馬の王者がいて、この地に日ノ神の祭祀を支配し、また海神の祭祀(和多都美神社)があり、これらの祭祀習俗の中に古い神話に通じる伝承に重みがある。和多都美の祭神は、海神豊玉彦・豊玉媛で、これに鵜茅葺不合尊と、磯良という海人族の祖が合祀され、海幸彦・山幸彦の伝説と同じ話が語られる。南北に市糴し、海上に海躍した対馬の民は、当然海神を祭ったはずで、『延喜式』に四社も和多都美があるのは対馬の外にない。

『魏志』倭人伝の中に、《倭の水人は、好んで沈没して魚蛤を捕り、文身し、もって大魚水禽をはらう。》これは対馬・壱岐・九州北部の魚民の習慣を描写したものといわれ、沈没して魚蛤を捕るのは「潜り海人」の漁法であり、文身とは身体に「入れ墨」をすることで、それによって大魚や水禽の害を避けるという呪いであったことがわかっている。市糴とは、米を買うことで、船で出掛け、九州・韓国へ交易していることが、偲ばれる。(『対馬の歴史探訪』永留久恵著より)

古代山城･金田城の看板の説明は　《金田城築城の歴史は今から 1300 年以上遡ります。660 年(斉明 6)、唐・新羅連合軍の攻撃によって百済(くだら)は滅亡しました。日本は百済復興を支援するため、663 年(天智 2)に大軍を派遣し、唐の水軍と錦江の河口付近で戦いましたが、大敗し朝鮮半島から撤退しました。「白村江(はくすきのえ)の戦い」で、その結果、唐・新羅の来襲に備え、防備を整えることが急務となった。大和朝廷は 665 年(天智 4)に大野城(福岡県)、基肄(きい)城(佐賀県)、長門城(山口県)を、667 年(天智 6)に高安城(大阪府・奈良県)、屋島城(香川県)、金田城(対馬)を築き国土防衛の備えとしました。国防の最前線に位置する対馬の金田城は、重要な役割(見張り、のろし通信)を担っていました。

白村江の戦い(663 年)に敗れた日本は、防人(辺境守備兵・はくそんこう備兵)を東国から集め、対馬・壱岐・筑紫に配置し、唐・新羅の侵攻に備えました。烽(とぶひ)（烽火(ほうか)・のろし)は煙を上げて危急を知らせる通信手段で、山頂付近にあったと考えられています。烽は対馬全体に数カ所あったとされ、北から南へリレーし、壱岐を経由して太宰府までの通信体制が確立されていました。(対馬市教育委員会より)　》

金田城跡・南東角石塁が雄大に残る

金田城跡・一ノ城戸の城楼基壇(観光協会より)

特別史跡金田城跡の看板「登山口・城戸」の説明は下記とある。

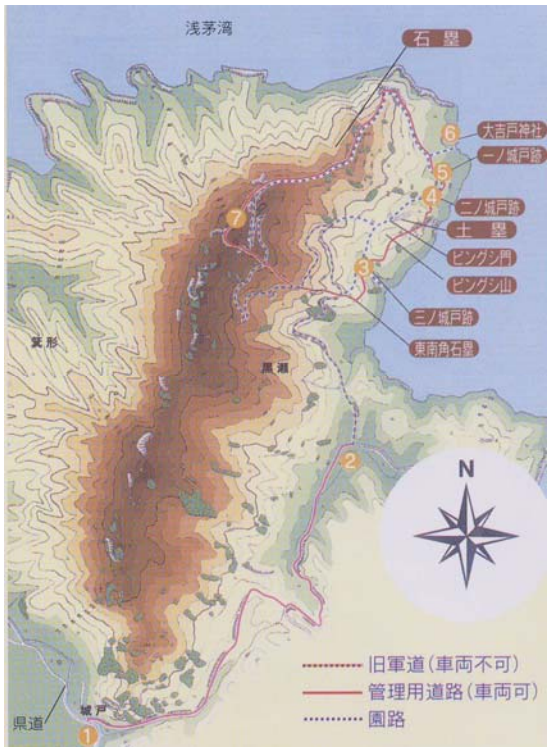
《国の特別史跡「金田城跡」は昭和５７年３月２３日指定、これより北方に連なる城山山系の北部にあり、この登山口を城戸という。おそらく城の入口を示す地名かと思われるが城門があった形跡はない。金田城は天智天皇６年(667)にこれを築くと『日本書記』に記載されている。このことは朝鮮半島の状勢から、唐国の侵攻を恐れた我が国が、初めて外敵に備えた防衛の最前線で、大宰府の防護・瀬戸内の固め、そして畿内の木塁と続く戦略配置の要であった。現存する遺構は城山を取り巻くように、高さ数メートル、延長２、８６キロメートルの城壁がえんえんとめぐり、城の周囲は５、

４キロメートルである。谷間には水門を設け、城門を構えた遺構があり、これが一ノ城戸、二ノ城戸、三ノ城戸である。城山の北西面は絶壁が多く、北東面は細り口の断崖で、天然の要害であることから、防備の要が南東面に置かれたことを示している。今から１３００年前、対馬に遣わされた防人は、遠く東国から徴兵された若者たちで、彼等が任地で詠んだ故郷の歌が「万葉集」に多く収められている。

大君の　命かしこみ　磯にふり

海原渡たる　父母をおきて　　万葉集防人の歌

昭和６１年３月１０日建設　　文部省・美津島町　》と、ある。



特別史跡・金田城跡

平成５年度から発掘調査を開始、ビングシ山鞍部（あんぶ）、同山頂から掘立柱建物跡が３棟、柵列１列（柱穴５個）が発見、鞍部北東側より土塁と門礎石１個が出土、ここに門跡が判明。土塁の断割り調査の結果、現在の土塁下から新たな土塁が確認された。（略）

古代山城跡・南側より航空写真（対馬市教育委員会）

※金田城跡は人里離れた所、野生のイノシシがいる気配なので２人での登山お進めします。

更に蒙古軍は壱岐島に上陸　　１０月１４日夕、壱岐島に上陸（諸説有る）。（壱岐島の位置は今章７２頁の元寇侵攻図参照）　対馬を蹂躙した元軍は、１０月１４日壱岐島の西側に襲来した。『八幡愚童訓』によれば、元軍の船は壱岐島西海岸に到着した。守護代の平経高（たいらのつねたか）と御家人たち１００騎が、庄ノ三郎城の前で矢を射て合戦をした。敵蒙古の矢は二町（216m）も飛び、敵軍は大勢で押寄せ、壱岐の軍勢は樋詰（ひのつめ）城（新城神社近く）の中に立て籠って防戦したが、翌１５日に攻め落とされ、一同城中で自害した。

壱岐島侵攻作戦　対馬侵攻に続き元軍は壱岐島西側の海岸に上陸。『高麗史』巻104・列伝 17「金方慶(きんほうけい)伝」に壱岐島の戦闘状況がある。

【元軍が壱岐島に至ると、日本軍は岸上に陣を布いて待ち受けていた。高麗軍の将、及び金方慶の娘婿の趙卞(ちょうへん)はこれを蹴散らすと、敗走する日本兵を追った。壱岐島の日本軍は降伏を願い出たが、後になって元軍に攻撃を仕掛けてきた。これに対して蒙古・高麗軍の右副都元帥・洪茶丘と共に朴之亮や趙卞ら高麗軍諸将は応戦し、日本兵を 1000 人余り討取った】とある。

壱岐市観光地図(壱岐市立一支国博物館より)

壱岐島浦海(うろみ)海岸となる

文永の役・上陸海岸は浦海海岸と天ケ原海岸となり、(右側地図参照)蒙古軍は、勝本町北部の浦海(うろみ)と天ケ原の両海岸に上陸し、守護代平景隆の居城がある新庄(しんじょう)(新城)を攻めた。平景隆は約１００騎の軍団で元軍を迎え撃ち応戦したが、庄ノ三郎で大敗した平景隆の軍は居城のある樋詰城(ひのつめじょう)(新城神社境内)へ退きこの地で戦死して全滅したと伝える。

元軍は浦海海岸から上陸

※「文永の役」文永 11 年１０月５日壱岐上陸地点は中の地図の西側の浦海海岸。

※「弘安の役」弘安４年５月無２１日は壱岐島の東側の海岸、左絵地図の上⑥の少弐公園の所となる。

新城古戦場・芦辺町の千人塚　この一帯は激戦地、千人の死体が埋められた。『壱岐郷土史』より

千人塚　残虐行為を繰り返した元軍の通過後に、死体を埋めた千人塚が、壱岐の北部、勝本や芦辺に多い。浦海千人塚(本宮仲触)、本宮千人塚(本宮西触)、立石千人塚(立石南触)、天ケ原千人塚(東触)、射場原千人塚(仲触)、新庄千人塚(新城東触)は残る。

新城神社は守護代平景隆の本陣樋詰城跡となる

同所守護平景隆の墓

新城神社　元寇で殉難した平景隆将兵を祀っている。守護平景隆の墓は景隆率いる百騎は、力の限り防戦したが、元軍の人海作戦の前に抗するすべもなく、翌１５日、景隆は一族と共に自害して果てた。その間、景隆は家来の宗三郎に命じ、元軍の壱岐襲来の報を大宰府へ伝えた。

右矢田一嘯「景隆の自刃」明治４２年

蒙古軍は更に肥前沿岸の鷹島へ10月16･17日侵攻する

「文永の役」蒙古軍の進路図

鷹島島の観光地図・『鷹島』松浦市教育委員会より

対馬小太郎の墓

兵衛次郎の墓

対馬小太郎　対馬守護代宗助国(そうすけくに)の家臣・対馬小太郎は、文永１１年１０月５日、元軍が対馬に侵攻、守護代一族８０騎を率いて奮戦したが、終に及ばず戦死直前、小太郎及び兵衛次郎に命じて、蒙古襲来を大宰府に報告させた。２人は、玄海灘を小舟で乗り越え、博多に着き報告の使命をはたした。弘安４年(弘安の役)、再び元軍が来襲し、鷹島襲撃の知らせに、少弐景資の配下で奮戦中、重傷を負い自刃したと伝える。

兵衛次郎　兵衛次郎は、対馬小太郎と大宰府に急報した。その後、転戦し鷹島で戦死している。墓の位置から伊野利の浜(神崎免伊野利地区の海岸)は、かつては祈りの浜と呼ばれており、弘安の役には、日本側の援軍が着船した場所と伝えられている。 兵衛次郎の墓は「石堂様」と呼ばれ、対馬小太郎の墓は、「対馬様」と呼ばれている。共に２人は、故郷を離れ、鷹島の戦いで最後を遂げた悲劇の若者であった。

開田の七人塚

元寇記念之碑・玄界灘が一望できる最高な眺め所

開田（ひらきだ）の七人塚　文永の役の時、東浜（船唐津港）に元軍が上陸した。わが防衛の不備につき島民のほとんどが虐殺された。当時、船唐津免開田には人目につかない山奥に一軒家がありましたが、飼っていたニワトリが鳴いたため、「ニワトリがいるなら人家もあるだろう」と、元軍は山の中を捜して一軒家を発見されてしまいました。８人家族の内、７人が殺され、灰だめに隠れていたお婆さんが助かりました。それ以来、開田ではニワトリを飼わないと伝えられている。（『鷹島』松浦市教育委員会・松浦市立鷹島歴史民俗資料館より）

元軍は博多を目指して侵攻　鎌倉幕府は遠隔地にいながら現状把握が正確であった。現代人が思う以上に情報を掌握している。守護人を通し連絡網は、律令体制の国衙管理行政が「御恩・奉公」の軍役は承久の乱後の経験から有効に作用していたのである。

元軍は博多湾から博多市街・筥崎宮を焼き払う

右図・能古島は今津浜・志賀島は玄海灘となる

蒙古軍快進撃　１０月１９日未明、元軍の進軍は益々強くなり、今津、麁原、赤坂まで乱入して松原に陣を張った。元軍は更に長垂山、姪の浜からの部隊は、博多湾正面の百道原に上陸する部隊の援護しながら突進し、麁原山を占領し、今津、生の松原、麁原、博多、そして筥崎神宮も猛火に包まれてしまった。１０月１９日博多湾に進入した元軍船隊は翌日２０日に博多へ上陸を開始した。博多では少貳景資（筑前・豊前・肥前等９ケ国・壱岐・対馬・大隈列島の守護職）が日の大将となって総指揮をとり、進軍する元軍を向かえ討った。元軍は太鼓・ドラを打ち鳴らし、ときの声(雄たけび)をあげて集団隊で押し寄せてきた。

『八幡愚童訓』に「日本ノ大将ニハ少弐入道覚恵ガ孫讒１２、３ノ者、箭合ノ為トテ小鏑(かぶら矢)ヲ射タリシニ、蒙古一度ニドット咲フ。大鼓ヲ叩銅鑼(打楽器)ヲ打チ、紙砲鉄砲(紙砲)ヲ放シ時を作ル。其ノ声唱立サニ、日本ノ馬共驚テ進退ナラズ」と。

毒矢が放され、火薬を籠めた「てつはう・鉄砲」が放たれた。日本側の戦は一騎打ちとする武士が名乗りをあげて突進したが、馬は驚き、飛跳ね、苦戦の連続であった。日本軍の戦いの方法は全く違っていたが、たちまちにして日本軍は、素早く軍集団での突撃行動となって行くのである。そして、海上の戦いは、名だたる西海の松浦党による活躍も激しく、長崎肥前松浦地方の誉高き「松浦党」海族集団と『五島史誌』は伝える。対馬・壱岐の西海は松浦水軍の強い海領域であり、元軍は松浦水軍を最も恐れていた。

博多の市街に火の手が上り日本軍は大宰府まで退いた。日本軍は夜に入り水域(太宰府市)に陣を張り、翌日の決戦を期したのである。翌朝２１日、何故か、昨日までの博多湾に埋めつくした元軍大船隊が姿を消していた。敵の船が一艘、志賀島に座礁していて、敵は手を合わせて命乞いをしたが、『八幡愚童訓』に「弓矢ヲ捨、甲ヲ解ク其時ニ当テ、我モ我モ寄合セ、高名ガホニゾ生虜ケル。水木ノ岸ノ前ニテ引並テ頸ヲ切者百廿人ト聞ヘケリ」とある。

通説は「大風雨」による元軍の敗退とあるが、疑問は残る。事実、２０日には日本軍を打ち破り、そして、夜間に一兵も残すことなく船に引き揚げたとあるが、午前の戦いは元軍一方的な勝利、午後には日本軍も集団戦に切り変えて盛り返し、援軍を得て反撃に転じていた。元軍は船に軍兵を撤収させたのは、後から続々とやって来る日本の援軍に恐れをなし、元軍将兵は上陸の野営する気力は無かった。

【『元史』８月、全軍を喪って還って来た諸将の言うことには、「日本に至り、大宰

府を攻めようとした。暴風が舟を難破させた。」】とクビライに説明をしている。【『高麗史日本伝』に・［家 078］玄宗１５年（1274)、冬１０月乙巳(３日)、(略)元の都元帥の忽敦(クドウン)は、右副元帥の洪茶丘と、左副元帥の劉複亨(りゅうふくこう)(元朝人)と与(とも)に、蒙・漢軍２万５千と、我が軍８千と、梢工・引海(いんかい)・水手６千７百と、戦艦９百余艘とを以て、日本を征す。一岐島(いきとう)に至り、千余級を撃殺し、道を分ちて以て進む。倭は却走し、伏屍(ふくし)は麻の如く、暮に及びて乃(すなわ)ち解く。会々(たまたま)、夜、大いに風ふき雨ふる。戦艦、厳崖に触れて多く敗る。金侁、溺死す。】と、ある。『高麗史日本伝・２(上)』武田幸雄編訳より

志賀島に残されていた1艘の元船　休暇村志賀島観光案内に、《文永１１年(1274)１０月１９～２０日、元軍は壱岐・対馬を蹂躙して、余勢をかつて博多湾に侵入、今津～箱崎に至る博多湾岸に上陸、密集部隊戦法と新兵器「てつはう」を使用して我が軍を悩ましたが、我が軍も良く戦い侵攻を最小限にくいとめることが出来た。明けて２１日朝、前日まで博多湾に無数の停泊していた敵船は、その姿を消していたのである。当日の朝、逃げ遅れた敵船が一隻志賀島の西海岸に漂着していたので、我が軍はこれをとらえて２百２０余人の首を斬ったといことである。》と、看板に説明がある。

「てつはう」手榴弾のようなものである

筥崎宮は焼け「蒙古軍に追い込まれ筥崎八幡の御神体を１２㌔離れた宇美八幡(宇美町)から更に山上の極楽寺に運ぶ」とある。(「筥崎宮文書」)

元軍の善戦の中での結論を出す　御家人約５千人が博多湾の海岸線３０㎞に各将が防衛線を守ったが、圧倒的な５倍の元軍に押された。日本軍左翼陣が崩れると、敵軍は続々と上陸し、麁原山に陣を構えた。『蒙古襲来絵詞』に登場する竹崎季長らの軍勢の活躍に一進一退を繰り返し、夕方には元軍は博多・箱崎に進軍し、筥崎宮も焼け落ちたが、しかし、元軍の参謀作戦会議は軍の撤収を決めたのである。

それは、日本軍は集団戦に不慣れの武士団を講談的に見てきた様な合戦模様を語っ

ているが、『絵詞』の前巻の絵五、六に騎馬集団の攻撃がある様に、日本軍は昼間に陸から集団騎馬戦で攻め、夜間は軍船に夜襲、夜襲の攻撃の連続で仕掛けた。

海上に於いては松浦水軍が元戦艦に対して夜襲攻撃の連続を繰り返し、元軍参謀たちは、「日本軍と闘ってみると、日本軍は予想以上に強い」と、実感したのも事実であるらしい。その上副大将の劉復亨が矢で重傷を負った(第４部⑥矢田一嘯の絵画参照)ことや、季節は冬の前ぶれとなり、北西の風が海を時化、大波は船をゆらし、不安が不安を呼び、「このまま博多湾に停泊している暇はない」と。冬季の北西の風が本格的にやって来たら「合浦に帰る時期を逸してしまう」という恐怖心が元軍参謀にあった。忻都の心境は「我が軍は緒戦に勝った、これで日本は思い知ったであろう」ここで引揚げても、皇帝には充分説明はできる、との結論に至ったのではないか。北西の季節風吹けば、当時の航海技術では合浦に帰るのは難しい。冬型の気圧配置が強まれば危険が増す。春３月まで東風が吹く迄博多湾停泊することは、軍事的な補給が無い以上、それは難しい、結論は撤退である。

元軍参謀の忻都(蒙古人)、洪茶丘(中国人)、金方慶(高麗人)らは７年後、「弘安の役」に再び出征して来るのである。元軍将兵の損害は、「文永の役」の戦死・溺死者、１万３千５百人を出したと朝鮮の史書『東国通鑑』は記している。

元軍の麁原で陣を敷いた麁原戦場跡。元軍は今津・百道原に上陸、麁原、鳥飼、赤坂が激戦場となる

元軍撤退は神風　『モンゴル襲来の衝撃』佐伯弘次著参考にして考察する。

翌１０月２１日の朝、博多湾を見渡したところ、元船は皆いなくなっていた。僅かに一艘が博多湾港の志賀島に残っており、敵船の兵士の多くは日本軍に生け捕られ、水城(大宰府市)の前で首を斬られた。尚、当時の貴族日記に大友式部大夫の家来が、元兵５０人余の捕虜を上洛させる記録があるので、元軍捕虜は京都まで送られた可能性があ

る。「文永の役」の元軍が敗退した理由は、所謂（いわゆる）「神風」に依るというのが世の大方の理解となっている。朝廷側から見れば、「敵国退散」の祈願を社寺に命じている以上、当時の文化レベルでは、朝廷・御家人・一般民は「神の風による敵兵を退散した」と、そう思っていたに違いなく、大方の人々は神風説を受け入れたと考える。

元軍撤退の原因を『新元史』を探れば　①に疲れた兵を以て敵軍（日本国）深く入るべきでない。②に征東左副元帥・劉複亨（りゅうふくこう）が、敵少貳景資（かげすけ）の矢にあたり負傷している（第４部矢田一嘯画参照）。③にあくまでも決戦する意見もあったが、これらの事情を勘案すれば、兵力の構成は元軍の被征服民族（従属）は中国人・女真・高麗となり、元本軍の蒙古兵は少数であったことも上げられる。混成部隊であることが結束力の衰えに繋がり、その上元国の統治による高麗国内の経済疲弊の中で、急造させた手抜きの建造軍船であった事と、武器や兵糧（博多で食料調達考えていた）の確保が出来なかった事が主な原因で、結論から言えば、大規模な侵略行動計画なのに軍の準備不足は否めない。

又、**「台風説」**には１１月２６日に台風が来たとは考えにくい。日記『勘仲記（かんなかき）』に「逆風がにわかに吹いて、敵船は本国に吹き帰されてしまったとことだ。きっと神様のお助けであろう。」とあり、考えられる事は冬の前に吹く北西季節風「はしり」の可能性は高い。　★近代気象学者の荒川秀俊説は、昭和３３年に**「文永の役の終りを告げたのは台風ではない」**と題する論文発表した。１１月後半に九州に上陸した台風はない。直近では 1990 年１１月３０日に和歌山県白浜町に上陸した記録が最も遅い。（「気象庁上陸日時が遅い台風」より）

元軍の第1回目日本侵略の元国を総括すれば　元軍が考えていた勝利方程式は、日本軍の速やかな降服を期待したが、占領地支配の目論見は外れてしまった事にある。

元側から見れば日本軍は抵抗の強く、元軍の赤坂山（堡（とりで）の構築失敗）占領に失敗した事、因って残された選択肢は、1つは春になって東風が吹く迄、日本の占領地を確保し、堡を築き、更に占領地を拡大して戦い続けるか。２つには本格的な冬到来の前に本国へ帰国する。前者の選択は兵站の補給を欠くまま４カ月耐え忍ぶ事は、元軍兵士の全滅の危機を示唆している。その結論の延長線上で総司令官忻都（せつと）は、説得の理由を見つけ出し、土産として元軍は壱岐・対馬に還し、少年少女２００人を捕らえその児童たちを、高麗の国王や后（きさき）に献上している。元朝廷内での日本侵攻後の処理も、日本との戦

闘に於いて、元軍はその敗北感はなく、元軍４万の内、１万３千余人は帰国できなかったが、高麗王は使者を出してこれを労(ねぎら)っている。クビライは第１回の侵攻で「日本本土へ大打撃を加えた」報告を信じていた様子であった。

執念を燃やすクビライ　南宋国は元国の１回目の日本侵攻から６年後の1276年に滅びた。弘安３年(1280)６月、クビライは南宋の降将(こうしょう)(降伏大将)范文虎(はんぶんこ)を呼び、日本遠征の計画を立案させ、７月に南宋の蛮軍(ばんぐん)(南宋の降兵)の軍組織の新改革をした。

８月にはクビライを中心にして、忻都(キント)、洪茶丘(こうちゃきゅう)、范文虎らの諸将の日本侵攻作戦計画が立ち上がった。先ず先発は、忻都と洪茶丘は東路軍の４万人を率いて高麗の合浦から出発し、范文虎は江南軍１０万を率いて、揚子江河口付近の旧南宋の慶元(けいげん)(寧波)の港から後出発計画案とし、両軍は日本の壱岐島海域で合流、そして、日本本土を一気に攻撃侵攻計画を立てていた。

先発の東路軍は忻都を征日本都元帥とし、蒙漢軍征日本都元帥・洪茶丘率いる兵１万５千人、高麗軍征日本都元帥・金方慶(キムハンギョン)率いる兵１万人、高麗梢工(しょうこう)(船乗り)・水手１万５千人からなる総勢４万２千人の大部隊と、戦艦９００艘、兵糧は３カ月分の１１万石を用意して編制軍を組んでいた。

一方、江南軍は征日本都元帥・范文虎は蛮軍長に夏貴(かき)(南宋の将軍)を配し、１０万人の大部隊編成で戦艦３５００艘の大船団となり、弘安４年の春、出発の間近になって、江南軍は日本船の船員(注)(遭難者)から長崎の平戸島は、幕府軍の防衛準備域外となっている情報を掴んだ。その情報により平戸島は船団停泊地に適するという判断の基に日本侵攻の足掛かりが築けることを期待した。両軍の集合地は壱岐島海域での集結決定を反故し、江南軍は壱岐沖の集合地から平戸島に一方的に変更してしまった。また、江南軍側は総司令官の阿剌罕(アラカン)が出陣前に病気で倒れ、新たに阿塔海(アタハイ)に総司令官に再任命する事態に陥り、出発が大幅に遅れ６月１８日に漸(ようや)く慶元(けいげん)を出発状況となっていた。一方、東路軍は集合地の変更を知らぬまま、予定を早め５月３日、９００艘の大船団が合浦を出陣し、巨済島(きょさいとう)にしばらく滞在後、対馬に向けて出陣した経緯となる。

注・『元史』日本伝・石原道博の解説に【征日本直前の至元１８年３月の条に、「日本船漂到」に関する日本行省参議国佐らの報告である。すなわち、漂到日本船の水工を捕まえて地図を描かせているなどは、誠に機敏な処置というべきか、その地図の事

は不詳だが、おそらく水工がたえず往来していた北九州沿岸地方の略図と想像され、平壺(平戸)島が紹介されているから面白い。思うに、弘安の役直前に漂到したこの日本船というのも、文永の役のところで指摘したように、世祖の一面貿易を奨励拡張しょうとする方針のもとに来航した日本商船であったに違いなく、さらに憶測をたくましくすれば、「漂到」に名をかりて日本より交易に赴いたとも考えられる。】

「弘安の役」弘安4年(1281)、文永の役7年後の蒙古襲来

対馬侵略　東路軍は弘安４年５月２１日に対馬沖に到着し、対馬の世界村大明浦に上陸した。【『高麗史日本伝・下』(朝鮮正史日本伝２・武田幸男編訳より)〈伝 016〉、〈忠烈王〉７年(1281)３月、師を出して東征(第２次東征)す。方慶、先に(軍)義安郡に到り、兵仗を閲す。王、合浦に至り、大いに諸軍を閲す。方慶、忻都・洪茶丘・朴球・金周鼎等と与に発し、日本の世界村大明浦に至り、通事(通訳)の金貯をして、檄して之を諭せしむ。周鼎、先に倭と交鋒し、諸軍は皆な(船より)下りて与に戦う。郎将の康彦・康師子等、之に死す。】とある。

『高麗史日本伝』に「世界村大明浦とは対馬上郡佐賀村」の大明浦説が有力とある。上陸の東路軍は日本側の抵抗を受け郎将の康彦、康師子らが戦死したとある。※世界村大明浦は対馬上県郡佐賀村の大明神浦説が有力しなり、現対馬市峰町佐賀となる。

矢田一嘯「対馬の惨状」油彩・明治４２年・本佛寺　　同「戦い終わって」・明治絵画「蒙古襲来絵図」

東路軍はクビライから　「百姓をむやみに殺してはならぬ」命令を受けてスキ、クワ、種モミ、農業用具も持参した屯田兵の軍隊編成で侵攻となっていた。５月２１日対馬の世界村大明浦から上陸(諸説あり)し、世界村は対馬の佐賀村とも言われた所である。

壱岐には鎮西奉行少貳経資の子息少貳資時が守護代として在島していた。忽魯勿塔

と『高麗史』とあるが、勝本は古より風本と呼ばれていたからこの漢字が当てられたらしい（『壱岐郷土史』）。上陸した元軍と壮絶な死闘が展開の末、資時は１９歳で玉砕した。この壱岐島で残酷な悲劇の様子が、後世に「むごい」という言葉が生れた。

『八幡愚童訓』に「賤ノ民ニ至マデ、泣キ歎ヌルハ無リケリ。時間モ惜習ノ命トテ、妻子ヲ引具シ老タルヲ扶ケ、幼ヲ懐テ何無落行ハ、中有ノ旅モ角ヤト覚テ悲シ」とある。見る島民を打ち殺し、狼藉、民をかばいきれず、妻子を引き連れて、深山に逃げ隠れし、赤子の泣き声を聞きつけ敵兵は島民を探し求めた。母親は愛児を乳房に強く抱いて、気がつけば我が児が息をしていなかった。あさましき有様なりと伝える。

壱岐島「弘安の役」戦場跡を探訪　長崎県指定史跡（少弐公園）の「弘安の役」瀬戸浦古戦場の看板に説明がある。《昭和５０年１月７日指定、壱岐市芦辺町・瀬戸浦一帯。弘安４年（1281）の、２回目の元寇の時、対馬・壱岐を侵して６月初旬に博多湾に来襲した元軍（東路軍）は、鎌倉幕府の守備軍との間で激戦を展開し、一時は水城（大宰府市）にまで迫る勢いであった。しかし、東路軍は日本軍の予想以上の反撃に遭ったことや、江南軍の到着が遅れたことにより、６月中旬になって肥前鷹島まで退いていた。

元軍はこの頃、壱岐島を博多攻略の橋頭堡となっており、そのため鎮西奉行の少弐経資は自ら陣頭に立ち、博多方面の警固をしていた薩摩・筑前・肥前・肥後の御家人を率いて壱岐の瀬戸浦に攻め寄せた。６月２９日から７月２日にかけて元軍と激突し、戦闘は主に港の内外を中心とする海上や、瀬戸浦の両岸、その周辺の陸地でも激しく合戦が繰り広げた。瀬戸浦は２㎞に及ぶ狭隘な入江を有し、西側には少弐の居館、船匿城（芦辺町）があり、水軍の基地としては絶好の条件を備えていた。又、壱岐から博多までの最短の地であることから、元軍もその拠点としていたものと考えられる。

当時の壱岐の守護としては、僅かに「文永１０年１１月１６日の記録」（「松浦文書」）に見られる。武藤（後の少弐）資能が確認でき、瀬戸浦一帯が少弐氏の私領であったから、その攻防戦は激しいものとなっていた。この戦いについては「龍造寺文書」に、弘安５年９月９日肥後守護北条時定の書状に、「去年異賊襲来時、７月２日、於壱岐島瀬戸浦令合戦由事、申状并證人起請文令披見畢」とあり、訳すと「去年（弘安４年）元寇が襲来した時、７月２日に壱岐の瀬戸浦で合戦に及んだという事、貴方からの上申書（恩賞の文書）、並びに天地神明に誓った起請文で拝見した。」平成２０年３月　長崎県教育委員会》とある。

少弐公園（８１頁地図の⑥）瀬戸浦に元軍上陸場所

同所・**壱岐神社**は少弐資時（すけとき）を祀っている

壱岐神社　弘安４年「弘安の役」で玉砕した少弐資時（すけとき）を祀る神社となる。昭和１９年に祀られた神社。「しょうにい様」と呼ばれる石積み塚が、資時の墓であることが判明したのは、明治３１年の事、地元には 600 年以上語り継がれた伝承が、現在の壱岐神社で、日露戦争前夜、国内に威信発揚する国威高揚を高めるためとも想われる。

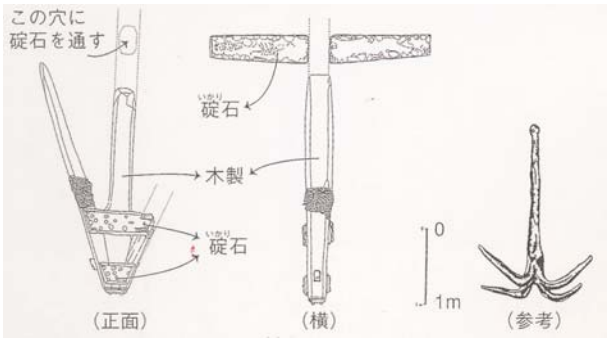
少弐公園内（瀬戸浦）にある**少弐資時（すけとき）の墓**

同公園内にある元軍船の**碇（いかり）石**

少弐資時の墓　《弘安４年（1281）、２度目の襲来は、北西部海岸（瀬戸浦）と勝本から上陸した元軍を迎え撃ったが、壱岐守護代、弱冠１９歳の少弐資時であった。船匿城（ふなかくしじょう）（芦辺町）に居た資時は、少数の軍勢で激戦を繰り広げたが、船匿城で全滅したと伝えられている。》（「壱岐ふぁいる歴史文化編」壱岐郡町村会より）

碇石・少弐公園内看板に　《材質・花崗岩・全長２４２ｃｍ・重量３００ｋｇ。中央部が太く先端に向かって先細りとなり、本体の前面は楕円形をなしている。碇石は木製の碇軸木に綱をもって固縛するための綱掛け溝が設けてあり、中世日本本船の絵に描かれている碇と一致している。》と説明があった。

碇石・元寇資料館資料の説明には



元寇資料館資料より

中国泉州発掘の碇石や長崎県鷹島南岸の海中から引揚げた１３世紀の中国の碇石とは明らかに型式を異にしている点は重要であり、このことから左京沖合から発見された本碇石が中世日本に於けるやや大型の外洋船に使用されたものと推定される。(略)壱岐に鎮西奉行少弐経資の我が子の少弐資時を守護代に任命して防衛に当たらせた。この時に兵員、武器、軍馬、兵糧等の輸送に九州としては大型の船舶を当てた。弘安４年５月２６日、壱岐瀬戸浦に侵攻した元の東路軍と大激戦の末、少弐資時以下全員玉砕した。玉砕の数カ月前に守備兵等の輸送に携わった数隻の大型船は主なきままに瀬戸浦に沈んだ。(略)　》と解説がある。

千人塚・現在の芦辺町に大戦闘があったことを知る

中山の千本供養塚

千人塚　壱岐市芦辺町には「弘安の役」で日本軍の戦没した塚がある。おそらくこのあたりは、蒙古軍兵との島民を含めた激戦地であったのであろう。

鎌倉幕府は高麗を侵略出来なければ石防塁を築け　「文永の役」で元軍の軍事力を見せつけられた幕府は、博多湾を御家人に対し「異国警固番役」の制度を設けた。この時、幕府は再度の蒙古襲来を予想して、その反撃軍事行動の案は、「高麗遠征計画」(高麗征伐計画)である。健治元年(1275)、安芸国守護、武田信時に異国征伐に関する関東御教書が出た。翌年３月に異国征伐の決行行動日を打ち出したが、山陰・山陽・南海の御家人たちは、水夫(かこ)等の不足を理由に出陣は至急にはできない解答をしてい

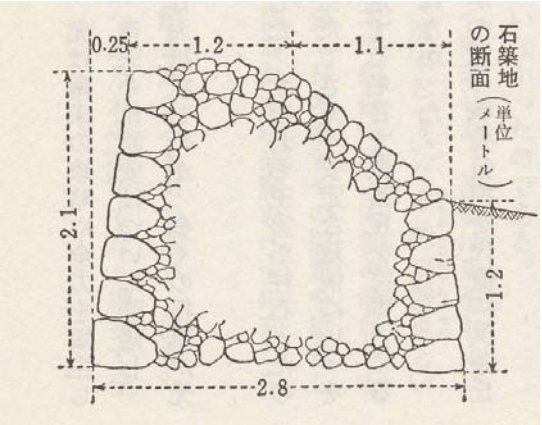
た。征伐機運は盛り上がらず、幕府の号令は腰砕けとなってしまった。幕府の高麗征伐計画(第１回目)は御家人たちの熱気は盛り上がらず、高麗遠征の出陣は結局取り止めとなった。幕府は「それなら博多湾を護る石築地を造れ」との命令を出した。御家人５千人による博多湾岸に高さ２ｍ、距離３０余kmに及ぶ長さの築地石造営を命じた。今日に残る「元寇防塁」は「弘安の役」に間に合う緊急命令であったのである。

『深江文書』(現南島原市深江町)に、《「建治２年(1276)３月１０日少弐経資石築地役催促状、異国警固番役の間、要害石築地の事。高麗発向の輩の外、奉行の国中に課し、平均に沙汰を致し候所なり。今月二十日以前、人夫を相具し、博多津に相向い、役所を請け取り、その沙汰を致さるべく候。恐々謹言」》と大変きつい命令となっている。

元寇防塁

「今津防塁図」　『伏敵編』明治２４年・山田安栄著・重野安繹監より

「生の松原」築地石 20 キロは(西の今津～東の香椎浜)



築地石の断面図(『蒙古襲来』黒田俊雄著より)

福岡市の元寇防塁についての説明　《博多湾岸の東西に延びる史跡元寇防塁は、建治２年(1278)、時の鎌倉幕府執権北条時宗が、当時世界の大半を征服して世紀の英雄とい

われた元の国王クビライの日本襲来に備えて、文永の役直後、九州の諸武士に命じて築かせた石築地(防塁)である。その高さは１、８ｍないし３ｍ、幅１、８ｍないし２、４ｍあったといわれ、東は箱崎地蔵松原から、西は今津長浜にいたる延長２０㎞に及ぶ大規模なもので、２度目の弘安の役(弘安４年・1281)にはこの防塁が、わが国の防衛上大きな貢献をなした。この生の松原地区には、今津、長垂、西新地区と共に石築地の残っている貴重な個所であり、わが国の歴史上からは勿論世界史上からも貴重な史跡である。　　国の史跡指定　昭和６年３月３０日　　福岡市教育委員会　》

早良区の元寇防塁(西新地区)

今津浜の砂に埋もれた元寇防塁

元寇防塁(石築地)　『文永十一年・冬の嵐』服部英雄著を参考にして述べる。

この石築地を観察すれば、当時の戦法や蒙古軍の軍事行動から推察して、防塁築造が最重要の結論に至っている防禦壁と考える。石築地は全ての砂浜・長浜のみにあって、磯(砂利・岩場)には築かれていない。元軍の大型船は直接に接岸できないので、小型の上陸船(抜都児Ｐ111 参照)で着岸して上陸する段取りとなっている。蒙古軍は一挙に大軍を上陸させたいわけで、しかし、着岸適所は大量の将兵を上陸可能な広い浜だけとなる。磯では人間の行動はできるが、馬の行動は制約される。

「竹崎季長絵詞」絵八に描かれているように蒙古軍団には騎馬の蒙古兵がいる以上、騎馬隊は磯に上陸する事はないという確信の基に、幕府は博多湾内の南岸や長浜に石築地を築造した。それは、対馬・壱岐方面から博多を攻撃して来る場合は先ず、北西の浜に来着を想定し「文永の役」に蒙古軍は上陸可能にしたカ所や上陸計画の浜を予測して襲来の浜を割り出し、浜辺を馬で越えられない防塁の水際作戦を練り上げた。

絵八・１部Ｐ11・『丹鶴叢書』

凡そ2m程の石築地は馬の上陸を阻(はば)み、何よりも馬を上陸させない事に重点を置いていたと考える。幕府は大陸での蒙古騎馬民族の騎馬戦を最も恐れた軍事作戦行動の情報を、来朝の南僧より得ていたと思われる。馬さえ上陸させなければ蒙古兵と雖(いえど)も組みやすし、と見抜いていたと思われる。更に、河口からの船による侵入を予測し乱杭(らんくい)を打ち込み、上陸船を阻止する戦法を立て、騎馬を浜辺・河口からも上陸を阻み、「弘安の役」の合戦に於ける日本軍の戦意は高揚し石築地は見事に成功を収めたのである。

今津の防塁築造の説明は　《石材は近く山や海岸などから運んでいる。この今津地区は大隅(おおすみ)、日向国が分担して、柑子岳(こうしたけ)の麓から毘沙門岳の麓まで約３㎞にわたりに築き、石質は、西が花崗岩、東が玄武岩の２種石材が使われている。この防塁は襲来時、武士団の元船への攻撃に阻まれ、元軍は博多の地に上陸出来ませんでした。》と、ある。

この元寇防塁は御家人たちが築造し、今津地区は日向・大隅が、生の松原は肥後、姪浜は肥前、博多は筑前・筑後、箱崎は薩摩となり、香椎(かしい)は豊後が分担して、建治２年(1276)３月から僅か６カ月の突貫工事で完成したものである。

瀧の口刑場跡　弘安の役の３年前、鎌倉腰越の瀧口刑場跡に、元国使節杜世忠(とせいちゅう)（３４歳元人)・何文著(かぶんちょ)（３８歳漢人)らが斬首されたされた所。文永の役の翌年、建治元年４月１５日杜世忠を正使が来朝し、合戦現場の博多を避けて、長門の室津(山口県豊浦町)に上陸した。一行５名は天皇や将軍に直接国書を渡す使命となっていた。しかし、杜世忠を待ち受けていたのは、大宰府に移されず鎌倉へ送られた。幕府は断固とした態度を示し、使節らを罪人の如く切り捨てた幕府執権北条時宗(２４歳)であった。

杜世忠の辞世の詩、「門を出でて妻子、寒衣を贈り　間う、わが西行いく日にして帰る　来たる時、儻(かりそめ)にも黄金の印を佩(はい)し(身に着ける)　蘇秦(そしん)(戦国時代の弁論家)を見て機に下らざること莫(なか)れ(してはいけない)と」。妻子が、栄達を夢みて時宜(じぎ)(よい機会)を失する事がないよう無事で帰ってほしいと言っていたのに、無念の想いが伝わってくる。

※この使節の水夫ら４人は、弘安２年８月高麗に逃げ帰り、杜世忠らの斬首情報を元国に齎した。報告を聞いた元宮廷は憤激し、諸将はすぐに日本討つべしと息巻いた。

【至元１２年(建治元年・1275)２月、礼部侍郎杜世忠・兵部侍郎何文著・計議官撒魯丁を遣わし、また書を送ったがまだ報告がない。至元１７年(弘安３年)２月、日本は国使杜世忠らを殺した。洪茶丘は自ら兵を率いて討たん事を請うた。】(中国正史日本伝２)

藤沢市片瀬龍口寺・奥の岩窟に杜世忠（とせいちゅう）らが入牢洞　　瀧の口刑場跡（江ノ島電鉄絵の島駅下車）

龍口寺　《文永８年９月１３日、日蓮大聖人は『立正安国論』の諫言により、幕府に捕らえられこの刑場で処刑の瞬間、満月の光が飛び込み、執行人は目がくらみ、聖人を斬ることができなかった。》とある。

志賀島の主戦場説明について

《「文永の役」から７年後の弘安４年７月、元軍は再び博多湾に来寇したが、今回は博多湾岸には堅固な石塁を築いており、元軍襲来に対し、防禦体制が完成されていたので、元軍は博多湾岸の上陸を諦め、６月６日志賀島（Ｐ98 地図）周辺に船団を集結して博多上陸の準備を開始した。これに対して幕府軍の一部は、６日夜から７日朝にかけて、小舟に乗って敵船に夜間攻撃をかけ、敵将を討取り、又は捕虜にするなど相当な損害を与えた。しかし、その後の志賀島は主戦場となり、一部上陸した敵軍との激闘が繰り返された。》とある。（休暇村志賀島観光より）

博多湾に浮かぶ志賀島（しかのしま）は、

福岡市東区に属する島で、海の中道と陸続きとなる。江戸時代に「漢委奴國王（かんのわのなのこくおう）」の金印が発見された有名な島で、６世紀「那津官家（なのつみやけ）」（食料を保管する官家）設置している。博多には迎賓館である鴻臚館（こうろかん）（外交及び海外交易施設）が連立していた地域ともなっている。

志賀島の全景・対岸福岡市博多区・ネット画像より

志賀島の激戦場を見る

志賀島の蒙古塚・古くは「首切り塚」と呼ばれた　　平成１７年整備された

火焔塚・敵国降伏の祈祷を行った所

志賀島へは海の中道がある（「しかのしま資料館」より）

火焔塚（大雨の中、カメラ撮影、画面が光るのは雨粒です）　《高野山の高僧一行は、不動尊の像を奉持して、敵軍包囲の志賀島に来り、山の中複にその像を安置して、一心に敵国降伏の大祈祷をした。元軍が敗走の後、高野帰山に際し、不動尊の火焔の部分を、この地に残しておいたので、その後、小祀を建ててこれを祀り、火焔塚と呼ぶようになった。》とある。

元軍の第2回目の日本侵攻の行動　クビライの２回目日本侵攻計画の裏には、先陣東路軍が博多を占領し、後発の江南軍１０余万の兵士たちが博多に駐留して現地に留まり、農業開拓をする目標の意志があったと思われる。この考察は『クビライの挑戦・下』杉山正明著で述べている。それには先ず博多に橋頭保を築く事、屯田兵方式の作戦計画を実行し、農機具や穀物種子などを積み込んで来たという。江南軍の１０万余の兵士は、移民軍のような軍隊であったのではなかったか。この移民船団については、

４部Ｐ126－127 で述べる。　先陣の東路軍は、単独で博多の日本軍を撃破する余裕の前哨戦であったが、いざ上陸を開始すると、７年前の博多湾の湾岸線違い、波打ち際に石防塁の壁が立ち塞いでいた。石築地が延々と築かれ、即ち「元寇防塁」で、防塁の効果は抜群で、元軍は上陸することができず、防備の薄い志賀島に６月６日、元軍は上陸、志賀島を占拠、周辺の海上に軍船の停泊場所した。

東路軍の将の墓誌(管軍上百戸・張成の墓誌)　「元敦武校尉管軍上百戸張成墓碑銘」【(至元）十八年、樞密院檄君、仍管新附□□（軍百？）率所統、堦千戸岳公琇、往征倭、四月□（發？）合浦登海州、以六月六日至倭之志賀島、夜将半、賊兵□□來襲、君與所部據艦戦、至暁、賊舟廻退、八日、賊遵陸復來、君率纏弓弩、先登岸迎敵、奪占其□要、賊弗能前、日晡、賊軍復集、又返敗之、明日、倭大會兵來戦、君統所部、入陣奮戦、賊不能□（支？）殺傷過□（當？）賊敗去。」】(池内宏『元寇の新研究』東洋文庫 1931 年 229 頁より)

※張成の墓碑銘は大正１４年岩間徳也氏が遼東半島の金州城外で発見した元の管軍上百戸張成の墓碑銘である。

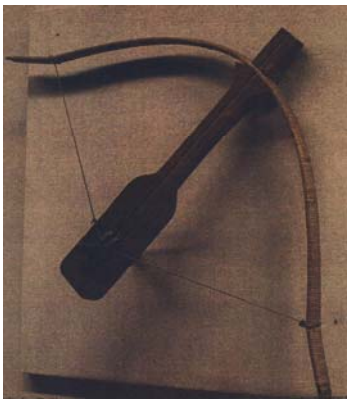
元敦武校尉管軍上百戸張成墓碑銘　　背面・『元寇の新研究』池内宏著より

「元敦武校尉管軍上百戸張成墓碑銘」至元 18 年(1281)によれば、《この日の夜半、日本軍の一部の武士たちが東路軍の軍船に夜襲を行い、張成らは軍船から応戦した。やがて夜が明けると日本軍は引揚げていった》更に、《6 月 8 日午前 10 時頃、日本軍は軍勢

を２手に分け、海路と海の中道の陸路の両面から志賀島の東路軍に対して総攻撃を敢行した。海の中道を通って陸路から東路軍に攻め入った日本軍に対して、張成らは弩(ど)兵(おおゆみ・石弓より威力)を率いて軍船から降りて応戦。東路軍の司令官で東征都元帥の洪茶丘は馬を捨てて敗走していたが、日本軍の追撃を受け危うく討ち死にする寸前まで追い込まれた。しかし、管軍上百戸(軍の位)の王某の軍勢が、洪茶丘に追撃していた日本軍の側面に攻撃を仕掛け、日本兵を 50 人ほど打ち取ったため追撃していた日本軍は退き洪茶丘は僅かに逃れることができたらしい。》と。

河野通有は石弓による傷を負う　この時、海路から東路軍を攻撃した伊予の御家人、河野通有は元兵の石弓によって負傷を受けながらも、太刀を持って元軍船に斬り込み、元軍将校を生け捕るという手柄を立てた(『絵詞』後編絵十一・第１部Ｐ21―22 参照)。又、海上からの攻撃には肥後の御家人、竹崎季長や肥前御家人、福田兼重・福田兼光父子らも加わり活躍した。(『絵詞』絵十四Ｐ25)この志賀島の戦いで元軍は大敗し、志賀島を放棄、壱岐島へと後退し江南軍の到着を待つのである。

志賀島の戦い『絵詞』絵十四



弩(いしゆみ)=石弓はこの様な武器か(ウィキペディア)

主戦場は鷹島に移る　同年６月末頃、江南軍の本隊が平戸島周辺に続々と到着し、２７日、東路軍と平戸島沖東２０㎞にある鷹島で遂に合流を果たした。鷹島(南北１３㎞×東西５㎞)が「弘安の役」の最後の戦場となったのである。この鷹島に元軍は、６月２５日(新暦７月１２日)から７月３０日(同８月１７日)まで、１カ月間留まり、この間の６月２９日から７月２日に、東路軍と江南軍の一部は合流して壱岐島を襲い、激戦の末、日本守備隊を壊滅させた。疑問であるのは、７月の初めから７月末の２５日余り日数があるが、この間、元軍は日本軍を攻撃していない。それは何故か、それはお

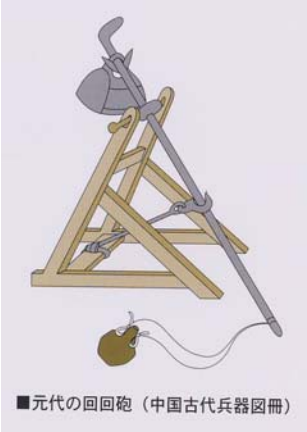
そらく、鷹島周辺の内海に元軍艦隊を５km余りの大船団の勇壮の姿を、日本幕府に見せつけて、「暗に日本政府に降伏を迫った」等の説も浮上し、十分考えられることである。

矢田一嘯「蒙古の大軍団に挑む」

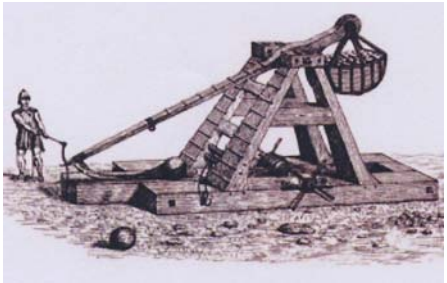
明治２９年　靖国神社　遊就館

鷹島の戦闘は続き、日本軍は小舟で武士団の夜襲の斬り込みをかけていた。しかし、敵戦艦は300屯を超す大型船、船上には自慢の回々砲(投石機)や石弓があり、この砲から直径１５cmほどの石の玉が飛んで来て、日本軍の船は散々に破られとても恐れられていた。

現在でも、回々砲の石の玉が、鷹島の湾内で多数見つかっている。東路軍の管軍上百戸・張成の墓誌(『元敦武校尉管軍上百戸張成墓碑銘』)によれば、「将軍、打可島(鷹島)に至ると賊船再び集まる。応援して明け方に至る」と。日本軍の攻撃は執拗で、夜襲を何度も仕掛け、陸上ではゲリラ戦に持ち込んだ。特に地理に明るい郷党・松浦党は当時、玄界灘の覇権を握る程の実力武士集団で、その活躍は複雑な海島の入江を利用して不意に斬り込み隊等で襲撃仕掛け、元軍はしばしば海上に逃げる始末となっていた。日本軍の抵抗に手ずっていたが、それでも圧倒的な元軍の戦力は健在であった。



石玉 15 cm内外・河野通有投は投石機で負傷している。「回回砲」について鷹島埋蔵センター、Ｐ113～114 で再度述べる



回々砲(『鷹島』鷹島歴史民俗資料館)　　**投石機・中世に発明された遠心力で石を遠投する**

元軍の覆没　『壱岐国勝本町史』(現壱岐市)より。６月６日～１３日まで戦闘は続き、東路軍は博多湾に出現し、志賀島を中心に海上・陸上の戦闘は両軍に多くの死傷者を出していた。東路軍の一部は長門沿岸(関門海峡)まで襲来したが、上陸できず、その上、暑気による疫病も発生、大きな痛手を受けた東路軍は、単独で博多侵入を断念し壱岐島へ撤退した。舞台は壱岐島へ移されたが、鎮西奉行少弐経資の指揮のもとに

玄界灘を漕ぎ渡り、壱岐の瀬戸浦・芦辺浦附近の洋上一帯で、激しい攻防戦を展開した。６月２９日～７月２日にかけての事である。これが第二次壱岐合戦である。

現在、残っている軍忠状の史料によれば、この合戦に参加したものは、主に博多湾沿岸警備陣のうち、薩摩勢(箱崎地区)・筑前勢(博多地区)・肥前勢(姪浜地区)・肥後勢(生ノ松原地区)の御家人らである。中でも薩摩国の島津久経の弟長久・比志嶋時範・河田盛貞など肥前国御家人の活躍が目立ち、特に松浦党諸の名が多いのは注目に値する。

第二次壱岐合戦後、壱岐にいた東路軍と江南軍の先発隊は、合流するため平戸の付近の海に移動し、総兵力１４万・兵船４千４百艘恐るべき大兵団は、平戸周辺の島や海に埋めつくされた。

７月下旬、敵の大軍は行動を起こし７月２７日、鷹島を占領した元軍を、時を移さず日本軍はこれに攻撃をかけ、昼夜を問わぬ激闘が展開となる。衆寡敵せず、日本軍は撃退されたが、敵にも相当の損害を与え、その後、敵は陣容の立て直し、博多湾に殺到する機会を窺っていた。その矢先、７月３０日(新暦８月２２日)から翌閏７月１日(新暦８月２３日)にかけて大暴風雨が鷹島通過し、元戦艦の大部分が覆没して多くの将兵が溺死した。主に江南軍はこの暴風に打ち砕だかれたのである。

※ 元側の事情を『元史』からその記載をみる

【『元史』には、至元１８年正月(弘安４年・1281)范文虎および忻都・洪茶丘らに命じ、１０万人を率いて日本を征討させた。５月、日本行省の参議裴(はい)国佐らがいうには、「本省の右丞相阿剌罕・范文虎・李左丞が、さきに忻都・洪茶丘の軍(東路軍４万余)と会し、その後進入して日本を征する事を定めた。また風水が不便なために、ふたたび相談して、一岐島(壱岐)で会合するよう定めた。同年３月、日本の船が、風水のために漂って至るものがあり、その水工に地図を画かした。因って見るに、大宰府の西に近く平壺島(平戸)というものがある。周囲はみな水(海上)で、軍船を停泊することができる。この島の防備は不備である。もし直ちに行ってこの島に拠(よ)り、船に乗って一岐(壱岐)に往き、忻都・洪茶丘を呼び、来り会して進み討つなら利となるだろう」と。６月、阿剌罕は病のため出発できず、阿塔海に命じ代って軍事を統率させた。(江南軍の経緯となる)。

８月、諸将はまだ敵を見ないのに、全師(全軍) を喪(うしな)って還ってきた。そこでいうには、「日本に至り、大宰府を攻めようとした。暴風が舟を難破させた。なお戦うことを

相談しょうとしたが、万戸(軍隊の管轄・運糧司る)厲徳彪・招討王国佐・水手総管陸文政らは、節制を聴かず、すぐさま逃れ去った。本省(日本行省)は、余軍を載せて合浦に至り、散遺(ちりぢりばらばら)して故郷に還らせた」と。それからまもなく、敗卒于闐が脱れ帰っていうには、「官軍は６月に海に入り、７月に壺島(平壺・平戸)に至り、五竜山(鷹島か平戸東)に移った。

８月１日、風が舟を難破させた(日本暦閏７月１日、暴風)。５日、文虎らの諸将は、おのおのみずから堅好の船を択んでこれに乗り、士卒十万余を山下(五竜山下)に棄てた。みんなで相談し、張百戸という者を推して主帥(部隊長)となし、これを張総管と号し、その約束を聴いた。それから木を伐って舟を作り、還ろうとした。

７日、日本人が来り戦い、ことごとく死に、余りの２、３万は、そのために虜となって連れ去られた。

９日、八角島(博多)に至り、悉く蒙古・高麗・漢人を殺し、新付軍(江南軍)は唐人であるといい、殺さずにこれを奴(奴僕)とした。闐の輩はこれである」と。思うに、行省の官は、事を相談してたがいに下らず、故にみな軍を棄てて帰ったのである。また久しくたって、莫青と呉万五もまた逃れ還った。十万の衆で、還ることができた者は三人（于闐・莫青・呉万五)だけであった。】　※(『元史』中国正史日本伝(２)・石原道博編訳・現代語訳より)

【『高麗史』は、［家 142］忠烈王７年（弘安４年・1281）６月壬申(8 日)、金方慶等、日本と戦い、斬首するもの３百余級。翌日、複び戦い、［洪］茶丘の軍敗績す。范文虎も亦た戦艦３千５百艘、蛮軍１０余万を以て来るに、会々大風に値い、蛮軍皆な溺死す。】『高麗史日本伝・朝鮮正史日本伝２（上）武田幸男編訳より。
《元軍の帰らざる者、約１０万、高麗軍の帰らざるもの７千余人】と伝える。鷹島には、海から陸に上がった相当数の敗残兵がいたようだ。

『癸辛雑識続集』　南宋時代末期から元時代初め、周密が撰述(185 冊)した。この書に、
《至元１８年、大軍、日本を征し、船軍すでに竹島(鷹島)に至る。その大宰府と甚だ近し。まさに号令して翌日、路をわかちて入らんとす。夜半、たちまち大風にわかにおこり、諸船、みな撃撞して砕く。４千余舟、存するところ２百のみ、全軍１５万、帰らざる者５分の1、凡そ糧を棄つること５０万石・・・・云々。蓋し天意なり。》と。

大型台風が元船を転覆覆没させた　『八幡愚童訓』に《「去る七月晦日夜半より、乾風(いぬいかぜ)おびただしく吹きぬ。閏七月一日なり。賊船ことごとく漂蕩(ひょうとう)して海に沈みぬ」》と。

閏７月１日(新暦８月１７日)の午前零時頃から吹き始めた猛烈な北西の風によって元船は一夜にして残らず沈没したとなっている。思いもよらない天の助けを受け、後世これを「神風」と呼び、それは現代で云う超大型台風のようであった。そして、海上は凪いだ。捕虜の元軍兵士処刑場は鷹島の中川の畔(ほとり)にあり、現在慰霊碑が建っている。捕らえられた元軍の兵士たちの内、九州の守護たちに配分されたりしたが、船大工や鍛冶工等の技術者は日本に帰化したようである。

現代の科学の目で推測した学者がいる(九州大学の故・真鍋大覚博士)。数千年の屋久島の杉の大木に、台風通過の強風でいくつもの異常な瘢痕(はんこん)(年輪)を残している。その痕跡をパソコンで解析した結果、弘安４年の台風は、中心気圧 950 ヘクトパスカル、最大風速 55、6ｍの分析結果が出た。推定では九州北部にあっては、風速 30ｍの強風が 20 時間吹き荒れた。元船 4000 余艘の大船団が密集して停泊していたようで、軍船は玉突状態に陥り、船体は壊れ、兵員は波に呑み込まれ、元軍 10 数万余人が一夜にして壊滅したということに想定されると、述べられている。

松浦党発祥の地と松浦水軍の兜の説明は　《松浦市は松浦党発祥の地です。松浦党とは、中世に海を舞台に活躍した武士団のことで、嵯峨天皇の子孫にあたる渡辺久がその始祖といわれています。久は、1096 年にこの地方を治めるため御厨検校(みくりやけんぎょう)(長官)としてこの地に赴き、松浦市・今福町に梶谷(かじや)城を築き、「松浦」の姓を名乗り定住した。

松浦党はその活動を万里の海に求め交易による大陸文化の摂取に務めていた。松浦党の活躍はめざましく、源平の舟合戦などにも参戦した。元軍が北部九州に攻め寄せた文永の役と弘安の役では、目の前の湾内に集結した元軍の軍船に奇襲戦法などで応戦しました。私達は郷土のロマンと先達者の活躍を誇りにしその想いをこの兜に託し、松浦市の存在を示すものであります。このモニュメントの参考にした兜は武将用のも

松浦水軍の兜・松浦市

ので、実際の舟戦(ふないくさ)では鍬形(左右の角)は取りはずしていた。八幡とは、全国の八幡神社の祭神であり、武家では軍神として崇め、武運長久の祈りを込めて、押し立てて舟戦に臨んだのである。松浦市観光協会　》と、説明があった。

『田平町郷誌』より見る松浦党の戦後　幕府にとって戦後に於ける大きな問題は「論功行賞」であった。国内合戦と異なり「文永の役」「弘安の役」には戦功者に与える没収地がなく、幕府は武士団の要求に応じることができなかった。「松浦党」は、松浦沿岸から壱岐にかけての海戦は、戦場の範囲が広く、その上自己の領域沿岸の防衛とみられたため、一つ一つの戦功を認知証言に困難をきたしていた。

石築地にも出役し、防衛態勢にも積極的に協力した松浦党であったが、弘安８年、幕府は九州御家人たちに、戦功申し立てに鎌倉へ来ることを禁止し、それでも納得できない松浦一族から３人が鎌倉へ参上した記録が残されている。その後、恩賞を受けた記録は、「比志島文書」に斑島(まだらしま)又太郎が「神崎庄配分　残１０町」とあり、恩賞に与ったのは一人だけであり、松浦党の不満は強く残った。

『壱岐国郷土史』(現壱岐市)に、壱岐の荒廃に再建する手段もなく、捨て石的な存在にされた壱岐・松浦地方の豪族や島民は、本土への移住がみられた。そこで活路を見出したのは、積極的に敵の元・高麗を偵察して、対馬・壱岐・鷹島の自衛武装船団が軍事的行動を始め、それが次第に発展して常習的な海賊に転化して行のである。この海賊を中国からは「北虜南倭(ほくりょなんわ)」、朝鮮からは「三島倭寇(わこう)」と恐れられた壱岐・松浦衆の海賊集団「倭寇」と呼ばれた集団である。倭寇の目標行動は、主に朝鮮半島・中国沿岸の年貢米輸送にあたる船と沿岸の倉庫を襲い、米の略奪が目的となっていた。その後、松浦党と五島(ごとう)衆たちの主導権をめぐる騒乱は１６世紀まで続くのである。

※この倭寇の流れをくむ１７世紀の中国福建省生まれの明人鄭成功(ていせいこう)がいる。父は中国人、母は日本人の混血英雄「鄭成功」がいる。清の攻撃に明を擁護し、台湾に渡り明朝の復興運動を行う。人形浄瑠璃「国姓爺合戦」は彼が主人公であり、この地域のオランダ軍を打ち払ったことから、台湾・中国では民族の英雄となっている。

鄭成功の廟は平戸市川内町にある

中川激戦場(首除き)　鷹島の美里免中川原から船唐津免の淵の内までの中川多々良の谷と呼ばれる谷川に、元軍兵士の捕虜を斬首し、首を積み重ねた所とされている。この付近は鷹島掃蕩戦に捕虜となった元軍兵が斬首された所とされ「くびのき」という地名になる。その他、元兵が海に逃げた「逃げの浦」、元兵を追いだした「追い出し」、戦闘で血に染まった「血田」、日本軍の相図の烽火を「火焚き場」の地名が残る。

鷹島・首除き・中川激戦場地の碑

鷹島の元寇関係地図

碑文「前方一帯を船原、中川原と称し、此処を首除と呼ぶ。１２８１年夏弘安４年の役に上陸した元軍を迎撃壊滅させた最大の激戦地で、首除は敵首を積重ね、東側の中川は血刀を洗った処、因みに平戸松浦氏１４代答公はこの戦いに重傷を負い、８代松浦久公の開山した広久山萬福寺において自決されたと伝えられている」とある。

首塚・蒙古塚は各地にある　今津浜にある蒙古塚・元軍兵士の首を埋めた首塚と呼ばれる塚がある

戦後の異国征伐計画が2度目の計画も立ち切れとなる　１度目は「文永の役」後に立案されて立ち切れとなったが、今度は「弘安の役」の直後に２度目の異国征伐計画立案されていた事が、東大寺文書から明らかになっている。弘安４年８月、鎌倉幕府は少弐氏と大友氏を大将軍とし、九州北部の御家人たちを動員して高麗征伐を命じた。この弘安の異国征伐の資料によると、九州の御家人に限らず、備中・中国地方の御家

人にも命じられた。六波羅探題は８月５日、幕命を受け、高麗征伐は８月２５日には延期となり準備の中止指示が出る。その後の資料はないが、六波羅探題には豊後国御家人に弘安の役で元軍を撃退したが安心せず警固を怠らないよう、指示は継続で出ている。弘安６年１２月、元が来年春にまた襲来するという情報に基づき、異国警固番役の薩摩国御家人に厳重な用心を命じている。正応２年(1289) ５月１４日、朝廷は奈良春日神社と奈良興福寺に、「蒙古の凶賊が今年日本を窺う疑いある」として祈祷を命じ、６月２５日には比叡山延暦寺に祈祷を命じている。翌正応３年４月２５日、朝廷は「近日、異国襲来の浮説」の情報があり、２２社に対して異国降伏の祈祷を命じている。

鎌倉幕府の衰亡　「弘安の役」から１３年後、クビライは没した。享年７９歳。一方、日本国に於いても弘安の役の翌年、日蓮が病没・享年６０歳。幕府の最高権力者、執権北条時宗も、弘安の役の３年後、ほどなく急逝、弱冠３４歳の若さであつた。時宗は元帝国に徹頭徹尾抗し、元帝国に敵対した情報源は、殆んど宋国経由のものであった。時宗は禅に帰依し、父時頼が宋の高僧、蘭渓道隆(らんけいどうりゅう)を招来した禅や禅僧に傾倒していた。蘭渓が没した後、大陸から無学祖元(むがくそげん)(円覚寺開祖)が来朝し、鎌倉の建長寺に入る。北条時宗は、禅の大悟を以て蒙古襲来の国難に毅然とした態度は、無学祖元の禅の影響が大きく、彼らの禅僧が齎す情報は頑固な「反元思想」となっていた。

神風の島・鷹島訪ねる

鷹島歴史民俗資料館前の内湾、鷹島は元寇殲滅の地で祖国防衛戦史に忘れられない島となる

平成１７年「鷹島海底遺跡内容確認探査」として、超高文解能海底地形探査により鷹島南岸海底の詳細な地形図を製作した。平成１８年からは松浦市・福島町・鷹島町

合併を機に調査区域を伊万里湾に広げて探査を実施している。 海底遺跡として、平成２３年１０月に伊万里湾鷹島の沖合約２００ｍで、水深２０ｍから２５ｍの海底を約１ｍ掘り下げた所から７３０年前の元軍船を発見した。平成２４年３月、３８４、０００㎡が国史跡「鷹島神崎遺跡」として指定されている

同所「海底遺跡・日本初の国史跡」の看板案内板となる　　写真は筆者 2016 年春

鷹島と水中考古学　弘安４年(1281)「弘安の役」では、伊万里湾ら集結した元の東路軍・江南軍合わせて戦艦４４００艘、兵士１４万人の大船団が鷹島沖を覆うった。やがて、７月３０日の夜半から強風が吹き出し、翌日にかけて大暴風雨が伊万里湾を襲った。元軍の戦艦は次々と沈没し、翌日には湾内の浦々には元軍の兵士の死体や船の残骸で埋め尽くされたと伝わる。船体破片から悲劇の軍船は江南軍だったのである。

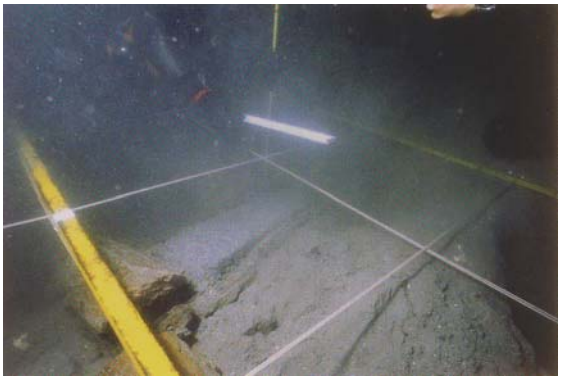
鷹島では、昭和５５年から３年間、文部省の科学研究費特定研究「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学」の一部として「水中考古学に関する基礎的研究」が進められることになった。その時、松浦党の研究者は伊万里出身の故古賀稔康氏によって、総括研究代表であった故江上波夫東京大学名誉教授に、この鷹島が紹介された。検討の結果、蒙古の大軍が襲来し台風を避けるために、ここ鷹島に避難し、その大半が水没したと伝えられる。

鷹島海底遺跡と元軍の水没した地域

ここ鷹島が研究実施の場と決定され、その結果、地元住民が海岸などから採取して保管していた遺物が教育委員会に提供され、

蒙古襲来に関わる遺物が、多数海底に残存する可能性が予測された。3 年間にわたる調査結果を受けて、長崎教育委員会は鷹島南岸一帯を「周知の遺蹟」の「鷹島海底遺跡」として遺跡台帳に登録した。鷹島町では、平成 4 年から平成 11 年まで、鷹島海底遺跡の浅海域の特徴を解明するために、潜水し目視での遺物の分布状況の調査を実施している。遺物の分布状況や神崎港周辺が蒙古襲来関係の遺物の発見に重要な地点であることが分かった。平成１２年から平成１７年まで国・県の補助を受け、海底調査区を設定し調査をしている。更に、平成 17 年度には「鷹島海底遺跡内容確認探査」として、超高分解能海底地形探査により鷹島南岸海底の明細な地形図を作成し、同時に高分解能地層探査により海底下の地層の状況を調査している。平成１８年度からは松浦市・福島町・鷹島町の合併を機に、調査区域を伊万里湾に広げて調査を実施している。尚、海底遺跡からの遺物が 4000 点以上出土している。

海底作業、水圧と空気圧を利用して土砂を吸い上げる



海底実測作業『鷹島』松浦市教育委員会より

元軍の鷹島の海から遺品があがる

如来座像・銅、高さ７７ｃｍ・元寇資料館より

元軍の銅印・「管軍総掴把印」（『元寇』岡本顕實著）

管軍総捆把印　昭和４９年、鷹島町の人が神崎海岸で貝掘り中に１個の印鑑らしきものを発見し、小屋にしまっていた。昭和５５年に始まった南岸海底から引揚げられる多くの遺物が「元寇」のものと知り、元寇に関わるものと考え、教育委員会に提出された。昭和５６年のことである。

印鑑は青銅製で、６、5㎝四方、厚さ 1、5㎝、つまみの高さム 4、4㎝、幅 3、1㎝、厚さ 1、2 ㎝、重さ７２６ｇ。紐と呼ぶつまみの右肩部には、漢字で「□軍□把□」と判読でき、左肩には「中書礼部　至元十四年九月造」という文字が刻まれている。至元十四年は西暦 1277 年、この印鑑については、中国に現存する同型の「管軍総把印」という例から、□の文字は、管・総・印と判読。文字はパスパ文字(八思巴文字・蒙古新字・元朝崩壊後は使われない)で、「管軍総把印」と刻まれていると、福岡大学佐々木猛教授によって解読された。「管軍総把印」とは元将校級はどの位なのか、「総把」とは、あまり位が高くなく、中級将校の持ち物となるらしい。

高麗仏・幕末期、漁網にかかって発見された。青銅座像、高麗軍の守り仏であったようである。鷹島の海底遺跡図(Ｐ108 参照)は元軍の遺品の出土域となる。

船材(海底遺物)　『鷹島』長崎県松浦市教育委員会・史料を要約で述べる。

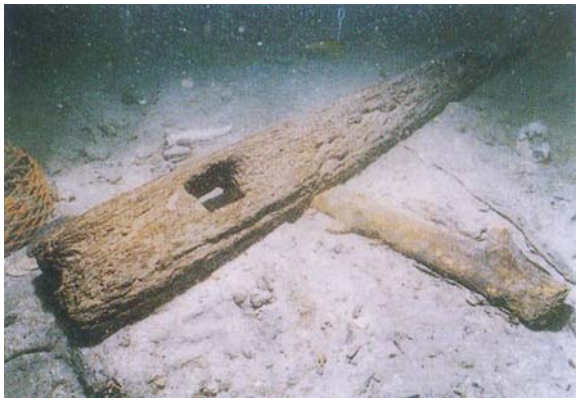
弘安４年(1281)、元軍は２手に分かれて襲来した。蒙古・高麗軍主体の東路軍と、南宋軍主体の江南軍は、その規模『高麗史』や『元史』に書かれた記録から推定すると、東路軍は軍船９００艘、将兵１４万人、江南軍は軍船３５００艘、将兵１０万人、合わせて４４００艘、将兵１４万人をこす大部隊であつた。元軍の艦隊編成は、千料舟(大型戦艦)、抜都魯軽疾舟(上陸用舟艇・Ｐ111 参照)、汲水小舟の３種類で、それぞれがほぼ同じ比率で構成されていたらしい。ある研究者によれば、蒙古軍の戦艦の大きさは、千料舟は 2 千トンを超す大型船で戦闘用というより、食料・将兵・軍馬・武器類等を運ぶ輸送船と推測している。又、ある研究者は、神崎海底から発見された大型木製碇(いかり)の大きさから推定して長さ４０ｍはあると推測している。これに対し、抜都魯軽疾舟は長さが１１ｍ程、動きが早く海戦用として使用されたものと推定。

この大船団は、旧暦７月３０日(現在の８月２３日頃)西北九州を襲った未曾有の大暴風雨によって壊滅的な損害を受けた。元・高麗の記録によれば、東路軍の生還率が７０％程であったのに比べ、江南軍の生還率は１０～２０％程度と記されている。

特に南宋軍についての被害は甚大であったことは事実である。これまでの発掘調査

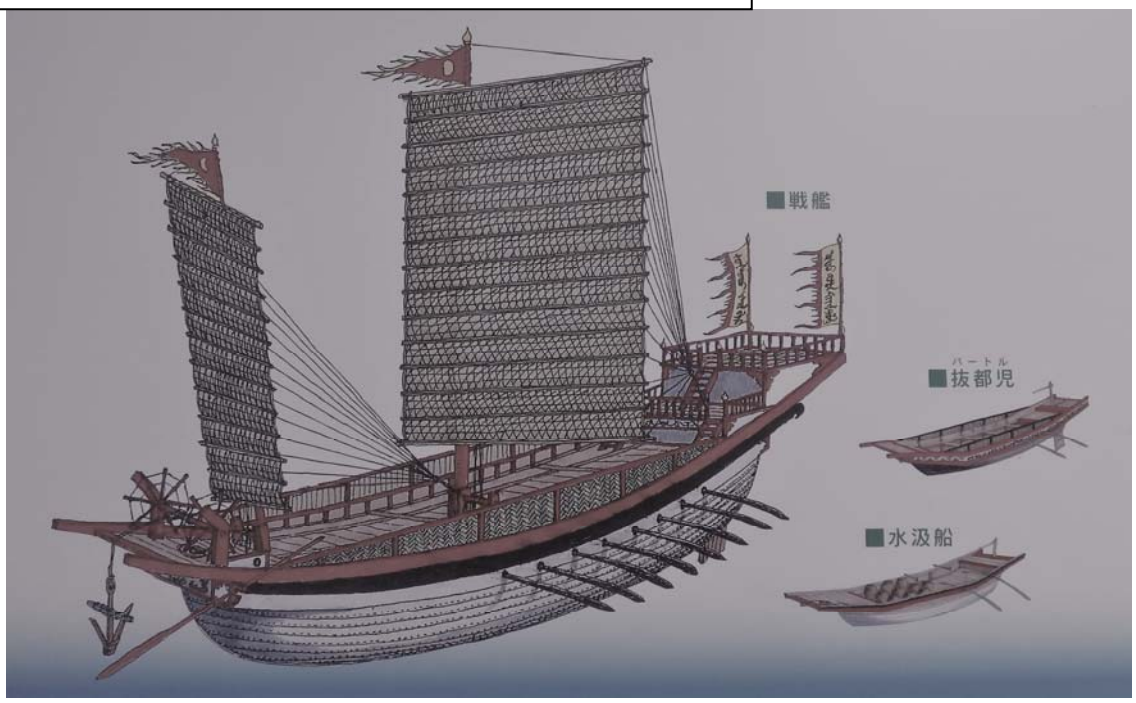
によって海底から発見された遺物は、中国産が多く、高麗産は数える程しか出土していない。出土遺物の量が生還率の差を示すという興味ある結果を示しているようである。海中に沈んだ木材は、フナクイムシによって跡形もなく食べられてしまうから、木材が７００年間も残ることは奇跡に近いことなである。平成６年に、大型の木製の椗=碇が発見された。暴風雨に備えるために、椗の爪を海底のシルト(沈泥)の中にがっちり食い込まれていた部分が虫害からまぬかれていた。

隔壁板の出土状況



船角材出土状況・『鷹島』松浦市教育委員会より

椗(碇)を見る・松浦市立鷹島埋蔵文化財ムセンターより



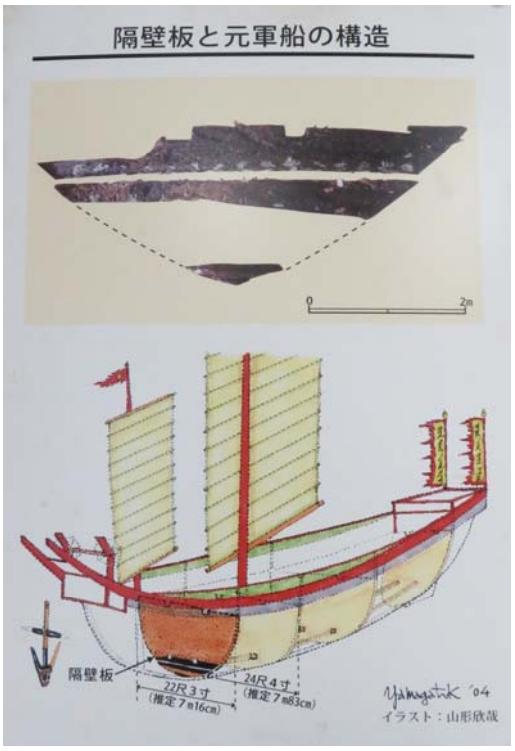
復元元軍の戦艦図　松浦市立鷹島歴史民俗資料館より

元軍戦艦　碇が７ｍから推定すると、船の幅が１０、７ｍ、全長４０ｍ、乗組員９０人となり、小型船・抜都児(バアトル・上陸用１８ｍ)・水汲船は１１ｍとなる。

元軍艦の碇石から船の大きさが推定

元の軍船碇・鷹島で引揚げられた最大級の碇。碇から推定すると、幅１０、７ｍ、全長４０ｍ内外。江南の軍船３５００艘、戦艦は１１５０艘、戦艦の乗組員約９０人、

元戦艦の碇



左側に碇と対比すると戦艦４０ｍ余となる

石弾の遺物　「玄武岩で、石の直径８～１５㎝程度、重量は８００ｇ～３ｋｇ程度、大きさによって数種類に分けられる。石弾は古くから中国の攻城兵器として登場した

抛石器の弾と考えられ、元の抛石器は「回回砲」と呼ばれ、テコの原理を応用し反動を利用して弾を遠方に飛ばす。抛石器の弾には陶製の炸裂弾があった。

これは火薬を使って飛ばすもので、導火線の点火によって敵陣で炸裂させ、その破片で敵を倒す。竹崎季長の「蒙古襲来絵詞」の中の「鉄砲」と呼ばれる兵器によく似ている。」と、館内の説明はあった。

火薬で発烈させる「てつはう」

８～１５ｃｍ程の玉の玄武岩等の石弾となる

マンジャーク=回回砲

南宋軍は、殿前副都指揮使の肩書をもつ范文虎の率いる南宋の水陸両軍は、南宋中央軍を中核とし、全南宋軍の中で精鋭部隊であった。襄樊(河北省襄陽市)を守る呂文煥(長江流域の軍人)は兵と民をよく励まし、籠城と抵抗を続けていた。ここに至り、クビライの軍事参謀は新兵器、カタパルト式の巨大投石機を使用にふみきった。

ペルシア語でマンジャニークと呼ばれ、元々中国方面にも小型の投石機はあった。振子式で降り飛ばす式や、シーソー式の跳ね飛ばす方式もあって、弾は石弾や火薬を詰め込んだ陶製の花火式弾丸もあった。

中国方面では、「回回砲」と呼ばれた。話は遡るが、元軍と南宋軍の戦いで、この巨大な新兵器を、至元１０年(1273・弘安の役の８年前)１月、先ず樊城(湖北省襄陽市)へと向けられ、城濠・外柵の北側に据え付け、マンジャニークから、次々と巨大な石弾が飛来し、樊城の角楼・外郭を打ち壊した。遂に張漢英が率いる樊城の守備兵は降伏、翌２月、全軍が降伏６年に及ぶ籠城であったが、回回砲の威力は絶大であった。

鷹島の海底より出土の石弾・「てつはう」の遺物を見ると、石玉や陶器の火薬の弾が使われていた事が分かる。『集史』(14 世紀初頭のラシードゥッディーンの編纂歴史書)には、

1258 年のフレグ軍によるバグダート攻めの際、周辺の山から石を集め投石機で飛ばして城壁に穴をあけた記述が残っている。

「てつはう」の破裂はナフサ(石油・火薬の意味も有り)を使い、石を綿で包、石油を浸して点火し、弾を飛ばすことが考えられる。「てつはう」は直径 15ｃｍ、陶製の球形の器に火薬を詰め爆裂されたもの、海底からの遺物の外部は貝殻形状であるが、Ｘ線ＣＴスキャナー調査によると、鉄片・陶器片様が詰められ、鉄片には鋳鉄が使用確認される。これ等の火薬の爆裂と同時に破砕・飛散して強い殺傷能力を高めた。元軍の日本遠征侵攻には「てつはう」を投入し、海戦で火薬の使用が裏付けられる。

（参考書籍『クビライの挑戦』杉山正明著・「モンゴル帝国と火薬兵器」向正樹著・同志社大学より）

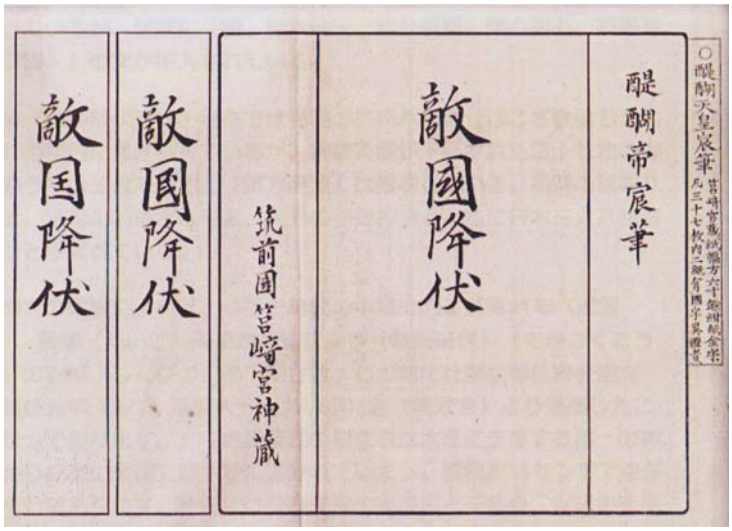
カタパルト式の巨大投石器を再現と実験したもの(Google より)

4部　追記

①神仏祈祷　②「蒙古帝国国書」はどの様に捉えるか　③竹崎季長の故郷東海郷を歩く
④伏敵編　⑤対馬郷土誌から見る　⑥矢田一嘯の「蒙古襲来絵図」を拝見する

①　神仏祈祷

文永５年正月、蒙古帝国より国書到来によって、我が国幕府・朝廷・一般民も、蒙古・高麗の威圧に蒼然となり、その処理方法の解決に苦慮したのである。この問題解決するには日本国中の大異変が起きる事を予想し、社寺の神力によって異国侵略を退け、敵国を降伏せしめようと神仏に祈願するものであった。この敵国降伏の祈祷は、朝廷も幕府も率先して、これに熱望を込めて寺社に祈願したのである。武力によって蒙古侵入を撃退するのは幕府の役目、朝廷は専ら寺社に異賊撃滅を神仏祈願したのである。博多湾箱崎浜に鎮座する「筥崎宮」の歴史を辿ってみれば、神社古伝は延喜２１年(921)に八幡大神の託宣(たくせん)(神のお告げ)があり、応神天皇を主祭神とし筑前大分(だいぶ)八幡宮より遷座(せんざ)し、外敵退散・武運長久の神として鎮座したと伝えられ、亀山上皇(1260－1274)が外敵退散を祈願し額は、現在でも桜門に敵国降伏額が掲げられている。

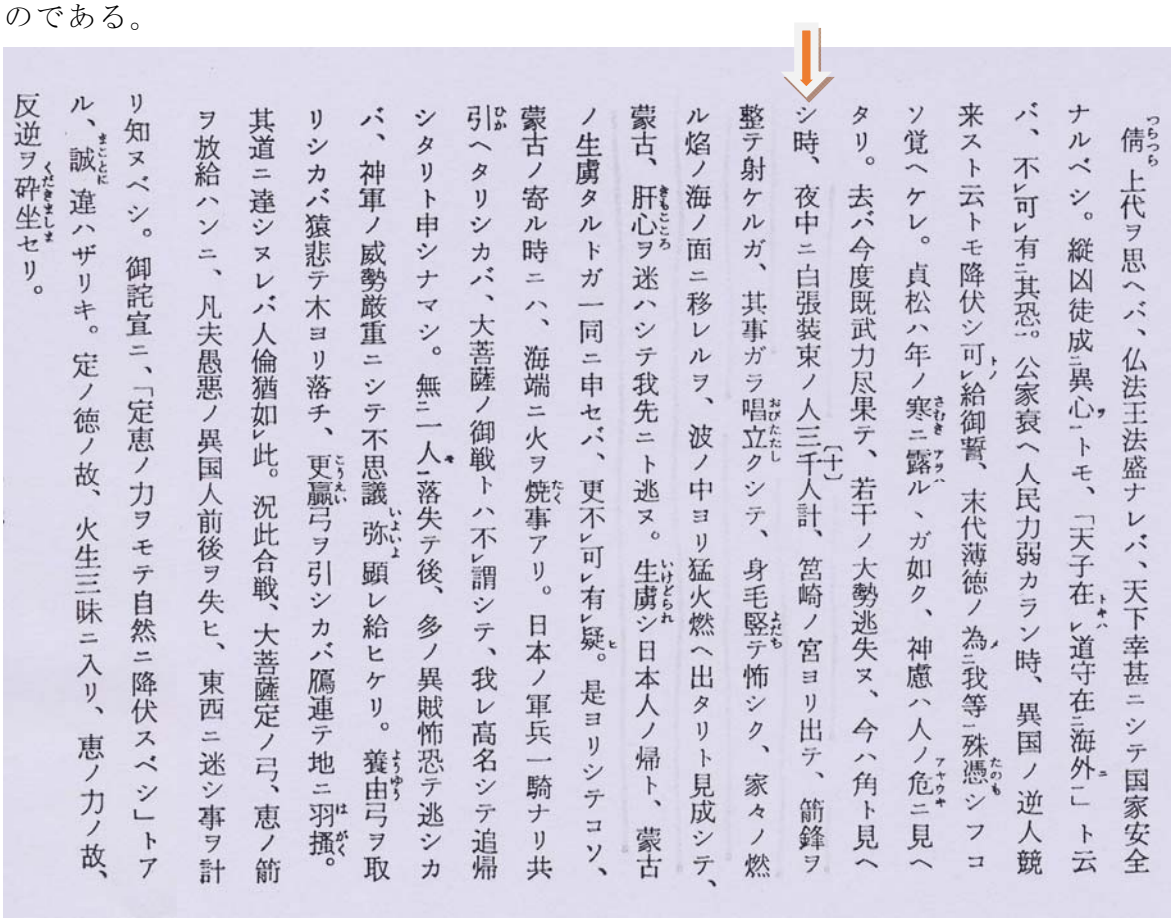


「敵國降伏」醍醐天皇が下賜された３７枚の御宸筆(しんぴつ)の内の３枚とされる。右は福岡の筥崎(はこざき)八幡宮の桜門に掲げられている。筥崎八幡宮は京都の石清水八幡宮・大分の宇佐神宮と共に日本三大八幡宮となる。

異体字　左側２字は、くにがまえの中に「民」と「王」の異体字となる。くにがまえ中に「民」を入れた「くに」と「王」を入れた「くに」の字が、そして、くにがまえの中に「戈(ほこ)」の字を入れた字と３つの「くに」があったようである。平安時代初期

に使い分けていたようである。（「ウィンベル教育研究所」より借用）

「敵國降伏」の真の意味は、武力によって敵を降伏させるのでなく、徳の力を以て導き、相手が自ら靡き降伏する「王道」と云いい、我が国の在り方を説いていると云われる。福本日南（明治・大正期の史論家）の名著『筑前志』の中で、「敵国降伏」の解釈は「敵國を降伏させるには徳に由る、王者の業なり。敵國を降伏させるには力に由る。覇者の事なり。「敵國降伏」しかる後、初めて神威の赫赫（照り輝く）、王者の蕩々（広く大きい）を看る」。又、国土の神仏が突然雷によって敵軍を撃ちのめす祈願の言葉となるのである。



倩上代ヲ思ヘバ、仏法王法盛ナレバ、天下幸甚ニシテ国家安全ナルベシ。縦凶徒成ニ異心一トモ、「天子在レ道守在ニ海外一」ト云バ、不レ可レ有ニ其恐一。公家衰ヘ人民力弱カラン時、異国ノ逆人競来スト云トモ降伏シ可レ給御誓、末代薄徳ノ為ニ我等一殊憑シフコソ覚ヘケレ。貞松ハ年ノ寒ニ露ル、ガ如ク、神慮ハ人ノ危ニ見ヘタリ。去バ今度既武力尽果テ、若干ノ大勢逃失ヌ、今ハ角ト見ヘシ時、夜中ニ白張装束ノ人三千人計、筥崎ノ宮ヨリ出テ、箭鋒ヲ整テ射ケルガ、其事ガラ唱立クシテ、身毛竪テ怖シク、家々ノ燃ル焔ノ海ノ面ニ移レルヲ、波ノ中ヨリ猛火燃ヘ出タリト見成シテ、蒙古、肝心ヲ迷ハシテ我先ニト逃ヌ。生虜シ日本人ノ帰ト、蒙古ノ生虜タルトガ一同ニ申セバ、更不レ可レ有レ疑。是ヨリシテコソ、蒙古ノ寄ル時ニハ、海端ニ火ヲ焼事アリ。日本ノ軍兵一騎ナリ共引ヘタリシカバ、大菩薩ノ御戦トハ不レ謂シテ、我レ高名シテ追帰シタリト申シナマシ。無二一人一落失テ後、多ノ異賊怖恐テ逃シカバ、神軍ノ威勢厳重ニシテ不思議弥顕レ給ヒケリ。養由弓ヲ取リシカバ猿悲テ木ヨリ落チ、更羸弓ヲ引シカバ鴈連テ地ニ羽搔。其道ニ達シヌレバ人倫猶如レ此。況此合戦、大菩薩定ノ弓、恵ノ箭ヲ放給ハンニ、凡夫愚悪ノ異国人前後ヲ失ヒ、東西ニ迷シ事ヲ計リ知ヌベシ。御詫宣ニ、「定恵ノ力ヲモテ自然ニ降伏スベシ」トアル、誠違ハザリキ。定ノ徳ノ故、火生三昧ニ入リ、恵ノ力ノ故、反逆ヲ砕坐セリ。

日本思想体系２０・寺社縁起『八幡愚童訓　甲』「八幡愚童訓　下　降伏事」

神々の戦い　亀山上皇（第 90 代天皇）や日蓮を始めとする異国降伏の神仏祈祷は、神国日本が異国を征伐する「神軍」による「神戦」と意識され、『縁起』の蒙古襲来に、《我神八幡大菩薩は大風の吹く直前に出陣された・・・突如黒雲の中から白羽の鏑矢が轟音と共に西に飛んだのがその験である。その後、戦場では眷属神（神の使者、その動物）の沙竭羅竜王（護法神・雨乞いの本尊）が青龍に化身して海中より蒙古の大将船を襲撃した。その刹那（仏語で瞬間）、神の来臨を伝える硫黄の香りが立ちこみ、異類異形の怪物が視界を遮り、驚きおののいた敵大将は敗走し、混乱した蒙古軍は水没した。文

永の時は、筥崎宮から真夜中に神の使いの白装束３千(十)人が現れ、蒙古軍に弓矢を射掛ける恐ろしい光景が現れた、海上の波間より猛火がほとばしり、蒙古軍は遁走した、蒙古を亡ぼし我が国を救ったのは「八幡大菩薩の加護」にほかならない》と。

『愚童訓』は「愚童」に石清水八幡と別宮の筥崎八幡による異国征伐の神意を説き聞かせる「軍忠状」(武勲の証拠とした文書)である。筑前青木荘の北野天神は蛇に化身して香椎宮に危機を伝えたと云う。神仏祈願を奨励したのは幕府も協力を願い、戦後その代償としての恩賞請求が各社寺から頻繁に提出されている。「神風」の概念は抽象的ではなかった。社寺の祈祷力・軍事力の裏づけを現実の中で定着してきた。(『軍事史学』通巻 152 号・「元寇軍事史の再検証」佐藤和夫著より)

神風説の起こり　(『蒙古襲来』黒田俊雄著・中央公論社 1984 より)

弘安４年(1281)６月、再度の元軍の襲来が伝えられた頃、京都を始め各地の社寺で異国降伏の祈願・祈祷が行われた。石清水八幡でも最勝王教・仁王教・法華経などの転読(教の一部を読んで全体を読む事に代える)、尊勝陀羅尼(功徳を説いた陀羅尼)の勤行(励む)などが行われた。特に霊験肝に銘じたのは、奈良西大寺の思円上人叡尊(真言律宗の僧)が舞殿で尊勝法(密教の修法)を修めたときの様子であった。齢８０を超えた高名な老僧は、閏７月１日、高座に上り、人に語るように神に祈った。

《異國襲来して貴賤男女すべて嘆き悲しんでおります。もはや神明もこの神國を滅ぼし、仏陀も見捨て給うたのでありましょうか。たとえ皇運は末になり政道に誠なくとも、他國よりは我が國、他人よりは我らを、神仏はどうして捨てさせ給うでしょう。昔、八幡大菩薩が、「天皇の勢い衰え人民の力が無くなったときこそ」と誓わせ給うたのも、実にいまこの時のためでありましょう。そもそも異國を我が國土と比べれば、蒙古は犬の子孫、日本は神の末裔、彼らは既に他國の財宝を奪い、人民の寿命を滅ぼす殺盗非道の輩であります。我が國が仏法を守り神祇を敬い、正理を好む國であるからには必ずや仏陀も知見(見て知る)したがい神々も照覧し給うはずであります》と祈る。

数珠も切れんばかりに揉みに揉むこと数時間、涙も袈裟をしぼるばかりの祈願に、参列の人々は首をたれ、随喜の心あまって、神もなどか納受なからんと思われた。と、そのとき、神厳微塵も動かぬ社殿に不思議や幡(柱にかけた飾り布・旗)がかすかにゆれ、ハッタと鳴った。ああこれぞ大菩薩の納受し給うた印よと人々の信仰はいよいよ深まったのである。数日後、栂尾(栂尾山高山寺)の大明神がある神子にのり移り、託宣があ

った。「思円上人の法味(仏法の妙味)により、神明は威光をまし、大風を吹かせて異賊を滅亡するであろうぞ」と、やがて西国から早馬が到着し閏７月１日、大風のため賊船は漂流・沈没し、すべて滅亡したとし報じた。思えば、かの幡がハッタと鳴ったのと、風が吹いたのと同時ではないか。栂尾大明神の託宣が早馬よりも先だった事から考えても、この大風こそ、八幡大菩薩が吹かせ給うた風でなくてなんであろう。人々はそう語り合っていよいよ信心を深めたのである。(※この時代は國を使用する)

神仏祈願による異国調伏　『蒙古襲来の研究』相沢二郎著より、文永・弘安期の神仏祈願はどのような状況にあったのか、要約で述べる。

諸社の奉幣　文永５年２月(第１回目の国書)、鎌倉幕府から朝廷に異国の国書に奏上し、１５日に院の御所に於いて評定が行われた。その結果２２日に二十二社、即ち伊勢神宮、石清水八幡宮(山城)、加茂下上社(山城)、松尾社(山城)、稲荷社(山城)、春日社(大和)、大原野社(山城)、大神社(大和)、石上社(大和)、大和社(大和)、広瀬社(大和)、竜田社(大和)、住吉社(摂津)、日吉社(近江)、梅宮社(山城)、吉田社(山城)、広田社(摂津)、祇園社(山城)、北野社(山城)、丹生社(大和)、貴布禰社(山城)に奉幣(ぬさ)され異国の事を祈請(加護を願う)した。これが朝廷に於ける御祈願の初見である。

七陵(歴代天皇墓)の奉幣　更に６月２２日、七陵に山陵使を発せられ、異国の事に関して御祈請された。この山陵使も特に国家の重事の起こった時に発せられるものでる。

後深草天皇清水八幡宮御幸　文永８年１０月２５日、後深草上皇は石清水八幡宮に御幸し、異国の事を御祈願された。

文永初度の異賊襲来、亀山上皇八陵に奉幣する　いよいよ文永１１年１０月初度の蒙古襲来があり、１０月２８日、鎮西から京都に報知があった。因って翌日院の御所に於いて評定を行われ、翌月２日、神功皇后の御陵以下八陵に勅使を立て、亀山上皇は諸山陵に御告文を奉せられ、異賊の降伏を御祈請された。次いで１１月７日には、１６社に奉幣、又異賊の降伏を御祈願された。(奉幣=幣(ぬさ)をたてまつる)

亀山上皇異賊の艦船漂没御報告の為石清水八幡宮御幸　これより先１０月２０日異

賊の艦船はこの夜颱風にあい悉く漂没したが、これに関する報知が京都に達したのは、１１月６日の事で、この我が軍の大勝利の報知があった後、その御報賽(御礼参り)の為に、８日亀山上皇は親しく石清水八幡宮に御幸し、我が軍の勝利を御祈謝した。

弘安4年再度蒙古襲来の時に於ける祈祷　弘安４年再度の蒙古襲来のあった年、諸社寺の僧侶が熱誠こめて異国降伏を祈請している。朝廷に於いて５月８日に２２社に奉幣した。４日に２２社に異賊降伏の御祈を致すように命令を発している。比叡山延暦寺に命じて、同日浄土寺の慈基(関白兼平の子息)をして山上四王院に於いて異国降伏の御祈として、大法法要(楽)を始行している。

亀山上皇御所の御祈祷に始まる　６月１８日、御祈祷として、一は上皇の御持仏堂に於いて心経３０万巻の転読が行われた。公卿殿上人、侍等がこれを分担し、一人転読する分は千二百巻と定められた。従って参加人員は実に２５０人の多数に達した。これに参加した人々が一時に転読を行うのではなく、時を定めて結番をして順次行った。かように諸人が順番に従って一昼夜中を通して転読を行ったのである。

関白鷹司家の盛大な祈祷　２０日には関白鷹司家の沙汰として行われた。その席に列した人々は、関白(鷹司)兼平、関白基忠、左近衛大将兼忠の一族、基忠兼忠の弟、天台座主であった浄土宗の慈基が加わり、前中納言平時経、前参議信輔以下家司たる諸大夫が相会している。その評議の案件は神事から仏事に及んだ。神事は次の如く。

諸社に千度並びに百度詣を致す事。山城の加茂社は百度詣、松尾社は百度詣、稲荷社は百度詣、大和春日社は千度詣、日吉社は百度詣、梅宮社百度詣、摂津の広田社は千度詣、祇園社は百度詣、北野社は千度詣、山城今宮の神明社は百度詣、梅田社は千度詣、京都東三条角明神は２千度詣、東山法成寺は千度詣、山城国の宇治離宮社は千度詣、河内国の平岡は千度詣、太詔戸社千度詣となっている。

次に仏事は次の如く。読教の事。先ず藤原氏の氏寺である興福寺に於いて大般若経一部、次に宗澄法師が最勝王教１２部、この評議の席に加わった浄土寺の慈基が、盛尊僧正と金光明経百部を分けて５０部、更に慈基が比叡山延暦寺の根本中堂に於いて、薬師教１２０巻、山城国の栂尾の高山寺に於いて華厳経一部、東大寺東南院の聖兼が金剛般若経２百巻、石清水八幡宮東宝塔院の院主竹良清が同教百巻、清水寺に観音経

千巻、行願寺に千手教百巻等々を鷹司家の内外の人々が読誦することを定めた。(略)

その他、鎌倉幕府の祈願は敵国降伏の祈願に熱誠を籠めた。文永１１年初度の蒙古襲来があった以前から諸社寺に祈願を依頼している。健治元年１０月２１日、戦勝報賽のために諸社に神領を寄進している。又、東国地方の常陸国鹿島社の祈祷に於いては、同宮が東国の武神であるところから、幕府から依頼を受けて、異国降伏の祈祷を幕府から依頼を受けて、祈祷を致した験しとして依頼者に送る巻数と申す一種の文書を幕府に送ったと見え、建治元年１１月２１日附けで、北条時宗から感謝する為の返事を受けている。

敵国降伏の祈祷　鎌倉幕府の蒙古襲来の不安事は、敵国襲来が文永弘安期で終わったものでなく、何時起こる問題として永い間、緊張していたことが分かる。敵国降伏の祈祷は朝廷を中心として、上下一般且全国に亘っていたもので、異賊の襲来を防禦する精神は続いていたのである。祈願の最終には亀山上皇が御身を以て、この未曾有の国難に殉ぜられ、畏くも大神宮に御祈念されたことが、結果として皇国の安泰に繋がり、その広大無辺の聖徳を奉ったことは、国民側から観れば精神的な安寧につながるものであった。かくて異賊が我国を侵寇する国難に当り、我が国は神国であり神の恵み依って発展してきた観念が、歴史を経て国民の間に温められていたのである。

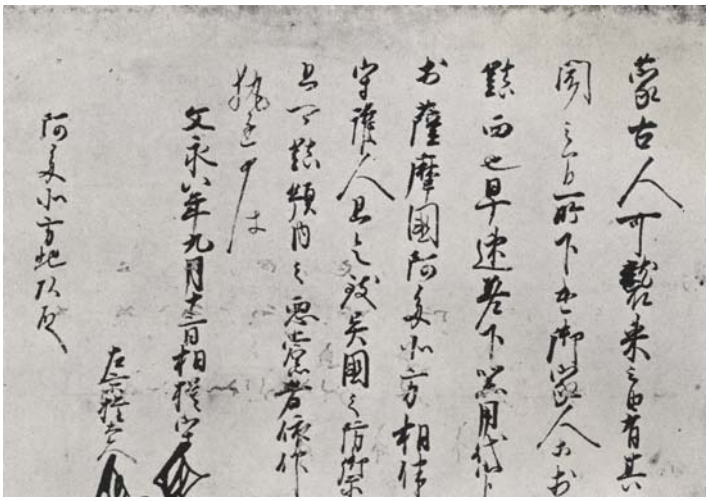
関東の諸社寺の祈願　幕府から報賽(祈願成就の御礼参拝)の為に神領の寄進を受けている。鶴岡八幡宮を始め、常陸国の鹿島神宮の神主も東国に於ける武神であることから、異国降伏の祈願を幕府から依頼があり、建治元年(1275)１１月２１日付けで、北条時宗より感謝の返事を受けている。

鎌倉の勝長寿院にて不動法を、明王院に於いて五大尊の護摩を下野国の日光山に於いて、同じく五大尊の護摩を各修している。勝長寿院(鎌倉市雪ノ下)などが幕府の尊崇を受けていた。北条時宗は自らの血書で金剛教・円覚経・般若経等を書写して国土の安寧と異国の降伏を祈願している。

無学祖元(臨済宗の僧侶、北条時宗の要請で来日)の法語に、「我此の日本国主師平朝臣、深心(深く仏に帰依)般若を学び、為に億兆の民を保す、外魔四海(四方の海)に来侵し、国を挙げて畏怖を生ず、朝臣勇猛を発し、血を出して大経を書す、金剛(教)と円覚と及び諸般若(教)と、精誠(まごころ)の感じるところ、敵血滄海(大海原)とかし、滄海渺

(果てしなく広がる)として際無し、皆是れ仏功徳重々の香水海なり、照見すれば浮幡刹諸仏宝蓮に坐し、常に是の如く経を説き、一句と一喝と、一字と一畫と、悉く化して神兵となること、猶、帝釈天と彼の修羅と戦うが如し、此の般若の力を念じて皆勝捷(勝こと)を獲たり、今此の日本国、亦仏の加被(願いをかなえる)を願う、諸聖神武の威、彼魔悉く降伏し、生霊皆安を得ん、皆仏の神力の故に、世世般若を学び、仏の威猛力に報ず」とある。(『蒙古襲来の研究』相田二郎著より)

香取神宮・異国降伏祈願本地仏



鎌倉幕府軍勢催促御教書

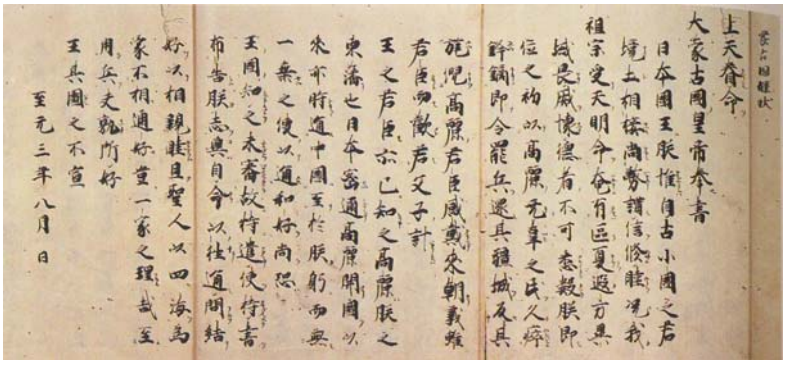
立正安国論(日蓮著)

当時異常に起きた自然災害は、他宗派の邪法によるものとして排除、それら諸宗を『法華経』に統一して正法を広める活動が国家安寧につながると、教えを説いた。

正嘉(1257－1259)年間には、地震・天候・飢餓・疫病が相次いだ。日蓮は相次ぐ災害の原因は、人々が正法である法華経を信じないで、浄土宗や悪い神々を信じ、その邪教を信じているからであると、他の宗派を排撃した。日蓮は正しい教えの法華経を広めれば、即ち「立正安国論」説であり、日本国民は平安を取戻し、安寧の国になると強く主張した。日蓮はこのまま浄土宗・邪教等を放置すれば内乱が起こり、外国からは侵略を受けて国が滅びると、説いたのである。この警告は「北条時輔の乱」(第５代執権北条時頼の長男の庶子、北条時宗の異母兄弟、２月騒動で時宗の命で誅殺された)「蒙古襲来」をも予言として解釈されたのである。

② 「蒙古皇帝国書」をどの様に捉えるか

至元３年(1266)８月付の書状は、【『元史』の「世祖本紀」の至元８月丁卯の条と「外夷伝」の日本の条に、それぞれ全文が載る】日本の年号は文永３年、蒙古では至元３年、高麗では元宗７年に当たる。



「蒙古國牒状」東大寺宗性筆　東大寺尊勝院所蔵（３部 P67 拡大有り）

上記の**「蒙古國牒状」**を見て、当時の朝廷・鎌倉幕府はどのような解釈と方策を考えていたのであろうか。その手掛かりを明治２６年に、『日本と蒙古の対戦・元寇』湯治丈雄（元寇記念碑建設運動者）・高橋熊太郎同著の要点を見る。尚、第４部⑥矢田一嘯編で湯治の国防思想に触れる。

「第六・蒙古主忽必烈大日本帝国を窺う事」《我が大日本帝国９０代、亀山天皇の御世にて文永弘安の際、蒙古主クビライ（書中は忽必烈なる）屡々使を遣わし、遂に１０余萬の大軍を起こして来寇せり、時に鎌倉幕府には惟泰康親王征夷大将軍の任に在って、北条時宗が執権たり（中略）。　蒙古主（フビライ）素より日本国を併呑し、属国にせんとの意を抱きおるものなり。（中略）遂に接伴起居舎潘阜という者が信使となり、蒙古・高麗両主よりの信書をもたらし、之を我が国に送りける。潘阜は筑前大宰府に到着し、蒙古及び高麗の書を大宰府に奉る。時に文永５年閏正月、大宰府其の書を鎌倉幕府の執権北条時宗に致す、時に鎌倉幕府には征夷大将軍惟泰康親王御年僅かに５歳にておわしければ、北条時宗執権職の身を以て、総ての政務を執行せり。・・・（略）》

「蒙古國牒状」の日本國側解釈の考え方を述べ、更に７章では次の如く述べる。

「第7・朝廷断然答書を拒み給う事」《蒙古及び高麗の信書、鎌倉を経て京師（京都）に達するや、公卿武家に於いて信使の首を斬るべきと、將た（それとも）答書に及ぶことになるか評議まちまちとなり、時に宮中に於いては、後嵯峨院五十の御賀（『安元御賀日記』）あるとのこととなって、蒙古の事、起る事を以て御賀も止めさせ給う、何事も討ち済ますようにして、祈祷御修法などが行われ、公家武家たちも、ただ此の騒ぎな

り。されども執権北条時宗は少しも驚かず、蒙古人野心を推し量り、我が大日本帝國を窺うに由り、辺海の防禦を最も厳重に守るべしと諸國に号令した。朝廷にては正二位行権大納言右近衛大将藤原通雅を勅使として、亀山天皇の御手自ら宣命を伊勢の太神宮に奉つり、又、山陵使(墓もり)を発して蒙古の事を、神功、天智、宇多、御三條、後白河、後鳥羽、土御門の七陵(陵墓)に告げさせた。以て國家の泰平敵國の降伏を祈祷させた。此の外、諸々の神社佛閣に於いて敵國降伏の祈祷修法を修めたのである。

かくして朝廷にては、諸公卿を召し、日夜いろいろと評議をつくしたが、信書は如何にも無礼にして、我が國を侮り、暗に我が國を窺い(服属)意志があり、この際、断然答書を出さないで使者を退け、決して通好しない意を示し、我が國の威武を表す最もふさわしいと、延議一決して、この趣を鎌倉幕府に伝え、高麗の使者を追い返す旨を命じる。この勅命の鎌倉幕府に至り、執権北条時宗は直に評定職を集め申すように、今度の蒙古の信書は、驕慢(おごり高ぶる)で無礼であり、殊に我が國を窺い(侵略)の欲心ありと考え、実に切歯し慷慨に我慢できないところなり。然るに只今、朝廷より下した御決議は、いとも賢く、且つ勇ましい次第である。速に大宰府へ申し遣し、一時も早く蒙古の使者を追い返すべきと、下知を伝えたところである》。と、湯治丈雄は、日清・日露前夜の外交危機の圧力に弁論を述べていたのである。

「蒙古國牒状」の現代での解釈は　最近での「蒙古國牒状」についての考察論文を、『モンゴル帝国の興亡』〈下〉杉山正明著 1996 年「世界経営の時代」から、「過剰な国書解釈」の頁から要約で述べる。

《書状は、「上天眷命、大蒙古国皇帝、書を日本国王に奉る」で始まり、文章は極めてシンプルで、文章を読み取れないことはない。特に、その後半でこう言う、「日本は、高麗に密邇(近い)す。開国以来、(写しでは「亦」の字ある)時に中国と通ず。朕(クビライ)が躬(みずから)に至っては、而るに一乗の使の以て和好を通ずることはなし。尚、恐らくは、国王これを知るもいまだ審かではない。故に、特に使を遣して書を持参した、朕の心(写しでは「志」)を布告する。冀わくば、自今以往、間を通じ、好みを結び、以てあい親睦したい。且は、聖人(クビライ)は、四海(世の中、世界)を以て家と為す。あい通好することは、豈(どうか)に一家の理ならん哉。兵を用いるに至っては、夫れ孰が好む事ではない。王、其れ之れを図れ。不宣(白)」と、実に穏やかな書面、一種の挨拶状に近い。1334 年に大元ウルス政府(大元大蒙古國)の肝煎りで編纂した

『元文類』(元初から 160 人の詩文)巻４１には、その５年前に作られた一大政書『経世大典』の「日本の条」に於いて、日本へ送られた全ての国書に共通の末尾の「不宣白」、すなわち「宣白せず」の語は、「これを臣とせざるなり」、臣下と見てはいない事を表す結語の表現という。(クビライの 1260 年陰暦四月七日付で南宋皇帝に宛てた雅文漢文による国書では、結語は「不宣白」となる。「不宣」でも「不宣白」でも現今の「不悉」とほぼ同じで「言い尽くしておりません」の意を表す書状の末尾に添える語となる)。

書状の冒頭の「書を日本国王に奉る」の語は、驚くほど低姿勢である。歴代の中華王朝が四周(周囲)の国々に発した「国書」と比べ、ここまでへりくだりは際立っている。従来、この書状が傲慢無礼で日本を恫喝している内容などと言われてきた。冒頭の「上天眷命」の書き出しに使う定型句「とこしえの天の力にて」の漢訳雅文版(雅語は詩語の古典の文体)にすぎない。

この語は大元ウルス治下では、文語体の漢文で記されたあらゆる詔勅で使用されている。「上天」(天帝)を頂く意を表すとはいえ、現実には「さて」「のぶれば」と同語で、「置字」(訓読しない漢字)に類する。これを以て おごり高ぶる史家の解釈は無理がある。漢文に慣れた京都の貴族たちや、鎌倉武士の中にも、かなり読める人がいたのではないか。この文面で驚いたり、恐怖に震えたなどと想像するのは小説の世界である。ただ一点、「兵を用いるに至っては、夫れ孰が好む所ならん」の語に付いては、やはり脅迫の意図を想定する意見もあるかもしれない。日本語の習慣である漢文読み下しでは、いかにも厳めしい雰囲気になるが、それは日本語でそうなのである。この国書を以て「モンゴルの脅し」と解釈するのは誤解である。その解釈で当時の状勢を考えれば、更に大きな誤解と過剰の解釈を生むことになる。

至元３年(1266)８月の時点では、クビライ政権は対アリクブケ戦(第４代皇帝モンケの死後、クビライと一番下の弟アリクブケの兄弟と大ハーン継承問題の内乱)対李璮戦(李璮が元朝に離反した事件)の事後処理最中であり、大都(冬の都)の造栄も未発表の段階。襄陽作戦開始の２年前の事、高麗状勢も元宗(第 24 第高麗王)が足元を固めだした程度にすぎない。日本遠征などは現実性を持たない客観状勢下であった。

クビライはようやくモンゴル皇帝となったばかりで、自分の政権の確立を知らせる狙いもあってか、日本に正式の使節と親書を出した事情ではなかったのか。何故日本は頑固な態度を取り続けたのか。穏当なやり方で正式な使節団を派遣し、皇帝の親書の形をとり、日本国に読み易い正式書簡であったに、モンゴルやクビライ政権はどの

様なものなのか、半島を含めた状勢は、外交を兼ねた敵情探査は幕府も朝廷は、その悩みは果てしない苦渋であったのであろう。日本のとった態度は、黙殺という結論であった。この時の日本の権威者たちは、内向きに円座して、互いに顔を見つめ合い、外側の情報を避けている様な印象を受ける。と杉山氏は述べている。

第2回日本遠征(弘安の役) の経緯についての考察　同著『クビライの挑戦』から

「７年後の歳月を経た日本遠征は、もはや南宋国は存在しなかった。その南宋国の海上戦力を手にした「大元ウルス」(大元イエケ・モンゴル・ウルス・略して大元ウルス)は、クビライは面目を一新し、蒲寿庚(アラブ系イスラム教徒・南宋時代の貿易商)が握る泉州湾では、大元ウルス政府による大型の海洋艦の新造が急造で進められていた。杭州の無血開城から５年、至元１８年(1281)、杭州の玄関口の慶元(明代の寧波)の港から、１０万人を乗せた３千５百余艘の大艦隊が出発した。モンゴルは江南接収後、わずか５年で１０万人の要員を一度に出港させる巨大な海軍力を備えていた。

大元政府は、旧南宋軍の潜在武力を各地の軍事活動に転用した。最も優秀な兵たちは、クビライの直属の近衛兵として選抜し、余兵は中央アジア戦線部隊に投入させた。選抜されない「弱兵」たちを、クビライ政権は海外進攻に向ける試みとして、第２回日本遠征軍、「江南軍」となっていた。その目的は入植の「移民」に近い「移民船団」のようであり、それは江南移民を乗せた大艦隊の作戦計画は、九州への植民軍ではなかったのか。そうであれば、通論にみるように、焦った東路軍が約束を破って、対馬・壱岐・博多を攻撃して苦戦を招いた説は、無理に理解する必要がなくなる。そして、鷹島の颶風で多くの犠牲者を出した江南軍の解釈は、南宋国での余剰人員、すなわち棄民政策(国家の切り捨て民)であったのではなかろうか。」と、鋭い指摘となっている。

日本侵攻後のクビライ政権　同著の続き、「クビライは本腰を入れて日本遠征に踏み出そうとしていた。国家の威信をかけた中央政府の企画が始まった。クビライ政権の最大の支援家、東方三王家(チンギス・カンの弟、ジョチ・カサル、カチウン、テムゲ・オッチギンの家系がクビライの元朝成立に貢献)が、タガチャルの孫ナヤン(テムゲ家の当主)が大反乱を起こし、クビライ政権は最大の危機を迎え、東北アジア全域が戦場となった。日本へ振り向ける部隊をこれらに向けざるを得なくなっていた。そして、５年に及ぶ大争乱の後、クビライはその後１年余りで没した。その後、今度はカイドゥ(中央

アジアのオゴデイ家)がクビライの孫の成宗テムル政権(世祖の第２代の大カアン)に挑戦した。その余波は1310年代にまで及んだ。３度目の日本への蒙古襲来を阻止したのは、モンゴル帝国内での君主同士による血筋の政権争いの嵐の結果であった」。

日宋貿易から日元貿易について　(『モンゴル襲来の衝撃』佐伯弘次著・『クビライの挑戦・モンゴル海上帝国への道』杉山正明著より参考にして)

日本と元との関係は、２回の元の日本侵攻により、最悪の関係が続いたと考えられるが、実際はそうならなかった。日本と元との関係は、一方で戦争状態でありながら、一方では極めて親密な日元貿易と文化交流が交わされていたのである。蒙古帝国の襲来は異例の事件であったが、日元の交流の背後にあるのは、日本人よる中国文化「モノと文化」の憧れであった。日宋貿易は南宋の終末期にも続行されていた。モンゴルの南宋攻撃の1260年代以降にも、南宋の往来が知られており、禅僧の日本への往来は、貿易船に便乗することから、貿易船の往来が分かるのである。

北条時宗は「蘭渓道隆(らんけいどうりゅう)」が弘安元年(1267)７月に没すると、蘭渓に代わる名僧を捜させ、その結果、弘安２年に中国から「無学祖元(むがくそげん)」が来朝して北条時宗の禅僧の師として大きな影響を与えている。

健治３年(1277)６月、大宰府の交易商から幕府へ至急報が入り、「宋朝が滅亡し、蒙古が統治しているので、今春、宋に渡った商船が交易することができず、急いで帰って来た」との報告がなされた。元側の史料によると、「同年、日本商人が元に金(きん)を持ってきて、銅銭との交易を求めて来た」元はこれを許可している。翌弘安元年１１月に、「元は日本人との交易を認めた」。同２年、日本商船４艘が日本向けの市舶司(しはくし)(海上貿易関係の事務を司る官庁)が置かれていた慶元(ニンポー)の港口にやって来た。「元はその交易も許した」。日元貿易は日宋貿易の延長上として開始されていたのである。

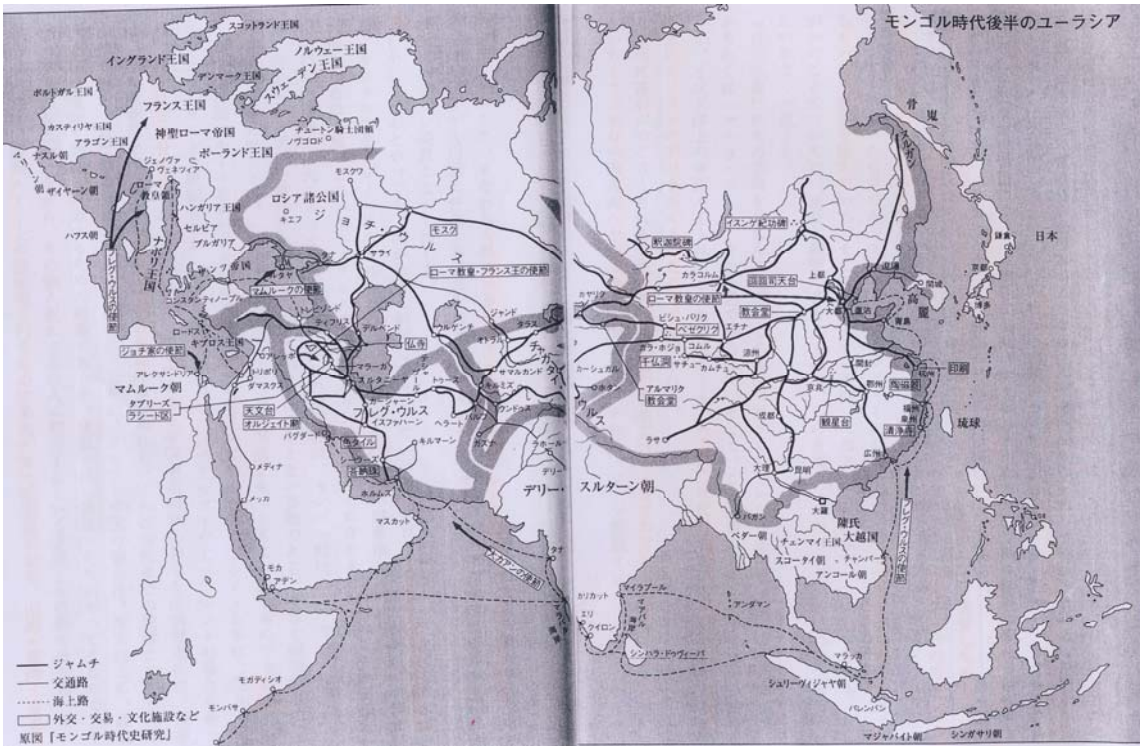
日本人の想像するクビライ像は、騎馬軍団の古典的な掠奪(りゃくだつ)国家に思えるが、蒙古帝国は、創業者チンギス・カンの時代より、イラン系のムスリム商業たちの隊商(キャラバン)を組んで、中央アジア・イラン方面から通商団の名の基に交易を行っていた。この「ムスリム商業団」とクビライは運命共同体の関係が強くあったのである。

その彼等の交易活動の名の基に、「大元ウルス」のための敵国地に赴き、内情調査や後方の攪乱工作等の調査活動を「ムスリム商業団」行っていた。経済交易行動とスパイ活動を併合していた。故にモンゴル国政権の降伏勧告や交渉調停使節にも「ムスリ

ム商人団」は加わっていた。西側のユーラシア大陸の国々を服属侵攻には、「大元ウルス」はムスリム商人たちの後を追って行く事によって、大元モンゴル国は大帝国になって行く歴史を持っていた。これ等の「大元交易経済圏」は「弘安の役」時代には、ユーラシア大陸の交易路は既に完成していた。

クビライが中国を手中に治めてからは、次の経済活動は海路による国際貿易を目指し、海路に貿易の重点を置いた。東の海路は地図で見るように、杭州・泉州・ジャワ・インド・イラン・ペルシャ湾まで海路交易は完成と発展をしていた。この時期のクビライの野心は続き、更に日本との経済活動貿易の拡大目的があった事は明らかである。

日本国はこの時期、貨幣を製造していなかったので、日本から「金」等を持ち込み、宋銭(銅銭は日本・東南アジア等で使用)に替えた。この時代、日本国の交換比率は前に述べた様に、「金」１に対し「銀」５となり、宋国においては「金」１に対し１３の比率であったため、日本は銅銭を中国に求めていたのである。そして、当時の交易物産は、中国からは銅銭・陶磁器・茶・書画・文具・薬品・香料・金紗・金襴・綾・綿であり、日本からは金・銀・硫黄・刀剣・扇・螺鈿・蒔絵等の交易となっていた。



「大元ウルス時代後半のユーラシア大陸図」クビライ政権当時は、世界最大の経済圏と産業力を持つ中国を併合、地域と文明国の枠を超えた大型の通商を奨励する自由経済政策国となっている。大元国への納税額は、わずか３、３％の商税・関税を支払えば誰が何処で商売展開が可能で、人種も民族も関係なく、近現代の世界の経済政策と類似している。(地図『クビライの挑戦』杉山正明著より)

【『元史・日本伝』至元１４年(1277・建治３年)、日本、商人を遣わし金を持して来り、銅銭と易(かえ)えしむ。これを許す。】※『元文類』巻９によれば、この時世祖はわざわざ詔諭し、商人をくるしめず柔遠の道を尽くせと言っている。元は日本再征の準備を進めていたが、日本商船の貿易を許している。一見矛盾と思われる事情はどう説明すべきか。世相の意図は、武力征服と貿易拡張の両政策が表裏にあったのであろう。その証拠に、【『元史』巻１０・世祖本紀の至元１５年(1278)１１月丁末の条に「沿海官司に詔諭し、日本国人の市舶を通ぜしむ」】とみえる。(『元史』日本伝・石原道博編訳より)

余話として「北からの蒙古襲来」について　この説は民族学者鳥居龍蔵が、1947 年『奴児干都司(ヌルガンとし)考』で、アムール河口から樺太島の元・明の１３～１４世紀前半の歴史論文を出された。この論文を基に榎森進氏が『アイヌ民族の歴史』の中で、「北からの蒙古襲来」の考察論文が発表された。その中に 1284 年から３年連続に、元軍と樺太アイヌの戦い「モンゴルの唐太(カラフト)侵攻」が存在したと云うものである。この民族衝突は「アイヌ族」が、ツングース系民族の「ウデヘ族」の領域に越境して毛皮を獲っていると、元朝政府に(樺太は元に従属)に訴え出たのである。この要請に応じて元軍(２千人位)が樺太アイヌ民の平定に乗り出した。しかし、アイヌ民の抵抗が思いのほか強く３年も抵抗は続いた。漸くアイヌ民はアムール河口ヌルガンの地に、仮府の「元朝ティル東征元帥府」へ毛皮の貢納する事で争いは終結した。この元軍事行動を「北からの蒙古襲来」と呼ぶ。関心のある方は拙書電子書籍で発信、『アムール下流域奴児干都司と永寧寺碑と先住民族たち』第１章Ｐ８～１１で「北からの蒙古襲来」ご覧ください。

③　竹崎季長の故郷海東郷を歩く

甲佐(こうさ)神社・熊本県上益城郡(かみましきぐん)甲佐町

甲佐神社に奉納されている「生の松原を出船」の絵図

甲佐大明神の願成桜の説明は　《甲佐神社は肥後国の二の宮として松橋や小川にいたる広大な社領を有していました。松橋の竹崎に住んでいた鎌倉幕府の御家人竹崎季長は、文永の役に出陣して手柄をたてましたが、恩賞からもれてしまいました。

くやしい思いをしているところへ、夢の中で「甲佐神社に参れ」と、お告げがあり、甲佐神社に参拝しました。そのとき、境内の東にある桜の枝に、甲佐大明神があらわれてお告げがあり、それにしたがって鎌倉に行き、直訴したところ幕府から海東の地を賜りました。弘安の役が終わり、季長は願いが成ったもの甲佐神社のおかげであると、『蒙古襲来絵詞』を作り甲佐神社に奉納しました。それから七百年がたち、復活を願い、願成桜を継ぐものとして若桜を植栽し、願いが成就する場にしました。》とある。

甲佐神社に「生の松原を出船する季長」の絵図ある　この絵図の場面に、「暴風に遭い被害を受けた敵船を攻撃するために出船している場面である。季長には兵船がなく困っているところに、肥後の守護代の安達盛宗の大船がやって来て、季長主従は強引に大船に乗り込んだ。しかし大船は船足が遅く、季長は近づいた肥後の武将の船に一人乗り換えた。」と甲佐神社の奉納絵巻に説明がある。この絵図は『絵詞』後巻の絵十四となり、注意して見て欲しいのは、水夫(水手・かこ)の漕ぎ方である。

『絵詞』の後巻の絵十四、船の水夫の「漕き方」は、カヌーの漕ぎ方(進行方向に顔を向ける)となっている。甲佐神社に奉納されている『絵巻』後巻絵十五は、ボートの漕ぎ方(進行方向後ろ向き)となっている。７００年前の合戦現場を誰も見た人はいない訳であるが、船足の長時間速度を保つためには、ボートの漕ぎ方の方が優位と思われる。沖縄等のハーリー競技はカヌーの漕ぎ方となるが、当時の合戦兵船を想定すれば、ボートの漕ぎ方になるのではないかと思う。『蒙古襲来』服部英雄著は、蒙古襲来の海上戦では、兵船の漕ぎ方はボートの漕ぎ方が正解になると述べている。

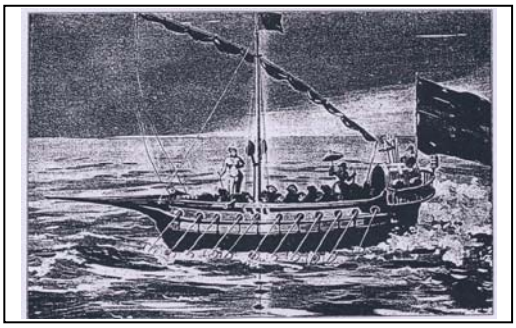
後巻・絵十四の船の漕き方・(カヌー漕ぎ方)

同・絵十五の船の漕ぎ方・(ボート漕ぎ方)

熊野速玉大社御船祭の舟の漕ぎ方を見る　舟(船)の漕ぎ方について色々考えて見たが、当時の海上合戦現場を見た訳でないので飽くまでも推測に過ぎない。或る日、たまたまBSテレビ放映で、熊野速玉大社の祭礼行事の「御船祭」(毎年10月16日)を見る事ができた。その**熊野権現来臨の祭**は、速玉大社の「熊野１２所権現」と称される複数の神々を祀られている。本祭礼はその中でも主祭神である、速玉大神(いざなぎのみこと)と夫須美大神(いざなみのみこと)に対しての祭りで、宗教民俗学的な解釈に従えば、常世から来た神霊が熊野川を遡上して御舟島(熊野川の中島)に鎮座した後、乙基河原を経て新宮に遷座したという熊野権現来臨の有様を再現する祭りである。熊野速玉大社は『古事記』『日本書記』に、名草戸畔(神武東征と戦った人物)を誅した後、神倭伊波礼毘古命(神武天皇)の一行は熊野神邑に至り天盤盾に登る。後、一行を道案内した八咫烏が熊野三山に祀られている。(ウイキペディア・新宮市観光協会より)

左は９隻の早船が先を争って御船島を廻る船渡御神事　　**右は鳥之石楠船神(神が乗る船)**

右は和歌山県の熊野速玉神社貴祖谷社から新宮へ還御(天皇)の時に、鵜殿諸手船が神船を先導した様子を再現したのが速玉大社御船祭となる。左の写真は９組の船競争(ボート式)となり、右は神事の漕ぎ方(カヌー式)となる。『蒙古襲来絵巻』を描いた絵師は、右の神事の漕ぎ方を見ていた事になる。因って絵師はこの神事の漕ぎ方を採用したと思われる。絵十四の描いた水夫の漕ぎ方が間違っているとはいえない。

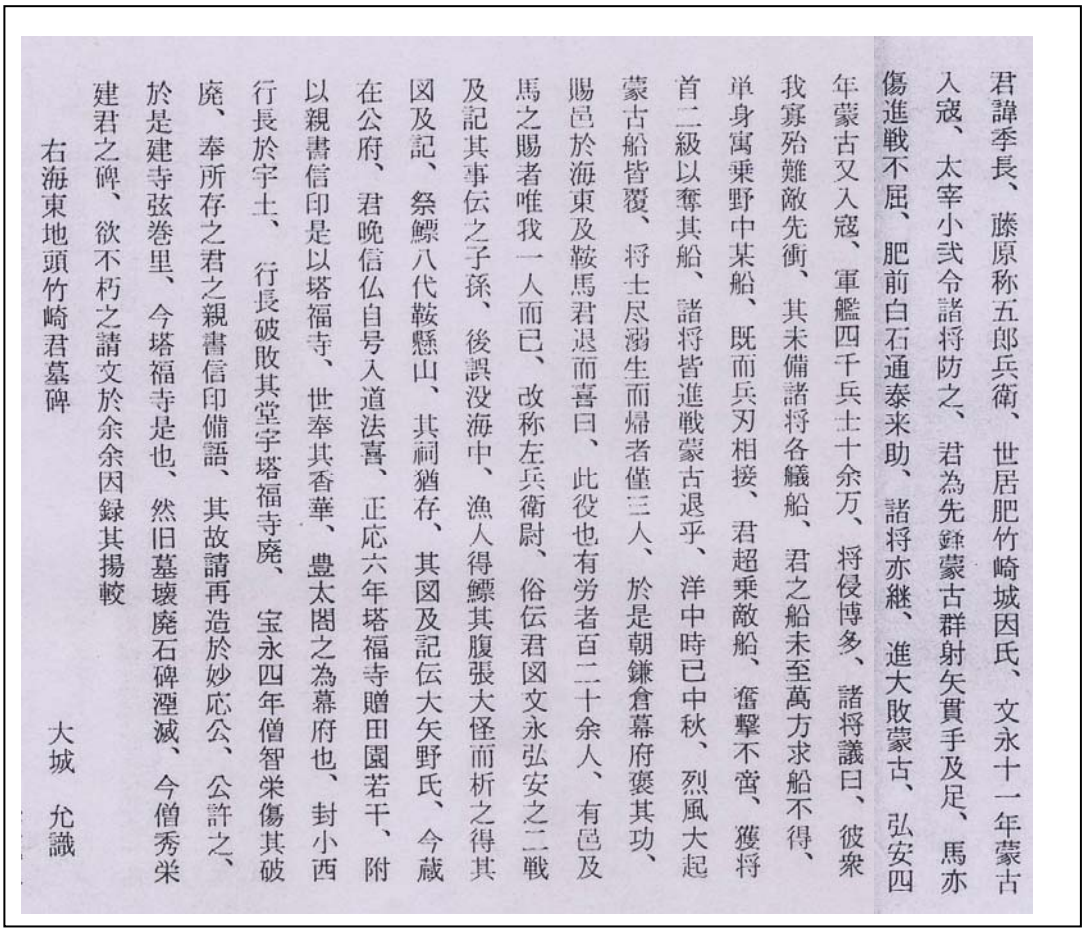


右の絵図は『海國史談』足立栗園述・明治38年と、『日欧交通起源史』菅菊太郎著と明治30年の書籍に載っている絵図である。絵図の題名は「日本國発見時代に使用されたる葡萄牙(人)飛脚船」とある。この船の漕ぎ方は、進行方向

後ろ向きの漕ぎ方となっている。1543 年、ポルトガル人は日本へ鉄砲を伝えている。

竹崎季長墳墓の発見　『竹崎城・城跡調査と竹崎季長』(熊本県)昭和５０年より。

現在、北海東平原に竹崎季長の墓と云われるものがあり、５万分１地形図にも記入されているほど著名である。しかし現地でその墳墓を一見すれば、五輪塔の残欠品一基分を寄せ集めて墓碑としてはいるものの、塔各部の形式は季長が死去したと推定される鎌倉末のものとは認めがたく、これを竹崎季長の墳墓とするには大きな疑問が残る。従来この墳墓はただ伝承だけによって季長の墓として奉祀(ほうし)され、顕彰されてきたものである。その中でさすがに下田曲水(きょくすい)(郷土史家・著書に『肥後人物史』大正 14 年)、だけはこの墓に疑問をもち、《北海東の地域に季長の墓碑というのがあり、「贈従三位竹崎季長之墓」と刻んだ新しい碑面を見るのであるが、遺憾ながら古への旧碑として認めるべき史料を見られず、又其の位置に関した確証は得られず、尚、後日の調査に期待を有する。》と述べている。(『熊本日々新聞』昭和 18 年 8 月 1 日・記事)

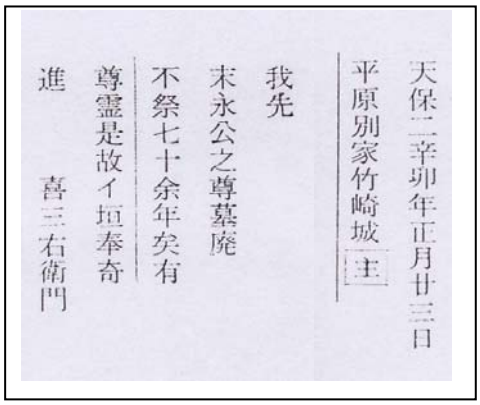

君諱季長、藤原称五郎兵衛、世居肥竹崎城因氏、文永十一年蒙古
入寇、太宰小弐令諸将防之、君為先鋒蒙古群射矢貫手及足、馬亦
傷進戦不屈、肥前白石通泰来助、諸将亦継、進大敗蒙古、弘安四
年蒙古又入寇、軍艦四千兵士十余万、将侵博多、諸将議曰、彼衆
我寡殆難敵先衝、其未備諸将各艤船、君之船未至萬方求船不得、
単身寓乗野中某船、既而兵刃相接、君超乗敵船、奮撃不啻、獲将
首二級以奪其船、諸将皆進戦蒙古退乎、洋中時已中秋、烈風大起
蒙古船皆覆、将士尽溺生而帰者僅三人、於是朝鎌倉幕府褒其功、
賜邑於海東及鞍馬君退而喜曰、此役也有労者百二十余人、有邑及
馬之賜者唯我一人而已、改称左兵衛尉、俗伝君図文永弘安之二戦
及記其事伝之子孫、後誤没海中、漁人得鰾其腹張大怪而析之得其
図及記、祭鰾八代鞍懸山、其祠猶存、其図及記伝大矢野氏、今蔵
在公府、君晩信仏自号入道法喜、正応六年塔福寺贈田園若干、附
以親書信印是以塔福寺、世奉其香華、豊太閤之為幕府也、封小西
行長於宇土、行長破敗其堂宇塔福寺廃、宝永四年僧智栄傷其破
廃、奉所存之君之親書信印備語、其故請再造於妙応公、公許之、
於是建寺弦巻里、今塔福寺是也、然旧墓壊廃石碑湮滅、今僧秀栄
建君之碑、欲不朽之請文於余余因録其揚較
右海東地頭竹崎君墓碑　　大城　允識

大城允識よる天保年間に竹崎季長の顕彰運動が行なわれていた碑文

筆者はこの墳墓は季長の墓と信ずるものではないが、伝承に従って墳墓発見の経緯

と顕彰の迹を辿ることにする。季長の墳墓を発見して顕彰の道を拓き、贈位運動の端緒をつくったのは湯地丈雄(佐賀の乱を平定、後福岡警察署長、国防の必要から元寇記念碑建設運動代表者)の前既に、大城允識よる天保年間に顕彰運動が行われている。その碑文は上記となるが、この碑文を作製した年代は明らかではないが、父壺梁(文化８年歿)のあと允(まこと)も時習館助教となるので、碑文作製は文政の頃か、あるいは天保初年かもしれない。この碑文は作製されただけで、石碑は建立されていない。

墳墓顕彰の第2は　天保２年の玉垣の修造である。現在の玉垣石柱１４本中５本は天保年間建立の石柱で、その内３本に次の銘があり下記の如くとなる。この銘文は九大所蔵山田安栄自筆稿本『伏敵篇』史料中の「竹崎五郎季長の墳墓発見」にも収録されている。(川添昭二「伏敵篇成立事情」『日本歴史』260 号より)。


天保二辛卯年正月廿三日
平原別家竹崎城主
我先
末永公之尊墓廃
不祭七十余年矣有
尊霊是故イ垣奉奇
進　喜三右衛門

余りにも奇態な文言であるので、原碑について精査し、「墳墓発見記」と対校してみた。銘文中竹崎の「崎」と「廃」は誤字であり季長を「末永」、寄進を「奇進」とかいている。また山田本では有尊霊の「有」を脱しているし、竹崎城主の「主」は、今は欠損している。この銘文には、「不祭七十余年」とある。天保２年より７０余年前は宝暦の頃で、その頃には祭祀が行われていたのであろう。(略)　ところでこの墳墓発見の月日が諸書によって異なる。角田政治は「明治２８年１１月７日之を蔓草煙の中に発見せり」とし、秋岡家所蔵湯地丈雄自筆覚書には「明治２８年１０月同村(東海村)にて予の考案に基き竹崎季長の墳墓発見せられ」と記されている。湯地の記憶が確実であり、明治２８年１１月１６日説を取るべきであろう。(中略)

明治天皇の九州巡幸に際し、５年６月２０日白川県庁において「絵詞」を展覧し、その後２３年１２月「絵詞」は大矢野家から献上された。この贈位が契機となって、熊本県教育委員会下益城郡支会によって、記念碑が海東村平原の季長墓所入口の岡の上に、大正６年１１月１０日徐幕式が挙行された。碑文は次の通り。

《文永十一年冬元兵三万余人我が筑紫に寇す、挙邦(挙国)愕然たり、竹崎五郎兵衛季長警を聞き、菊池武房託摩頼秀等諸将と共に馳せて急に趣き、以て虜兵を撃退す、弘安四年夏元兵十餘万艨艟海(蒙古軍艦)を蔽ひ(い)、大挙して再び来り侵す、季長復身を

挺して虜艦を襲ひ、将を斬り旗を搴し、虜兵懼れて終に岸に上る能わず、泊して海にあること数旬、会颱風の覆没する所となり、沿海長く虜侵を断つ、是れ固より皇威の然らしむる所なりと雖も、季長の果敢克く機先を制するにあらずんば、何を以て茲に至らむ、当時鎌倉幕府の重く之を賞せしもの亦宜なり、季長又文藻に富み、戦陣中画工に命じて其状を描かしめ、自ら其文を記す、世に之を季長の絵詞と謂ふ曾て明治天皇の叡覧を忝うし、せらるる日、其功を追録して従三位を贈り給ふ、天恩優厚渥季長地下に感涙せしや必せり、頃者郷人胥謀り、季長の故址に記念碑を建て、且其伝記を編す、願ふに是豈翅に季長の偉績を伝ふるが為のみならむや、

大正六年秋九月　　従う二位勲一等子爵　　清浦奎吾撰並書　》

竹崎季長の墓を訪ねる　熊本県宇城市小川町北東海平原公園内

竹崎季長墳墓公園内にある竹崎季長の墓

正面が竹崎季長墳墓公園、階段の奥に墓はある

平原公園内に元寇記念碑・東郷平八郎元帥の書で「弓箭のみちすすむをもてしゃうとす」即ち、「弓箭の道さきをもて定とす、ただ駆けよとて喚いて駆く」とある。右・公園から見る周囲の風景となる。

竹崎季長墳墓　平原公園の案内には次のように説明がある。

《竹崎季長は蒙古襲来絵巻の作者は、寛元３年(1245)肥後国竹崎で生まれ、竹崎を屋号としました。幼くして兵衛尉の官位につき左兵衛藤原季長と称し藤原を本姓とする名門の出といわれています。(略)蒙古合戦の戦功者は全国で１２０名にもおよびましたが、季長はただ一人幕府の下文をもって恩賞を給わり、海東郷地頭に任命されました。武将季長は地頭としても経綸(国を治める)の才を発揮し海東郷は急速な繁栄をしました。所謂貞永式目(訴訟等を定めた武家の法律・命令)と対比される箇条書の掟を置文・寄進状に定めて実践しました。この掟は鎌倉時代では珍しく、国の重要文化財(古文書)に指定され、季長の善政の証となりました。(略)　》と、ある。

『竹崎城』(熊本県)「近世以降の竹崎城跡と竹崎季長研究」森下　功著より。

竹崎城跡発見と顕彰・1　松橋町教育委員会の竹崎城跡の説明は下記のようにある。

《竹崎城跡は高城と呼ばれる標高７５ｍ余の小山塊が元寇の勇士竹崎左兵衛尉季長の居城跡と伝えられる。城跡の西側には標高６０ｍ余の江上寺山が立ふさがり、城の出丸的役割を果たしていたと思われる。城跡とそれとの間には、西北両側より二つの迫(谷)が入り込み、その出会った西及び南側斜面には二十段近い帯曲輪があり、よく中世城跡の特徴を表している。しかし県下の中世城の時代的変化にあてはめた場合、山城としては古い形態を備えた城ではあるが、その施工状況や形態から竹崎城の始源は南北朝から室町前期頃に求められる。すなわち竹崎城を直接季長と結びつけることは不可能である。もっとも数代後の季長の子孫によって古代の交通の要所であった竹崎に築城された可能性は大であるし、豊福城との関連も問われている。竹崎城を季長の居城とする伝承は竹崎季長の出生地としての竹崎に古来より存在した中世城跡を関連づけた後生人(恐らく江戸時代中期)の付会の説と思われる。竹崎季長の出自については、従来阿蘇家臣とか云われている外分からなかったが、「蒙古襲来絵詞書」の分析によって玉名郡旧

大正３年頃の竹崎城跡・樫山

南風筆・秋岡家所蔵

竹崎村出身の菊池氏一族の竹崎氏であろうとする説が有力である。

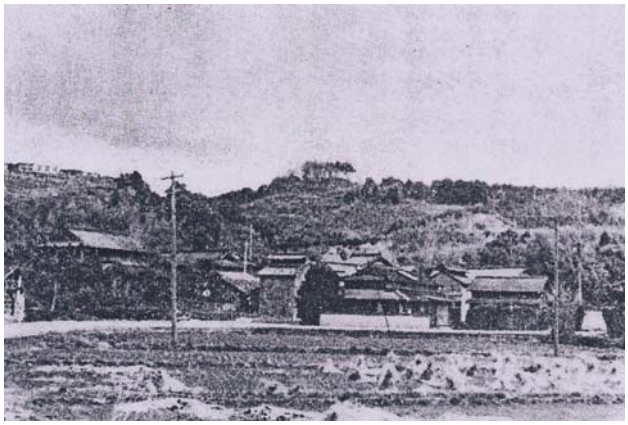
竹崎城跡発見と顕彰・2　《竹崎城跡とは、従来竹崎季長城跡と云われ、その記念碑が建設されている丘陵、即ち下益城郡松橋町竹崎の施設、清香園と谷を隔て、東側に相対する標高７４ｍの丘陵を指すものである。この城跡が竹崎季長のものであるか否かは、考古班によって検討されることであり、筆者は従来の伝承によって、これを竹崎城跡と呼ぶだけである。竹崎城跡に関する史料は、全て近世中期以降のものであるので、史料によって竹崎季長城跡を決定することは不可能である。また城跡に関する近世史料と、季長城跡伝承知とが相一致するか否かむも、疑問がもたれないでもないが、ここでは伝承に従っておくほかに方法がない。北島雪山の「国郡一統志」(寛文７年―1667 成立)、辛島道珠の「肥後名勝略記」(元禄２年―1689 成立)や井沢蟠竜の「肥後地志略」(宝永６年―1709 成立)などの地誌には古城跡が載せられているが、竹崎城跡は記されていない。また古城跡に関する辛島道珠の「肥後古城主考」、水足屏山の「肥後国陳跡略志」や森本一端の古「古城主記」にも竹崎城の記載は見られない。竹崎城跡についての最初の記録は、木山某の「蒙古襲来記」で、成瀬久敬の「肥後国志草稿」(享保 13 年―1728 成立)に引用されている。即ち同書益城郡下に次の記載がある。

《**竹崎城跡**　蒙古襲来記云木山氏編集蒙古襲来防戦記文永年中蒙古ノ大軍襲ノ時、肥後国住人竹崎五郎兵衛季長生二十二歳、帥兵出陣、蒙古ノ大軍ト戦フ、蒙疵コト数ケ所、甚軍功ヲ抽テ、且蒙古ノ大船ニ乗移、蒙古二人ヲ討捕、季長カ姉婿三井三郎資長モ高名有、依之永仁元年二月御下文且御馬ヲ賜ルト云云同書云、季長益城郡竹崎村ニ城ヲ築テ居之、其城迹于今在ト記セリ、此城迹、未考之　》と、ある。

これによると、木山某は「蒙古襲来記」または「蒙古襲来防戦記」とよばれる著書に於いて、竹崎季長の軍功を述べ、その居城についても記しており、竹崎城跡に関する史料としては、最初のものである。この木山氏とは如何なる人物であるか、またその著述年代は何時のことか。季長の居城について「其城迹于今在」と記していることから、肥後人または肥後を知悉した人物と見られる。肥後人にして木山氏なら、すぐに想起されるのは木山紹宅である。紹宅は益城郡木山城主として武人であるが、文筆に堪能で蓮歌に長じ、「赤井城之記」などの著作もあり、本書の著述があっても不自然ではない。一方引用文中の竹崎季長に関する記事は、『絵詞』によるものであることは明白である。一般に『絵詞』が世に広まるのは、寛政５年(1793)尾州家より細川家を通

じて借用申込があった以後とされるが、「蒙古襲来記」の著者木山氏は、それよりはるか前に『絵詞』を見ていたことになる。周知のとおり『絵詞』は早く名和氏の手に移り、天正の頃には名和氏から大矢野氏へ贈られ、改竄(かいざん)の跡さえ残っているので、これらの段階で、これを見た人があったことも十分考えられる。若し木山紹宅が見ていたとすれば、『絵詞』が名和氏の基にあったときであろう。

大矢野氏へ移った後なら、紹宅(じょうたく)またはその子などよりも天草在住の木山氏が見たとするのが順当である。天草の木山氏なら紹宅の一族である木山弾正があるが、これは天正１６年に滅ぼされ、その子孫は薩摩に住んだと云われる。弾正の一族のほかには本戸(本渡)大庄屋木山氏があるが、これらはあくまで想像だけである。(以下略)　》



竹崎城跡遠景・『竹崎城』熊本県文化財保護協会より

竹崎城の記念碑

(『竹崎城・城跡調査と竹崎季長』熊本県文化財保護協会・同文化財調査報告・第 17 集より)

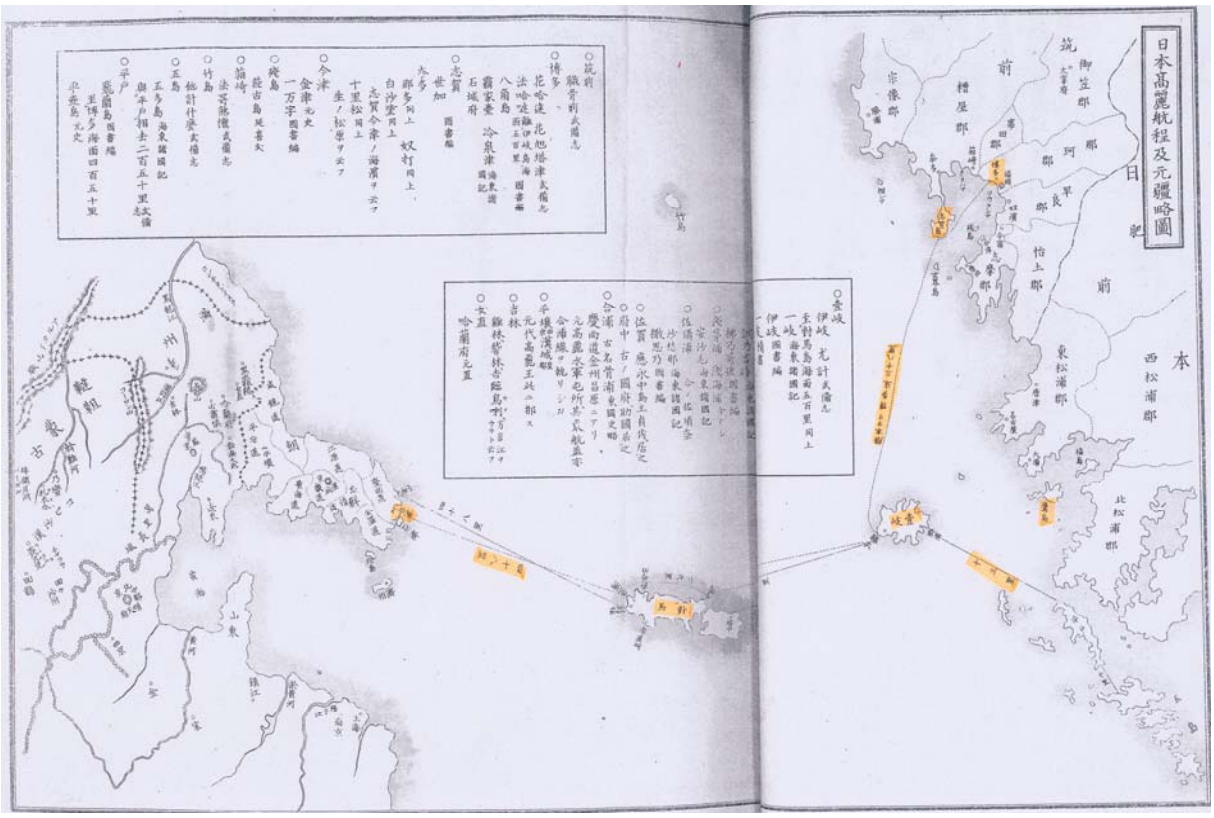
④『伏敵編』

『伏敵編(ふせてきへん)』明治２４年、重野安繹(やすつぐ)の監修、山田安栄編纂・刊行した蒙古襲来関係資料集。山田安栄(あんえい)(1852－1922)編纂した蒙古襲来関係の資料集となる。この『伏敵編』の書籍発刊は、「元寇記念碑」の建設(福岡市)を促(うなが)す意図があったようで、日本に於いて明治２４年頃は清国との緊張関係が高まった時期と重なる。明治２７年に勃発する日清戦争の理論武装のための書籍でもあったと云われる。

日本高麗航程及元疆略図・下記図参照

『伏敵編』では合浦から対馬までの距離は４８里(192 km)とあるが、朝鮮半島から対馬までの直線距離にして４９、５kmと出ている。合浦から対馬の小茂田浜までは、８０余kmほど距離である。『蒙古襲来』服部英雄著・「第２章文永１１年・冬の戦い」で、

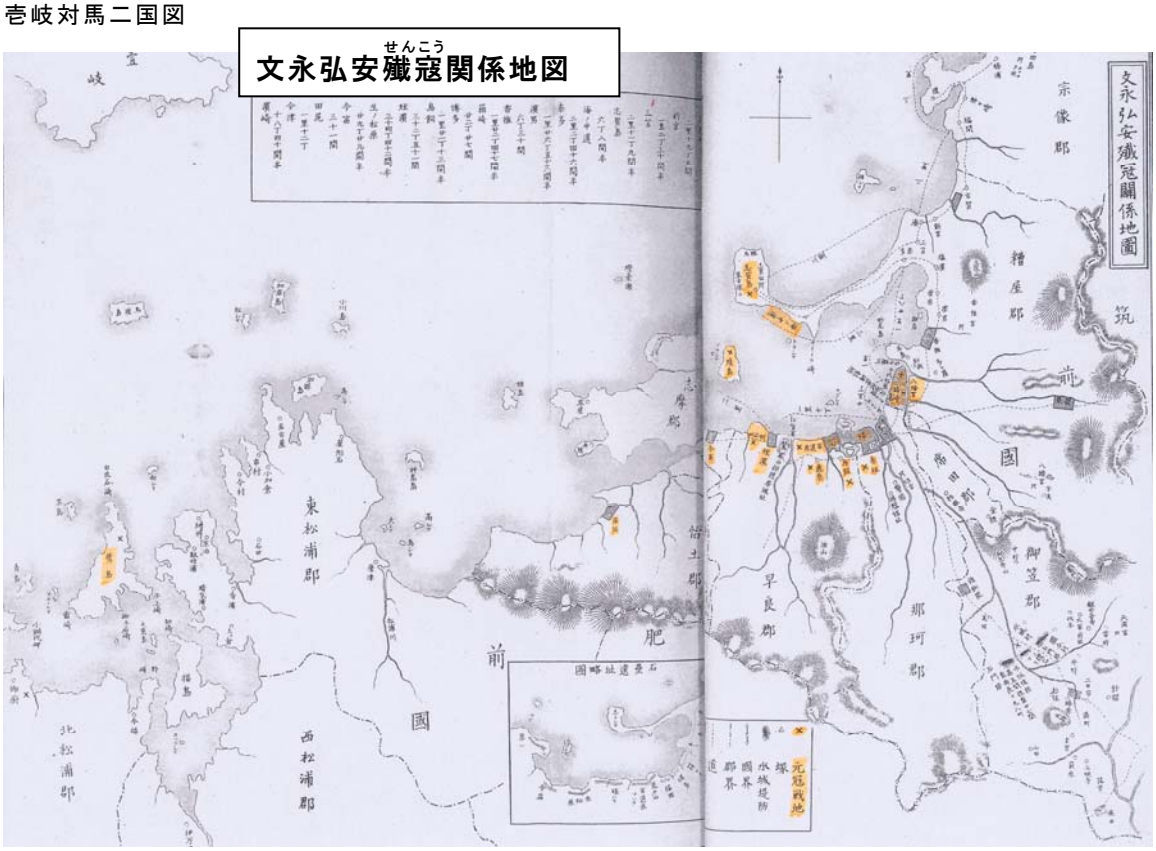
当時の帆船速度の詳細はわからないが、平均時速７キロ、４ノット弱となる。朝６時に出れば昼の１時過ぎには対馬に到着する。よって、１０月３日出発は、その日３日夕には到着していることになる。従って１０月５日夕方小茂田浜上陸は時間かかり過ぎており時間差が合わない。蒙古・高麗軍は３日から５日にかけて対馬島内の異なる港津(現地には記録がない)に到着して、守護所の征圧に日数がかかれば、５日になったとすれば日時はあう。と、ある。



日本高麗航程及元疆(さかい)略図　(『伏敵編』より)

高麗正史の記述・下記図参照　　正史『高麗史』には《征日本至一岐島撃殺千余級》とあり、対馬の記述は全くない。正史『高麗史』に記述がない事と合わせ、対馬での戦闘は局地的であっても、全島を挙げての戦いでは無かったと推測できる。対馬から高麗約５０km、博多約８０kmの距離と近く、そのため対馬は海の向こうに親睦の歴史は長く、親高麗・親日本の両面を備えていた。宗右馬允(朝廷の馬の官吏)は少弐代官であったけれど、陪臣であり、関東御家人ではない。右馬允だから朝廷・大宰府には出仕した。通常の御家人とは異なり、より近い高麗・釜山に出府していた可能性もある。対馬島民の大半は、親しい高麗を受け容れていたし、後世云われるように、島をあげての激戦は無かったと想定する。と、服部英雄氏はのべている。筆者も同感である。

壱岐対馬二国図



文永弘安殲寇関係地図　　博多湾一帯の地図　　（『伏敵編』より）

『絵詞』では博多湾から鷹島への距離を曖昧にしている　　博多湾から、左端に鷹島があ

り、その距離は１２０㎞となる。当時の船足は１２０キロも離れている鷹島へ行くには２日を要したという。博多湾周辺は、御家人の築地石造成に携わったその防塁カ所に御家人衆が、警備に張り付いていた事を想定すれば、外海(玄界灘)を回って鷹島に出陣は簡単にいかない。この鷹島に出陣したのは、松浦党や五島列島の御家人衆と思われる。この距離説に疑問を呈しているのは、『蒙古襲来』服部英雄氏である。

蒙古佛像縮模・から想定されること

蒙古・高麗軍が対馬に持ち込んだことではなく、交易等の関係で持ち込まれたようである。勿論、漂着物も、侵攻時にもあったかも知れない。蒙古佛縮模・対馬国下県郡樫根村観音堂安置　（『伏敵編』より）

『伏敵編』の蒙古佛図解　蒙古佛ハ、対馬国上懸郡樫根村観音堂ニ在り、今十六体ヲ有ス、木理堅緻ニシテ五葉松ニ似タリ、全体淡茶褐色ヲ帯ヒ、面部粉彩ノ痕ヲ在ス、重量最モ低シ、伝ヘ云フ、文永蒙古人齎ス所、或ハ云フ朝鮮人海ニ弃(す)テ、享徳年中、佐須浦ニ漂到セシモノト。

「津島(つしま)記事」下懸郡佐須郷樫根村観音堂ニ佛像数多アリ、是レ高麗ヨリ海ニ捨テシ佛ナリシカ。按ずるに朝鮮の太祖大王、國を建てし後、高麗佛法を信しける故亡ひし佛法を斥(しりぞ)けたり、思うに高麗の佛像、朝鮮に残居けるを、此後に至り廃禁せしものならん、右ハ朝鮮の代に李成桂(りせいけい)(太宗８年の元軍武官)開國の后の事も、前稱に依て皆高麗と記したり、享徳年中。佐須浦ニ流レ寄リシニ依テ。堂内ニ安置ス。俗説に文永の乱、蒙古持来りし佛像なりと云て、蒙古と称す、其事は似たれとも談なり、成職公の御判状を不レ(レ点)見の失なり、○　按、佐須浦は即ち小茂田浜にして、蒙古来襲の地、成職公は宗氏の祖なり、(小文字表記は二行書きの個所)

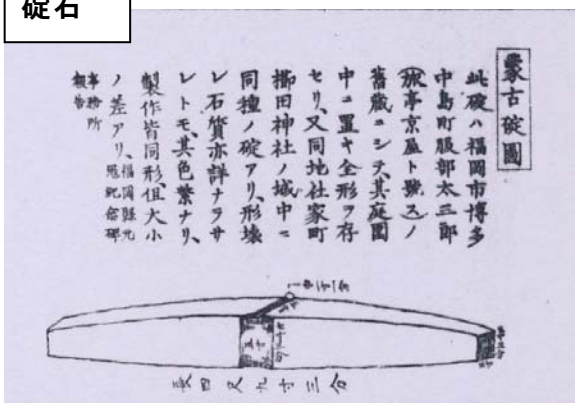
［按］(めぐらす)蒙古佛、何國ノ物タルヲ知ラス、享徳年中対馬ニ漂到ス。享徳ハ文永ヲ距ル百九十ノ後ニ在リ。而テ之ヲ蒙古佛ト称スル者ハ、相伝フ文永年中蒙古人ノ齎ス所ト。其説口碑ニ起り、抑(そもそも)元ハ朔方(さくほう)(北方)ニ起リ。其俗佛教ヲ崇(あがめる)尚スルコト甚シク、忽必烈(フビライ)(クビライ)、西僧入思巴土番薩斯迦人ノ学徳ヲ信シ。即位ノ後、尊テ國師ト為

シ。玉印を授ケ、又命シテ蒙古新字ヲ創作セシメ、其死スルニ当テハ、(皇天之下一人之上宣文輔治大聖至徳普覚眞智佑國如意大寶王西天佛子大元帝師)ノ號ヲ授ケタリ。又宣政院正使以下ノ官。皆僧徒ヲ以テ副師臣ト為シ、其以下僧俗並用井テ。軍民其続理ニ属セリ。其事元史ニ詳ナリ。彼固リ佛道ノ我邦ニ行ハルルヲ知リ。如智、寧一山等ノ僧侶ヲ國使ニ代ヘ用井シコトアリ、文永年間使命ノ達セサルヲ以テ。緇流(僧侶仲間)ニ託シ、佛像経論等ノ物ヲ贈リテ。多方我意ヲ迎ヘシコトアリシモ知ル可ラス。佛像ノ名、蒙古ニ関係アルヲ以テ、此ニ附載シテ他日ノ考ヲ俟ツ。(『伏敵編』巻之二終章)

唐人塚

唐人塚図　(『伏敵編』)

碇石



元軍艦の碇石　(『伏敵編』)

⑤ 対馬郷土誌拾い読み

『厳原町誌』から宗氏と大宰府の関係について考える。蒼い狼と白い女鹿を祖神とした神話を語る蒙古族が、空前の世界帝国を建て、その東征軍が高麗国に侵入したのは 1231 年のことである。以来５次にわたる東征軍が高麗国を征服したのは 1258 年となる。２７年の間、高麗国は抵抗したが、「虜えられし男女、無慮(おおよそ)２０万６千８百余人」、殺戮されたるもの数知れず、「骸骨、野を覆う」と『高麗史』巻 24・高宗 41 年条に記す。この情報は当然日本にも達していたはずで、いち早く知り得たのは対馬であろう。この時、対馬で歴史的政変が起こった所伝が残り、それは対馬の政治権力が、在庁阿比留氏から地頭代宗氏へ劇的に移動した事になっている。これは蒙古の脅威を前にして、太宰少弐が断行した強権人事ではなかったのか、と推測されているからである。

近世の著作『宗氏家譜』に「寛元４年(1246)の政変で、大宰府の兵を率いて阿比留在庁を討ち、対馬の地頭になった。」という所伝がある。「宗氏島主権の確立」ついて語ると、対馬では阿比留氏から宗氏への交代劇が行われていた事は、蒙古の脅威に対す

る防衛体制を固めるために、少弐氏が打った一つの手であったかもしれない。

鎌倉幕府による武家政治が始められた時、源頼朝の御家人武藤資頼(すけより)が九州に派遣され、大宰府在庁の執行となって武家による大宰府の支配を進め、嘉禄(かろく)２年(1226)に太宰(だざい)少弐に任命され、子孫はこれを世襲した事から少弐氏となっている。資頼の子資能(すけよし)、その子経資(つねすけ)の代に蒙古襲来があり、経資は総指揮官として陣頭に立った。少弐氏が豊前、筑前、壱岐、対馬の守護職を兼任したことから、対馬支配も国衙(こくが)(政庁)在庁に守護の権力が介入した。この時、対馬の地頭代となったのが宗氏(惟宗(これむね)氏)であった。『宗氏家譜』には、大宰府(少弐氏)に従わない在庁(阿比留氏)を討って、対馬地頭になったというのが所伝なのであるが、その所伝には後世の作為が多く、『宗氏家譜』が作られた時、その編集方針が新しい理念によって立てられたからである。

「宗」(宗氏=そうし)と称した史料の初見は、文永の元寇で戦死した宗資国(そうすけくに)だが、宗氏は在庁官人としての惟宗(これむね)(氏)と、武藤家としての「宗」(氏)を使い分けていた。その惟宗とある史料の初見は建久６年(1195)、その終見は応仁３年(1496)となり、対馬国守護宗貞国(さだくに)が、清玄寺に奉懸(ほうけん)した梵鐘(ぼんしょう)(対馬歴史民俗史料館蔵)に、「国主　惟宗朝臣　貞国」と刻した銘文がある。その後、戦国大名として自立した貞国は、宗氏が主家としてきた少弐氏と決別し惟宗姓を排して平氏を祖とする新しい系図を作らせた。

「地頭代宗資国」は、寛元４年(1246)に宗氏が地頭になったというのは、『宗氏家譜』の作為である。確かな史料で見る限り、対馬地頭代となった初見は宗資国となる。それは『関東評定伝』(幕府の執権・評定衆・引付衆の官歴書)及び厳原町の「斎藤家文書」に見え、「日蓮聖人註画讃(ちゅうがさん)」にも「守護代資国」とある。この資国が文永の役で壮絶な戦死を遂げ、師(いくさ)大明神と崇(あが)められた名将であり、宗氏の礎となった人物である。

資国の名は、少弐資頼の一字をもらってか、『宗氏家譜』では「資(すけ)」を忌避(きひ)(さける)して「助国(すけくに)」と書いている。宗氏は平安時代以来、大宰府の官人として九州に繁栄した惟宗(これむね)の系統であることは疑いない。又、阿比留一族が征伐されたのではなく、政治の職から後退し、その後も在庁、または大掾(だいじょう)(職人・芸能人の名誉号)と称し、祭祀職となった阿比留氏が各地にいたのである。

対馬に於ける「文永の役」　鎌倉幕府は大蒙古国皇帝の６度に亘る国書を拒否し、一度も返辞を与えなかった。国防の最前線となる対馬・壱岐に何の布石も打たず、対馬の少弐氏の大官・宗助国に８０騎、壱岐の平景隆に百騎が配備されていただけで、幕

府は何ら有効な策を講ずる事なく放置していた事は、この時期、鎌倉幕府と地方の国々との国防感覚にズレがあったことを否めない。遂に、文永１１年(1274)夏５月、馬山湾の合浦に集結した大軍は下記のようになる。

元軍。総司令官・都元帥忽敦、副将・洪茶丘、同劉復亨、軍勢２万。高麗軍。司令官・金方慶、軍勢１万数千。９００余隻の軍船に分乗し、秋７月出撃予定が遅れ、１０月３日に合浦を出発。そして、対馬に５日の夕刻、対馬下郡の西海岸佐須浦沖に現れ、国府で警報に接した守護代宗資国は、急使を大宰府に送り、夜行軍で佐須坂を超え、未明に佐須浦に到着、８０余騎を率いて布陣した。夜明けを待って使者を遣わし、来航の理由を尋ねさせようとしたところ、いきなり船上から矢を射かけられ、数隻の軍船から千人程の兵が上陸して、たちまち合戦が始まった。この元軍襲来の情報を伝えた、「日蓮聖人註画讃」巻５「蒙古襲来二十八」に次のように記している。

《十月五日　申の刻(午後四時頃)対馬の佐寸(須)浦に、異国の兵船四百五十艘、三万余人を乗せて寄せ来る。六日朝より厳しい合戦となり、守護代資国等、蒙古を伐取るといえども、資国の子息らことごとく伐死した。十四日、壱岐島に押寄せ、守護代平景隆等、城郭を構えて禦ぎ戦かったが、蒙古乱入の間に景隆自殺。二島の百姓等、男は殺され、女は擒えられ、女は一所に集めて手を結びつけ、舷に縛り付け、虜者は一人として害されざるもの無し。》という状況であったとある。

佐須浦の合戦　『宗氏家譜』に佐須浦の合戦について次のようにある。

《文永十一年甲戌、蒙漢の将、本国を侵す故、筑紫の海辺に防禦の備え有り。助国(資国)兵を率いて対州に来り、厳重に防備を加える。自ら親兵八十騎を領し、州府に居より賊船の来るのを待つ。同年十月、蒙漢元帥忽敦、洪茶丘、兵士二万五千を率い、高麗元帥金方慶、兵士八千を率い、戦艦共九百余艘、高麗の辺浦を解纜(船出)、同月十五日佐須郡小茂田浜に到る。助国即ち兵を率い、州府を発して小茂田に到る。翌早朝、通事の直経男を使となし、戦艦をもって対州に到る志趣を問いたるに、賊兵答えず、直ちに矢を発し、陸に下りる者一千人。助国乃ち麾下の諸軍を指揮し、海陸において戦う。州兵方々より尋ね到る。助国矢を発し、賊を射て数十人を殪す。宗右馬次郎亦前隊の将を射て之を殪す。是において賊兵競い進み陸に下る。助国先駆けて衆を励まし、蒙漢の兵を撃つ。州兵力尽きるまで奮戦し、斬獲甚だ衆しといえども、辰の刻に到り、終に大きく破られ、助国また命を墜す。(原漢文)　※小茂田浜は後世の地名、古

い史料には佐須浦とある。※師大明神を小茂田浜神社と改号したのは明治７年となる。

日本国世界村について　高麗軍が合浦を出て日本の世界村に至り、一戦して壱岐に向かったとあるが、『津島紀略』(陶山訥庵)は、「元兵、対州を犯す。州兵討って之を退く」として『高麗史』を引用しているが、その世界村が何処かについては比定(比べて推定)していない。これに続いて『対州編年略』(藤定房)は「弘安四年六月、蒙古・高麗の賊船対馬島佐賀村に来り、辺海の民を犯す」と記している事から、世界村を佐賀と認識していたものと解される。続いて藤子光は『津島紀略』の欄外に自注の箋(注記メモ)を付し、「異国の書に、世界と称するは佐賀なり、世界は佐賀の訓の訛るなり」と断定した。

『改訂対馬島誌』(日野清三郎)が筑前志賀村とした説は無視できない論旨がある。それは、「高麗・朝鮮の史書には、本島及び壱岐を日本と記すことは殆んど無いことを以て、日本と記せるは九州地方の謂にして、世界村は志賀村の如きにあらざるや」と、ある。

朝鮮史にも「日本対馬島」と書いた例があり、「沙加」と書いた地名も見え、室町時代には島府となった要地であることを思えば、『改訂対馬島誌』の佐賀説批判は再考を要す。また、世界村を壱岐に比定する説もあるが、『壱岐国史』(山口麻太郎)には、東路軍はまず対馬を侵し、２６日に壱岐に向かったと書いている。順路からして、対馬・壱岐・志賀と向かったはずで、まずは「日本対馬島沙加村大明浦」と書くべき所を、対馬島が脱落し、沙加村が世界村に訛ったと考えることが至当であろう。尚、大明神というのは、古く佐賀浦は二肢になっていて、東の方には宗像大明神(現在和多都美神社)があったからだという説もうなずける。

対馬藩お船江跡・対馬藩の御用船を係留した船だまり、「お船屋」とも称する。遺構は寛文３年(1633)の造成し築堤の石積みは当時のもの。正面・倉庫・休息の建物も残っており、壮大な規模を伺うことが

できる。船江跡を見学中、現地の人に、船溜まりの役目は「島へ攻めてくる敵は、「島の衆」が島伝いでやって来ると、守りは早舟で対処する」と、島嶼の攻防の歴史を教えてくれた。

⑥ 矢田一嘯の「蒙古襲来絵図」を拝見する

矢田一嘯の「蒙古襲来絵図」は、主催「福岡県美術館」と特別協力「鎮西身延山本佛寺」による、“よみがえる修復された”「蒙古襲来絵図」展が、平成１７年２月５日に開催されたその資料によるものである。

矢田一嘯は安政５年(1858)横浜に生まれた。明治１５年渡米、帰国後、本邦初の「活人画」(時代衣装を身に着けた役者･芸術家が絵画の中に情景を作る)の背景画制作を手がけ、更に本邦初のパノラマ館(円環状の壁画全体を中央の観覧者に遠大な情景を見せる)は、「上野パノラマ館」で戊辰戦争のパノラマ画を描いて注目を浴びた。矢田は明治２７年頃、福岡に移り住んだ。当時、元寇古戦場の博多に、元寇記念碑を建設する運動が行われ、その運動に賛同した矢田は多くの蒙古襲来絵図を描いた。福岡県浮羽町の本佛寺に伝わる「蒙古襲来絵図」の１４点を矢田が描いたものである。

矢田一嘯の画家に影響を与えたのは、福岡警察署長・湯地丈雄(元寇記念碑・亀山上皇像を建てる)である。当時、「清朝の海軍力」を見せつける国際事件が長崎港で起きたのである。この事件に衝撃を受け、日本国の国防の必要性を痛感した湯地であった。この話に関心がある方は、拙書電子書籍『日露戦争への列強の策謀』前編第１章「日清両国の対立・・・」(Ｐ３～９)を参照してください。

「長崎事件」に触れる　明治１９年(1886)９月、長崎に来航した清国北洋艦隊が起こした、「長崎事件」が起きた。その顛末は、清國は９月８日、ドイツ製の「定遠」「鎮遠」(当時東洋で最大級軍艦)他４隻を、日本國政府の許可なく長崎港に入港させ、水兵をも上陸させた。この水兵たちが酒に酔い大騒ぎを起こし、日本警察、住民らを巻き込んだ大乱闘事件に発展したのである。

日本側の発表では清國側の海軍兵死者１人、負傷者１５人となるが、清國側の発表は死者８人、負傷者４２人の食い違いがあった。日本側の被害は、巡査２人が死亡、負傷者２６人を出した大事件に発展した。この背景には、清國が海軍力を日本へ歴然(海軍力を見せ付ける)とさせる事を狙ったものであった。当時の日本國陸軍総兵力３万２千、清國軍は１百８万、と雲泥の兵力差が現実にあったのである。これ等の國力の

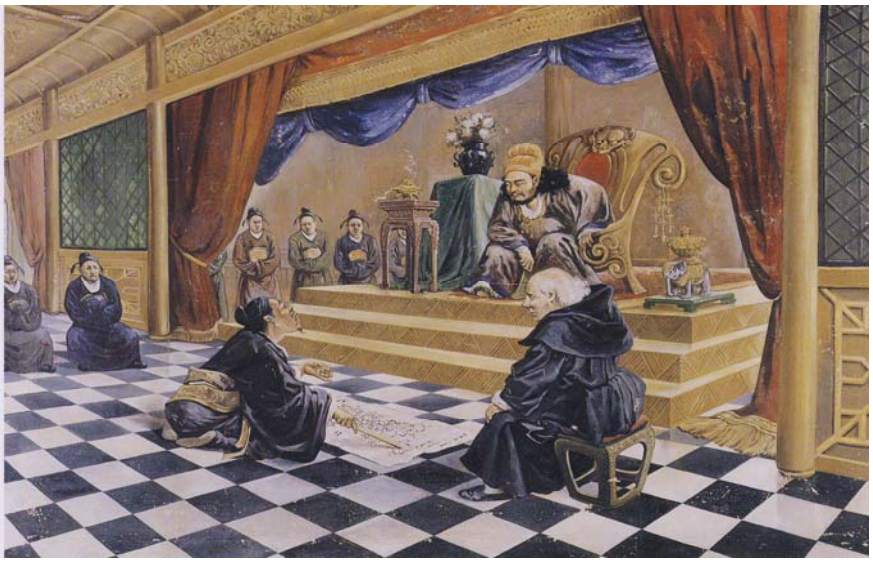
差に、明治政府は官民上げて清國に対する心構えと、国威高揚に乗り出した時代と重なっていたのである。

この暴動事件に衝撃を受けた福岡警察署長・湯地丈雄(『日本と蒙古の対戦・元寇』湯地丈雄・高橋熊太郎同著がある)は、國防意識の必要性を痛感し、日本史上最大の國難でもあった「元寇」に着目した。湯地は明治２１年から、博多に記念碑を建立する運動を、日蓮宗本佛の住職佐野前励(ぜんれい)(日蓮宗宗務総監)とともに満進の結果、明治３７年、福岡市東公園に亀山上皇像と日蓮聖人像の両像を建立した。

矢田は湯地の演説に共感し、元寇図を描くことで事業に参画した。横２７０㎝を誇る「元寇大油絵」や「元寇襲来絵図」など 5 種類の元寇絵図を描いている。矢田が元寇絵図を描くに当たって、場面選択や内容・構成等に湯地丈雄(竹崎季長の墓発見者)の意向が大きく反映している。

同時期に宮内省の山田安栄の編集編纂によって、明治２４年に『伏敵編』が結実し、元寇に関する様々の情報や資料が、湯地から矢田に伝えられ、それが矢田の構想力をかきたて、その筆力をふるって元寇絵図が描かれたのである。

湯地が明治２１年に元寇記念碑建設運動は全国講演に広がり、１００万の人々が聞いたと云う。福岡市東公園に立つ亀山上皇像と日蓮像の建造は湯地丈雄の賜物であり、蒙古襲来絵図は当時の国民に衝撃を与え、国家を守る愛国思想に繋がって行くのである。明治の曙に「幕末の西洋列強の外圧」、「日清・日露戦争の時代」前夜、日本への外圧が高まる時代、日本人は「蒙古襲来絵図」に感情を高ぶらせたのである。



矢田一嘯　　蒙古襲来絵図　「日本征服の意図」油彩・画布　　明治４２年　本佛寺

同　　「対馬の惨状」油彩・画布　明治４２年　本佛寺

同　「戦い終わって」油彩・画布　明治４２年　本佛寺

同　「助国の戦死」油彩・画布　明治４２年　本佛寺

同　元寇大油絵第七図「景資一矢にて敵将劉復亨を射落とす」油布　明治２９年　靖国神社遊就館

敵将劉復亨を射落とす　　蒙古軍大将と思しき大男、栗毛の馬に乗り、１４、５騎とカチ走(歩兵)７０、８０人を従えて追撃して来た。踏み止まる大将景資の射掛けた矢が劉復亨に命中した。後で捕虜の口から知ったことは、「流将公」(劉復亨)という大将であった。高麗の『東国通鑑』では「復亨中流矢」、劉復亨流れ矢に当たったと記している。劉復亨は「征東左副都元帥」万戸(百戸・千戸・万戸の軍団組織)を率いる大将軍である。劉復亨の負傷は「回軍」の口実になっているのである。

(『軍事史学』通巻 152 号・「元寇軍事史の再検証」佐藤和夫著より)

同・「博多上陸」油彩・画布　明治４２年　本佛寺　　※手前の白い雲のようなものは「てつはう」

同　「再度の使者」油彩・画布　明治４２年　本佛寺

元寇大油絵第十一図「蒙古軍ふたたび博多湾に迫る」油彩・画布　明治２９年　靖国神社遊就館

同　「敵艦の覆滅」油彩・画布　明治４２年　本佛寺

おわりにかえて

私事ですが、2011 年に『義経不死伝説の声を聞く』を電子書籍で発信した。その第８章・「モンゴル紀行」の記事の中で、モンゴル国ジンギス・カンを訪ねる旅の際、日本語のガイド、ゾグリド・アズザヤーさんに、「義経伝説」の話を聞いてみた。それが次のような会話がかえってきた。

小生が、「日本の英雄ミナモトヨシツネという武将が、海を渡り大陸に上陸して、やがてモンゴルの大地でジンギス・カンになってモンゴル帝国をつくった、と言う話は聞いたことはないだろうか」と、聞いてみた。

ゲル(移動式ホテルオーナー)のおやじさんとガイドのアズザヤーさんに聞いてみた。２人共、「その話は聞いたことはない」と答えた。

ゲルのおやじさんは「ジンギス・カンの祖先は海を渡ってモンゴル高原にやってきたのだ」と言った。この海の話はモンゴル編の初めの頁で、ジンギス=テンギスは海の意であり、海は「バイカル湖」から来たと述べた。ここで通訳のアズザヤーさんは、

「こちらに伝わる伝説として、日本人の「蒙古斑(はん)」は、クビライ・ハンが日本を攻めたとき(元寇)、船が竜巻にあって沈んでしまった。敗者の将兵が日本に居残り、その将兵の子孫が今の日本人であって、それで「蒙古斑」があるのだ。と、モンゴル人はそう聞き、伝わっている」と話してくれた。

筆者はこれには大笑いをしたが、モンゴル一般では、巷で語られている日本人の「蒙古斑伝説話」は、高い確率でモンゴル国民に信じられていることが判った。

（『義経不死伝説の声を聞く』P113～114 参照）

この話はモンゴル国で聞いた「元寇」の結末であり、従ってこの元寇の結末論は現在のモンゴル一般の方々が抱いている想いとなって、生き続けているのである。蒙古襲来事件は日本人が持つような国難のイメージではなく、モンゴル人にはもう一つの蒙古邦人が日本に生きている、という、明るい想いがモンゴル国民にあるようである。

チンギス・カンの旅でお世話になった通訳のゾグリド・アズザヤーさんに、日本でのモンゴルの話の講演をお願いしたら、快諾していただき、2009 年１月、「歴史研究会」の新春祝賀会で「モンゴルの今昔」のお話をしていただいた。

そして、日本に行ったら、モンゴル国に関わる遺跡を見たい希望を伺っていたので、鎌倉龍口寺の瀧の口にある杜世忠の元史塚に案内した経緯となる。

元寇の元使塚　　神奈川県藤沢市片瀬・常立寺

郷土史『わが住む里』、第三九号・藤沢市中央図書館蔵によれば、《７３５年前、(建治元年・１２７４)、元朝の国使として杜世忠(蒙古人他)５名が博多から鎌倉へ送くられて来た。国使たちは北条時宗将軍に謁見が許され、国書の取り交わしが成立すると期待していたらしい。５基の小輪塔は春風秋風、数百年の間ほとんど不祀の鬼に化さんばかりに顧みられなかったが、大正１４年９月、元使・杜世忠ら５名の幽鬼を弔慰し、併せて文永・弘安役殉難の英霊を慰めた。大供養塔や香炉は「元使塚」６５０年を記念して造ったものである。》との記事があった。

杜世忠の辞世文を読む

《大命を拝して故国を出発の折、あれほどまでに妻子から、成功栄達を望むあまり、帰国の時宜を失わず、悉なく帰国してくれるように言われてきたのに、今、われらは事志と相違し異国の地に果てねばならなくなってしまった》と、無念気持ちを綴っている。

考えてみれば７百余年後、平成の世で初めてモンゴルの方々へ、杜世忠の想いを伝える事ができた辞世でもある。祖国の妻子への情愛と異国の地で果てる若き元国使の無念の気持ちが伝わってくる。

平成１７年、大相撲の朝青龍、白鵬がモンゴルの力士たちが参拝した。同１９年にモンゴル国大統領、エンフバヤル夫妻が参拝にいらして、「長年供養してくださいましてありがとうございます」と常立寺住職に感謝の気持ちを伝えたそうです。モンゴル国に、モンゴル帝国時代の記念碑や墓などが皆無で、そのモンゴル帝国の証しが、日本の国に有るという事も不思議な思いがする。

５人の元国使を拝見すれば、正使・杜世忠３４歳・モンゴル人。次官・何文著３８歳・唐人。撤都魯丁・ウイグル人３２歳。果３２歳ウイグル人。通訳・徐賛３２歳・高麗人と伝わる。

何文著の時世は、「四大、元主なし。五蘊、悉く皆、空。両国、生霊の苦。今日、秋風を斬る」　四大とは仏語で、一切の仏体を構成する地・水・火・風の４元素。五蘊とは仏語で、現象界の存在、五種の原理。色・受・想・行・識の総称、無常・無我と説かれる。何文著は禅(仏教)の心得があったと伝わる。

2009 年「歴史研究会でモンゴル今昔」を講演　　常立寺・元使塚前・ゾグリド・アズザヤーさん

関東から下向した千葉氏の臣、「深堀氏」の話

建久２年（1191）頼朝の挙兵。頼朝の弟範頼が西国に出陣した際、千葉常胤も従軍した事から始まる。鎮西の軍功の恩賞として頼朝から「鎮西守護緋人」と薩摩国高城郡温田浦・同公領・入来院など広大な所領を獲得した。幕府は蒙古襲来時、関東の御家人たちへ九州下向を命じた。肥前国小城郡(佐賀県小城市)を所領によって、千葉介常胤より６代目の千葉介頼胤が博多の防備軍にあたった。

頼胤は「文永の役」によって、建治元年（1275）に亡くなり、１２歳の頼胤の長男宗胤（８代）が、頼胤の後を受けて九州へ下向した。「弘安の役」後も幕府は御家人たちへの関東帰郷を認めず、千葉宗胤そのまま九州に残り、大隈国の守護職として没した。

下総国の宗胤の弟胤宗は下総千葉氏の祖となり、千葉宗胤の子胤貞は肥前国小城郡晴気庄に住み、九州の祖となる。肥前千葉氏は室町時代中期に、家督争いのため勢力は弱体し、少弐氏・竜造寺氏の支配下となる。近世は「鍋島」姓を賜って佐賀藩の一門となった。(資料提供・千葉氏顕彰会・千葉隆典氏より)

千葉氏の主な家臣(下総国から移行した１２家)

肥前国	円城寺氏・千葉常胤の後裔・下総国印旛郡		１２家
同	鎰尼(いちあま)氏	同	１２家
同	金原氏	同	１２家
同	中村氏	同	１２家
同	仁戸田氏	同	１２家
同	原氏	同	１２家

『岩蔵寺過去帳』『九州中世史研究』第３輯・「肥前千葉氏と小京都小城」佐賀県小城町立歴史資料館(平成１３年)

肥前国　東(とう)氏・千葉常胤の後裔・下総国東庄。

肥前国　中村氏・武蔵国秩父郡中村郷。

肥前国　岩部氏・旧栗源町岩部・後裔に「江藤新平」がいる。

肥前国　**深堀氏・和田義盛の甥・深堀(三浦)能仲の後裔。長崎県彼杵(そのぎ)半島の深堀に明治維新まで、鍋島家重臣となっていた。深堀氏の故郷は現千葉県いすみ市となる。**

(資料・岩部氏・深堀氏資料提供・千葉氏研究家・鈴木　佐氏より)

実は２年前のこと、拙書電子書籍の発信『“ジンギス・カン即源義経説”流布の顛末』に「沿海州南部烏蘇利蘇城(ウスリースーチャン)郡紀行」調査紀行日誌、『東京地学協会報告』・「沿海州南部烏蘇利蘇城郡紀行」深堀順蔵著　第１３巻１０号・明治２５年(1892)１月刊行。(国立国会図書館より複写)

この『日誌』内容は明治２１年、深堀順蔵氏が、日本政府の命でロシアの海軍力の膨張に備えて、沿海州・シベリア・満州・朝鮮地域を調査した。その調査内容は、日露が将来起こるかも知れない衝突を想定した地理調査であり、露国の領有実行支配の現状を探索調査した記録が、「沿海州南部烏蘇利蘇城郡紀行」である。地図・地域種族住民調査・生活の業・農業生産種類の調査等は多岐わたる。(電子書籍Ｐ55～59 参照)

この**「深堀氏」**の記事を読まれた長崎市深堀町の深堀順蔵氏の子孫の方(高岡様・女性)から電話あり、深堀順蔵氏(日本帝国陸軍中佐)は高岡様の曾祖母の弟というお話でありました。深堀順蔵氏の子孫の方々側には、「沿海州南部烏蘇利蘇城郡紀行」の著物が残っていないとのお話でした。日露戦争(明治３７年)前夜であるため、この紀行文は東京地学協会の『地理雑誌』から発刊されたもので、軍人、学者、明治政府要人らの閲覧だけであったらしく、一般の方には目に触れない紀行文であったかも知れない。と、云う事で即刻、国会図書館の複写をお送りして喜ばれました。「深堀氏」は桓武平氏の流れ、三浦一族の一派で、千葉県夷隅郡大原町(現いすみ市)深堀の出身で、北条政子の政変「承久の乱」で手柄を挙げ、長崎市の深堀の地を拝領した経緯となっている。

２０年位前の事、長崎市深堀町の深堀氏の子孫の方たちが、千葉県いすみ市大原町へ、祖先の地を探訪に来られました。ところが、千葉県大原町深堀には蒙古襲来期に九州小城に下向した深堀氏関係の記録が全く無く、子孫の方々は無念の訪問となった

ようです。当時、小生は「千葉氏研究会」に席を置いておりましたので、この話は知っておりましたので、高岡様にその件を尋ねたところ、高岡様は「私も、その時のメンバーで、大原町へ伺ったのですが、何もありませんでした」と、お話しておりました。小生は前々から「蒙古襲来」について、論考をまとめたいと考えていたので、この様なお話が２つ行き交った事に不思議な思いに駆られました。

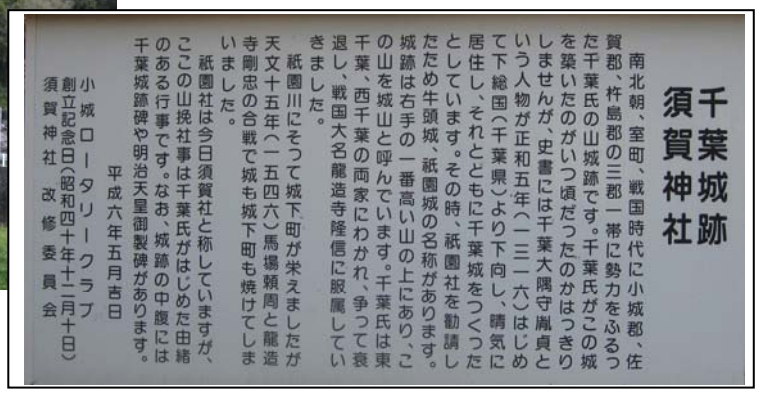
千葉城跡(須賀神社)　佐賀県小城市小城町松尾

南北朝、室町、戦国時代に小城郡、佐賀郡、杵島郡（きしまぐん）の三郡一帯に勢力をもち千葉氏の山城跡となっている。小城市は羊羹の名産地でも有名となる。

―終―

2017年12月22日　冬至

千葉城跡は須賀神社内となる



千葉城跡
須賀神社

南北朝、室町、戦国時代に小城郡、佐賀郡、杵島郡の三郡一帯に勢力をふるった千葉氏の山城跡です。千葉氏がこの城を築いたのがいつ頃だったのかはっきりしませんが、史書には千葉大隅守胤貞という人物が正和五年（一三一六）はじめて下総国（千葉県）より下向し、晴気に居住し、それとともに千葉城をつくったとしています。その時、祇園社を勧請したため牛頭城、祇園城の名称があります。城跡は右手の一番高い山の上にあり、この山を城山と呼んでいます。千葉氏は東千葉、西千葉の両家にわかれ、争って衰退し、戦国大名龍造寺隆信に服属していきました。

祇園川にそって城下町が栄えましたが天文十五年（一五四六）馬場頼周と龍造寺剛忠の合戦で城も城下町も焼けてしまいました。

祇園社は今日須賀社と称していますが、ここの山挽社事は千葉氏がはじめた由緒のある行事です。なお、城跡の中腹には千葉城跡碑や明治天皇御製碑があります。

平成六年五月吉日

小城ロータリークラブ
創立記念日（昭和四十年十二月十日）
須賀神社　改修委員会

自己紹介　　池田　勝宣（かつのぶ）　1942 年・神奈川県藤沢市生まれ

電子書籍版『義経不死伝説の声を聞く』2011・5

同　　『仏教伝来の道物語』2011・12

同　　『“ジンギスカン即源義経説”流布の顛末』2014・4

同　　『日露戦争への列強の策謀』2016・6

同　　『手宮・フゴッペ洞窟壁画人は何処からきたのか』2017・1

同　　『アムール下流域ヌルガン都司（とし）と永寧寺碑と先住民族たち』2017・6

同　　『蒙古襲来考』　　2017・12